

寝屋川市所在

讃良郡条里遺跡 (その1)

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



1 調査地遠景（南から）



2 A区溝27全景（南東から）



1 A区溝27出土 絵馬315



2 A区溝27出土 絵馬316

序 文

財団法人大阪府文化財センターでは、北河内を北東から南西へと斜めに縦断する第二京阪道路（大阪北道路）の建設予定地内で発掘調査を実施しています。

本報告の調査対象地は、枚方丘陵から河内平野に移行する地点に位置します。枚方丘陵は、各時代の指標となる資料を伴う旧知の遺跡が点在する事で知られており、それらの遺跡では旧石器時代あるいは縄文時代といった極めて古い時代の遺物が数多く出土する傾向が見られます。当時、この地域が良好な狩場に恵まれ、生活条件の安定した環境であった事が窺えます。そして、時代が降って古代になりますと、秦氏を代表とする渡来系氏族がこの地域に移り住み、朝鮮半島系の文物や生活様式など、当時としては最先端の様々な技術をもたらした事でも知られています。

本報告で特筆すべき成果には、後世の遺構に包含していたものですが、縄文時代前期の土器と共に、大阪府内でも数例に限られている縄文時代早期後半の条痕文土器が出土している事、また、井堰を設けた奈良時代中期から平安時代初頭の溝跡から絵馬を始めとして、人形、齋車、人面墨書土器などの祭祀遺物が多量に出土している事などがあげられます。

殊に、絵馬につきましては、「神馬」の二字は用途を言い得て妙であり、遙かな国から舶来された馬は、体躯巨大、色艶鮮やか、脚は大地を踏み凝らし、耳は百物を聞く。聖性横溢、その故にこそ王者や神の乗り物となります。この絵馬で慈愛の神と崇りの神のどちらに願ひ、樹や幣にどの様に吊り、どの様に祀るのか、考える程に興味深い世界が開けてきます。保存状態の極めて良好な2点の絵馬は希有な例といえますし、今後とも古代の出土絵馬の代表的資料となるであろう貴重な発見であります。

これらの調査成果は、縄文時代については、各時期の周辺遺跡との関係も含めて、より広い範囲での遺跡の性格や展開過程の再考を促しますし、奈良時代についても、これまでの周辺地域の歴史的な性格を大きく塗り替える重要な資料となります。

最後に、調査にあたってご助力、ご支援をいただいた関係諸機関、地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。併せて今後とも本センターの事業を推進していく上で、ご理解とご協力を賜ります様、お願い申し上げます。

平成16年2月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地の内、寝屋川市・四條畷市域に所在する讃良郡条里遺跡の発掘調査報告書である。調査地点は、寝屋川市高宮に所在する。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財センターが以下の体制で実施した。
調査部長玉井 功、調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、調整係技師山元 建、中部調査事務所長藤田憲司、同主査田口宗義、同調査第一係長一瀬和夫、同調査第一係技師長戸満男
3. 現地調査の撮影は調査担当者が行い、遺物の撮影は中部調査事務所主査片山彰一が担当した。
4. 木製品や骨類などの保存処理および樹種鑑定は、中部調査事務所主査山口誠治が担当した。
5. 現地調査は、平成14年3月25日から平成14年12月20日まで実施した。引き続き整理作業は、長戸を遺構整理の担当者とし、中部調査事務所調査第一係技師服部美都里を遺物整理の担当者として、中部調査事務所（平成15年5月まで）、京阪支所交野分室（平成15年6月から）で行い、平成16年2月27日、本書の刊行をもって完了した。
6. 現地調査および整理作業にあたっては、関係諸機関、地元関係各位をはじめとして、以下の方々から多くの御指導ならびに御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である（順不同、敬称略）。
小野山 節（京都大学）、柴原永遠男（大阪市立大学）、泉 拓良（奈良大学）、喜谷美宣（大阪国際大学）、坂井秀弥（文化庁）、堀江門也・松岡良憲・宮崎泰史（大阪府教育委員会）、塩山剛之・濱田延光（寝屋川市教育委員会）、岡村勝行・吉市 晃（財団法人大阪府文化財協会）、小森俊寛・南 孝雄（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、西谷 隆（秋田市教育委員会）、櫻村友延・猪狩みち子（財団法人いわき市教育文化事業団）
7. 現地調査および整理作業にあたっては、下記の本センター職員から数々の教示と協力を頂き、また多くの専門調査員・非常勤職員から協力を得た。記して感謝の意を表する次第である（順不同）。
井上智博・前田義明・田中龍男・木下保明・黒須亜希子・江浦 洋・鈴木廣司・出口 勲・南出俊彦（以上、職員）、多賀晴司・島田裕弘・宮本飛鳥・小暮律子・仁田恵子・島内洋二・三浦基行（以上、専門調査員）、乾 義子・内海 新・橋村一也・泊 清治郎・松井肇子・水取康人・米子千智・奥村孝恵・遠山美樹子・十河友子・田山停子・宮本史子・伊達佳代・大矢祐司・村岡浩康・山田久美・松本直美・文谷由紀江・久木真美・井上教子・松下知世・田中正子（以上、非常勤職員）
8. 本調査では、以下の自然科学的分野からの分析を実施し、その結果を本書第4章に掲載した。
花粉分析
株式会社バレオ・ラボ 新山雅弘

珪藻分析
放射性炭素年代測定

株式会社バレオ・ラボ 藤根 久
株式会社バレオ・ラボ 山形秀樹

9. 本調査では、木製品絵馬・人形の複製を株式会社京都科学に依頼して製作した。
10. 本書の編集は、長戸が行った。本文執筆は、長戸が第Ⅰ章～第Ⅲ章第3節と第Ⅴ章を、服部が第Ⅲ章第4節の一部を担当した。但し、第Ⅲ章第4節の絵馬と獣骨類に関しては長戸が担当した。文章中の表現法や仮名遣いなどは、執筆者の意向を尊重して、敢えて統一していない。
11. 本調査に関わる資料・記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 発掘調査および本書で使用した座標は、国土交通省平面直角座標系第Ⅵ座標系による国土座標に則り、座標値は日本測地系に準拠した。世界測地系の座標値は、遺構平面全体図の四隅に斜体文字で示した。共に単位はメートルである。遺構図での単位表記は省略した。
2. 地形図および遺構実測図に付した方位は、全て座標北を示す。
3. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均水位（T.P.）を使用し、単位はメートルで表した。
4. 調査区の地区割は、財団法人大阪文化財センター「遺跡調査基本マニュアル」1988年に基づいた。
5. 土色の表記は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖第24版2002年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に依拠した。
6. 遺構断面図および立面図を作成した位置については、平面図に鉤形で示し、方向を矢印で表した。
7. 遺構名・遺構番号については、原則的に現地調査時に使用したものを踏襲し、変更した場合は本文中にその説明を加えた。
8. 遺物実測図の縮尺は、原則的に土器・瓦類を4分の1とした。その他については、挿図中の縮尺スケールを参照されたい。遺物写真の縮尺は、不同である。
9. 図版の順序は、本文と同様、古い時代の遺構・遺物から順次掲載し、遺物出土状況の説明文では、人面墨書土器の呼称を人面土器と略称した。

目 次

巻頭図版

巻頭図版1 遺跡

- 1 調査地遠景
- 2 A区溝27全景

巻頭図版2 遺物

- 1 A区溝27出土 絵馬315
- 2 A区溝27出土 絵馬316

序 文

財団法人 大阪府文化財センター 理事長 水野正好

例 言 凡 例

第I章 調査に至る経緯	1
第II章 遺跡の位置と環境	2
第III章 調査成果	4
第1節 調査方法	4
第2節 基本層序	6
第3節 検出遺構	7
第4節 出土遺物	21
第1項 出土遺物の概略	21
第2項 古墳時代以前	21
第3項 奈良時代～平安時代	28
第4項 鎌倉時代以降	49
第5項 小結	49
第IV章 自然科学分析	51
第1節 讚良郡奈里遺跡の花粉化石群集	51
第2節 讚良郡奈里遺跡堆積物中の珪藻化石群集	53
第3節 放射性炭素年代測定〔1〕	56
第4節 放射性炭素年代測定〔2〕	58
第V章 まとめ	60

挿 図 目 次

図1	調査位置図	1
図2	周辺遺跡分布図	2
図3	調査地周辺地形図	4
図4	調査区配置図	5
図5	基本層位図	6
図6	A区 第5遺構面全体図・イヌガヤ381出土状況図	8
図7	A・B区 第4遺構面全体図	10
図8	A区 第4遺構面 溝27検出状況・主要遺物出土分布図	11
図9	A区 第4遺構面 溝27北壁・セクション1 (a-a') 断面図	12
図10	A区 第4遺構面 溝27堰2枕列1～3検出状況図	13・14
図11	A区 第4遺構面 溝27遺物出土状況図	16
図12	A・B区 第4遺構面 獣骨出土状況図	17
図13	A区 第3遺構面 獣足跡検出状況図	18
図14	A区 第2遺構面 小溝群検出状況平面図	18
図15	A・B区 第1遺構面全体図	19
図16	出土遺物1 縄文土器〔1〕	22
図17	出土遺物2 縄文土器〔2〕	23
図18	出土遺物3 古墳時代土器	27
図19	出土遺物4 奈良時代以降の土師器	30
図20	出土遺物5 奈良時代以降の土師器・須恵器	31
図21	出土遺物6 軒平瓦	34
図22	出土遺物7 人面墨書土器〔1〕	36
図23	出土遺物8 人面墨書土器〔2〕	37
図24	出土遺物9 人面墨書土器〔3〕	38
図25	出土遺物10 人面墨書土器〔4〕	39
図26	出土遺物11 人面墨書土器〔5〕	40
図27	出土遺物12 絵馬	44
図28	出土遺物13 人形 齋串 木簡	45
図29	出土遺物14 獣骨	48

表 目 次

表1	花粉化石産出一覧表	52
----	-----------	----

表2	堆積物中の珪藻化石産出表	55
表3	放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果〔1〕	56
表4	放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果〔2〕	58

図 版 目 次

図版扉	A区 第4遺構面 溝27他出土 人面墨書土器 集合写真
図版1	A-2・3区 下層確認トレンチ・イヌガヤ出土状況 (縄文時代)
	1 A-2・3区 イヌガヤ381出土状況〔1〕(北から)
	2 A-2・3区 イヌガヤ381出土状況〔2〕(北から)
	3 A-2・3区 イヌガヤ381下端部 (西南から)
	4 A-2・3区 イヌガヤ381と根株出土状況 (西南から)
	5 A-2・3区 下層確認トレンチ南壁断面 (北東から)
図版2	A-1区 第5遺構面 全景〔1〕 (古墳時代以前)
	1 A-1区 第5遺構面 全景〔1〕(上が北)
図版3	A-2・3・4区 第5遺構面 全景〔2〕 (古墳時代以前)
	1 A-2・3・4区 第5遺構面 全景〔2〕(右上が北)
図版4	A区 第5遺構面 遺構検出状況 (古墳時代以前)
	1 A-2・3・4区 溝33検出状況 (東南から)
	2 A-1区 溝19検出状況 (西北から)
	3 A-3区 風倒木1 検出状況 (南から)
	4 A-3区 風倒木1 セクション断面 (西から)
	5 A-3区 風倒木2 検出状況 (南から)
	6 A-3区 風倒木2 セクション断面 (西から)
	7 A-3・4区 第5遺構面 調査区西壁断面 (南東から)
	8 A-2区 第5遺構面 調査区北壁断面 (南東から)
図版5	A-1区 第4遺構面 全景〔1〕 (奈良時代～平安時代)
	1 A-1区 第4遺構面 全景〔1〕(右上が北)
図版6	A-1・2区 第4遺構面 全景〔2〕 (奈良時代～平安時代)
	1 A-1・2区 第4遺構面 全景〔2〕(右上が北)
図版7	A・B区 第4遺構面 全景〔3〕・遺構検出状況〔1〕 (奈良時代～平安時代)
	1 A-2・3・4区 第4遺構面 全景 (南東から)
	2 B-1区 第4遺構面 全景 (東から)
	3 A-1・2区 第4遺構面 溝27検出状況 (南東から)
	4 A-1・2区 第4遺構面 溝27検出状況 (北西から)
	5 A-1・2区 溝27堰2 南部検出状況 (東北から)

6 A-1・2区 溝27堰2北部検出状況(東北から)

7 A-2区 溝27北壁断面(南から)

8 A-1区 溝27セクション1断面(南東から)

図版8 A区 第4遺構面 遺構検出状況〔2〕 (奈良時代～平安時代)

1 A-1・2区 溝27堰2杭列1～3検出状況(南東から)

2 A-1・2区 溝27堰2杭列1～3検出状況(西から)

3 A-1・2区 溝27堰2杭列1～3検出状況(東から)

4 A-1区 溝27堰2杭列3上部検出状況(南西から)

5 A-1区 溝27堰2杭列3下部検出状況(南から)

6 A-1区 溝27堰2杭列3下部検出状況(東から)

7 A-1区 溝27堰2杭列1断割り状況(北東から)

8 A-1区 溝27堰2杭列1断割り状況(北東から)

図版9 A区 第4遺構面 遺物出土状況〔1〕 (奈良時代～平安時代)

1 A-1区 溝27 絵馬315・316出土状況(西南から)

2 A-1区 溝27 堰2杭列1・流木・絵馬316検出状況(西南から)

3 A-1区 溝27 絵馬315出土状況(西北から)

4 A-1区 溝27 堰2杭列1・絵馬316検出状況(西北から)

5 A-1区 溝27 絵馬316出土状況(西北から)

図版10 A区 第4遺構面 遺物出土状況〔2〕 (奈良時代～平安時代)

1 A-1区 溝27 人形322出土状況(東から)

2 A-2区 溝27 人形318出土状況(南から)

3 A-2区 溝27 堰2杭列2・人形323検出状況(北から)

4 A-2区 溝27 人形323出土状況(北西から)

5 A-1区 溝27 人形317出土状況(東から)

6 A-1区 溝27 人形319出土状況(北東から)

7 A-1区 溝27 堰2杭列3・人形320・326検出状況(東から)

8 A-1区 溝27 人形320・326出土状況(東北から)

図版11 A区 第4遺構面 遺物出土状況〔3〕 (奈良時代～平安時代)

1 A-1区 溝27 堰2杭列3・人形検出状況(東から)

2 A-1区 溝27 人形321・324・325・327出土状況(東から)

3 A-1区 溝27 斎串328出土状況(西から)

4 A-1区 溝27 木簡330出土状況(北から)

5 A-1区 溝27 曲物301・人面土器出土状況(西から)

6 A-1区 溝27 曲物303出土状況(南東から)

7 A-1区 溝27 堰2杭列1・曲物302検出状況(東から)

8 A-1区 溝27 曲物302出土状況(東から)

図版12 A区 第4遺構面 遺物出土状況〔4〕 (奈良時代～平安時代)

1 A-1区 溝27 堰2杭列1・人面土器183検出状況(北東から)

- 2 A-1区 溝27 人面土器183出土状況（北東から）
- 3 A-2区 溝27 人面土器177出土状況（東から）
- 4 A-2区 溝27 人面土器185出土状況（南から）
- 5 A-2区 溝27 堰2 枕列2・人面土器181検出状況（西から）
- 6 A-2区 溝27 人面土器181出土状況（西から）
- 7 A-1区 溝27 セクション1 人面土器184出土状況（南東から）
- 8 A-1区 溝27 人面土器179出土状況（南から）

図版13 A区 第4遺構面 遺物出土状況〔5〕（奈良時代～平安時代）

- 1 A-1区 溝27 環1 枕列・底部穿孔土器170検出状況（南東から）
- 2 A-1区 溝27 底部穿孔土器170・須恵器蓋117出土状況（北西から）
- 3 A-1区 溝27 環2 枕列1・底部穿孔土器168検出状況（南東から）
- 4 A-1区 溝27 土師器甕126出土状況（西から）
- 5 A-1区 溝27 土師器甕382出土状況（東から）
- 6 A-2区 溝27 土師器鍋139出土状況（南東から）
- 7 A-2区 溝27 須恵器壺158出土状況（南東から）
- 8 A-2区 溝27 軒平瓦164出土状況（南から）

図版14 A・B区 第4遺構面 遺物出土状況〔6〕（奈良時代～平安時代・他）

- 1 A-1区 溝27 獣骨356・肢骨出土状況（南東から）
- 2 A-2区 溝27 獣骨383・肢骨出土状況（北東から）
- 3 B-1区 溝1-2 獣骨384出土状況（北から）
- 4 A-2区 溝27 縄物359出土状況（南東から）
- 5 A-2区 溝27 サルノコシカケ385出土状況（南西から）
- 6 A-2区 溝27 勾玉33出土状況（西から）
- 7 A-1区 溝27B 石鏃30出土状況（北東から）
- 8 A-1区 溝15 石鏃28出土状況（北西から）

図版15 A・B区 第3～1遺構面 全景（鎌倉時代以降）

- 1 A-2区 第3遺構面 全景（南から）
- 2 A-1区 第2遺構面 全景（北から）
- 3 A-3・4区 第1遺構面 全景〔1〕（南東から）
- 4 A-3区 第1遺構面 全景〔2〕（北から）
- 5 A-2区 第1遺構面 全景〔3〕（南から）
- 6 A-1区 第1遺構面 全景〔4〕（北から）
- 7 B-2区 第1遺構面 全景〔5〕（西から）
- 8 B-1区 第1遺構面 全景〔6〕（東から）

図版16 出土遺物（1） 縄文土器〔1〕

図版17 出土遺物（2） 縄文土器〔2〕

図版18 出土遺物（3） 石器〔1〕

図版19 出土遺物（4） 石器〔2〕

- 図版20 出土遺物 (5) 古墳時代土器〔1〕
 図版21 出土遺物 (6) 古墳時代土器〔2〕
 図版22 出土遺物 (7) 埴輪 須恵器(杯・蓋・壺) 墨書土器
 図版23 出土遺物 (8) 土師器(蓋) 須恵器(杯・蓋・壺・他)
 図版24 出土遺物 (9) 土師器(杯・皿)
 図版25 出土遺物 (10) 土師器 須恵器 製塩土器 黒色土器 弥生土器
 図版26 出土遺物 (11) 須恵器(硯・転用硯) 緑軸陶器 軒平瓦
 図版27 出土遺物 (12) 土師器(甕〔1〕)
 図版28 出土遺物 (13) 土師器(甕〔2〕)
 図版29 出土遺物 (14) 土師器(甕〔3〕・他) 底部穿孔土器〔1〕
 図版30 出土遺物 (15) 土師器(甕〔4〕) 底部穿孔土器〔2〕
 図版31 出土遺物 (16) 人面墨書土器〔1〕
 図版32 出土遺物 (17) 人面墨書土器〔2〕
 図版33 出土遺物 (18) 人面墨書土器〔3〕
 図版34 出土遺物 (19) 人面墨書土器〔4〕
 図版35 出土遺物 (20) 人面墨書土器〔5〕
 図版36 出土遺物 (21) 人面墨書土器〔6〕
 図版37 出土遺物 (22) 人面墨書土器〔7〕
 図版38 出土遺物 (23) 人面墨書土器〔8〕
 図版39 出土遺物 (24) 人面墨書土器〔9〕
 図版40 出土遺物 (25) 人面墨書土器〔10〕
 図版41 出土遺物 (26) 人面墨書土器〔11〕
 図版42 出土遺物 (27) 人面墨書土器〔12〕
 図版43 出土遺物 (28) 人面墨書土器〔13〕
 図版44 出土遺物 (29) 人面墨書土器展開写真〔1〕
 図版45 出土遺物 (30) 人面墨書土器展開写真〔2〕
 図版46 出土遺物 (31) 木製品(曲物・柄・篋・他)
 図版47 出土遺物 (32) 木製品(折敷銅板)
 図版48 出土遺物 (33) 木製品(絵馬〔1〕)
 図版49 出土遺物 (34) 木製品(絵馬〔2〕)
 図版50 出土遺物 (35) 木製品(人形〔1〕)
 図版51 出土遺物 (36) 木製品(人形〔2〕・齋串・木簡)
 図版52 出土遺物 (37) 杭
 図版53 出土遺物 (38) 杭先
 図版54 出土遺物 (39) 獸骨〔1〕
 図版55 出土遺物 (40) 獸骨〔2〕
 図版56 出土遺物 (41) 植物遺存体(モモ・ドングリ・他)
 図版57 出土遺物 (42) 瓦器 陶磁器 他

第I章 調査に至る経緯

本調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路建設に伴うものであり、当該地が寝屋川市・四條畷市に所在する讃良郡条里遺跡の東辺部に位置し、埋蔵文化財包蔵地に周知されているため、事前に発掘調査を実施した。

平成8（1996）年度、既に計画路線内では、一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴い、門真市三ツ島地区の三ツ島遺跡において埋蔵文化財確認調査を実施したのを始めとして、平成10（1998）年度には門真市四宮地区と枚方市長尾台地区の確認調査を実施し、平成11（1999）年度には枚方市所在の津田城遺跡と交野市所在の有池遺跡において確認調査を実施した。

平成12（2000）年度から平成13（2001）年度にかけては、讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾竈跡群、長尾東地区などの各地点において確認調査を実施した。その調査成果を受けて、小路遺跡とした調査地は小路遺跡・高宮遺跡・大尾遺跡として遺跡名称を分け、打上遺跡とした調査地は太秦遺跡・太秦古墳群の遺跡範囲に加えた。また、茄子作遺跡とした調査地については上の山遺跡として独立させる扱いとなった。

平成13（2001）年度、高宮遺跡で本格的な発掘調査を開始した。調査では調査区のほぼ全域において旧石器時代から中世にわたる遺構・遺物を数多く確認し、予想以上の成果を得た。

本報告が含まれる平成14（2002）年度分では、前年度に引き続き小路遺跡（その2・3）、高宮遺跡（その2・3）と、新たに讃良郡条里遺跡（その1～3）を加え、これらの3遺跡を7地区に分割し、ほぼ同時に発掘調査を実施した。



図1 調査位置図（1：100,000） 国土地理院1：50,000地形図「大阪東北部」を調整

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

讃良郡条里遺跡は、河内平野の北東部、生駒山地から派生した枚方丘陵の西麓から低地にかけて広がる遺跡である。現在の行政区では遺跡の大半が寝屋川市に所在し、南東部が四条畷市に含まれる。遺跡の規模は東西約1.65km、南北約2.65kmの広範囲に及ぶ。本遺跡は古代河内国讃良郡に施行された条里地割が現在の水田区画によく遺存する事から、条里制遺構の復元が可能な遺跡として周知されている。

本遺跡内での既往の調査例としては、当該地の西北約1.2kmの地点で、平成元（1989）年から平成4（1992）年にかけて大阪府教育委員会が調査を実施しており、古墳時代中期から後期の集落および土塚墓、奈良時代から平安時代および鎌倉時代から室町時代の集落を確認している。更に平成5（1993）年に寝屋川市教育委員会が実施した調査においても、古墳時代中期から後期および鎌倉時代から室町時代の集落を確認しており、これらの成果を受けて両調査地は長保寺遺跡と別名を付けて区別している。

当該地の北西約1.3kmに位置する高宮八丁遺跡では、弥生時代前期から中期の集落を確認しており、また当該地南側に近接する砂道跡では、縄文時代中期から晩期の遺構・遺物を検出している。

平成12（2000）年度から平成13（2001）年度にかけて実施した確認調査では、条里地割に関連する遺構は検出されなかったが、古墳時代後期の遺物や、縄文時代中期の遺構・遺物、アカホヤおよびA T火山灰層などを確認している。



図2 周辺遺跡分布図（1：50,000） 国土地理院1：50,000地形図「大阪東北部」より作成

本遺跡周辺は、旧石器時代以降、古代に至る遺跡が集中して分布する地域であり、以下に概観する。

旧石器時代では、国府型ナイフ形石器が出土した高宮遺跡、讚良川遺跡、讚良川川床遺跡、忍ヶ丘駅前遺跡、有舌尖頭器が出土した南山下遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡などが、当該地の東側から南側にかけて分布している。

縄文時代では、早期の様相については不明であるが、前期の土壌を確認した高宮遺跡、中期初頭から後期初頭の貯蔵穴を検出した讚良川遺跡、後期から晩期まで存続した更良岡山遺跡、晩期の遺物が出土した長保寺遺跡、高宮八丁遺跡などがあげられる。

弥生時代には、前期から中期まで存続する拠点集落を確認した高宮八丁遺跡、中期の集落を確認した太秦遺跡、中期から後期の遺物が表採される小路遺跡、後期の土器が出土する太秦遺跡、池の瀬遺跡、小路遺跡などがある。

古墳時代には、前期初頭の庄内式土器が出土した長保寺遺跡、前期の布留式土器が出土した讚良川遺跡、高宮八丁遺跡、前期の前方後円墳である忍岡古墳、中期から後期の集落を確認した長保寺遺跡、榎遺跡、中期から後期まで継続した太秦古墳群、後期の円墳である寝屋古墳、終末期古墳の石室殿古墳などが知られている。

飛鳥時代には、有力氏族の居館と考えられる大型掘立柱建物を確認した高宮遺跡、白鳳時代には、薬師寺式伽藍配置をもつ高宮廃寺があげられる。高宮廃寺は、白鳳時代初期に創建され、奈良時代に存続したが、奈良時代末から平安時代にかけて火災にあって廃絶し、その後、鎌倉時代に旧講堂跡に大社御祖神社の神宮寺として再建された寺院跡である。

奈良時代には、再び集落が出現した長保寺遺跡、上記の高宮廃寺が見られる程度で、周辺遺跡の様相については不明なところが多い。平安時代には、讚良郡内周辺で際立った遺跡は確認されていないが、隣接する茨田郡では、郡内の中心的存在と推定される集落を確認した高柳遺跡および神田東後遺跡が当該地の西約2.3kmに位置している。

以上の様に、本遺跡周辺に拡がる各遺跡には複合遺跡の様相を呈する事例や長期間にわたり存続する事例も多岐にわたる。今後とも大阪の歴史を解明していく上では欠かす事のできない重要な地域といえる。

<参考文献>

- 寝屋川市教育委員会 1989 寝屋川市文化財資料13「神田東後遺跡」-寝屋川市立西南地区公民館建設に伴う発掘調査概要報告書-
- 寝屋川市教育委員会 1991 寝屋川市文化財資料17「高柳遺跡」-府営高柳住宅建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-
- 寝屋川市教育委員会 1992 寝屋川市文化財資料18「高宮八丁遺跡Ⅱ」-第2次および第3次発掘調査概要報告書-
- 寝屋川市教育委員会 1993 寝屋川市文化財資料19「長保寺遺跡」-(株)伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-
- 財団法人大阪府文化財センター 2002 (財)大阪府文化財センター調査報告書第77集「讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾齋郡群、長尾東地区」一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

第三章 調査成果

第1節 調査方法

今回の讀良郡条里遺跡の発掘調査は3地区に分割し、讀良郡条里遺跡、讀良郡条里遺跡（その2）、讀良郡条里遺跡（その3）の調査を同時に実施した。本調査の名称については、事業契約名に分割名称は付記されていないが、本報告では讀良郡条里遺跡（その1）として扱う事とする。

讀良郡条里遺跡（その1）の調査は、平成14年3月25日に着工、5月23日から機械掘削を開始し、平成14年12月20日に竣工した。施工計画では工期終了が平成14年9月30日であったが、検出遺構や調査対象土量が当初予定を大幅に上回った事により、工期を延長した。

調査対象地の既往状況は、棚田造成による水田として利用されており、対象地内では棚田の段差によってほぼ中央部で東西の地表高が分かれる状態であった。部分的に西半部で盛土による造成が施されていたが、建物基礎などに伴う攪乱はほとんど見受けられなかった。

対象地の周囲は、北側の西に送電線鉄塔、北側の東に水田と畑地、東側は里道、南側は市道小路・笠松線に面し、西側は北流する幅1.5～2.0mの幹線水路と接していた。対象地内の北部には、西流する暗渠構造の水路が東西方向に横断し、西側の幹線水路に合流していた。

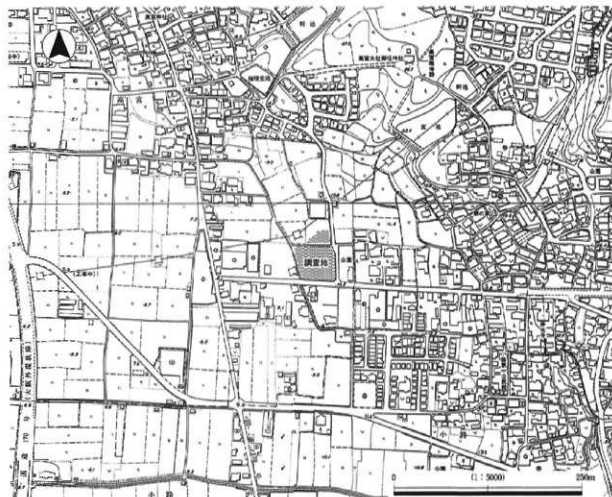


図3 調査地周辺地形図

調査区の設定は、この東西水路の南側をA区、北側をB区として区別した。上述の平成12年度確認調査で設定した21トレンチと22トレンチの位置は、A区西半部に含まれる事になった。

最終遺構面の面積は、A区1,975.95㎡、B区243.03㎡となり、調査区全体では2,218.98㎡となった。

調査の工程は、A区では先ず東半部から開始し、これをA-1区として調査した。次に、当初の計画では反転して西半部の調査に移行する予定であったが、今回はA-1区で検出した大型遺構である溝27の全体状況を把握する目的から、西半部の掘削を南北で2面に分ける事とし、A-1区溝27検出部分とA-2区とした西半部北側を同時に調査した。

その後、A-3区として西半部南側を、A-4区として西半部北側西の補足分を調査したが、A-2区の最終面で検出した溝33がA-3区にまたがるため、最終段階ではA-2区南部とA-3・4区を同時に調査した。以上の様に、A区の調査工程では大型遺構の検出を優先した事から、予定した掘削単位で順次展開する事が難しく、進捗状況がやや複雑なものとなった。

B区では西半部から掘削を開始し、これをB-1区としたが、調査区内中央部では上述した東西方向の現水路の取水口から北側の耕作地に延伸する南北方向のU型側溝が付設されており、この側溝を確保するため、これより西側をB-1-1区、東側をB-1-2区として調査した。次にB区の東半部へ反転してB-2区として調査した。

発掘調査は、先ず盛土および現代耕土などを機械掘削で除去し、以下を調査面として人力掘削に転換した。掘削深度は、平成12(2000)年度に実施した確認調査の成果に基づき、標準深度を機械掘削-0.3m、人力掘削-0.5mとした。人力掘削での掘り下げにあたっては、各層準ごとに掘り分けながら出土遺物を収集し、各々の層位上面においては遺構の確認および検出に努めた。遺構や遺物が出土した際には慎重に掘削し、状況に応じて写真撮影や実測図面などを記録作成しながら調査を進めた。

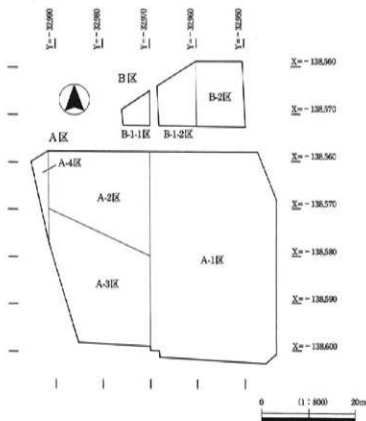


図4 調査区配置図

第2節 基本層序

本調査地は、生駒山地から派生した丘陵の南西麓で、北東から南西に傾斜する扇状地性微高地上に位置し、平坦地にかけて緩く下降する傾斜変換部の末端にあたる。周辺ではこの緩い傾斜面に棚田造成された水田が展開しており、本調査区においても、おそらく最下段と思われる棚田の区画段差がA区およびB区で南北方向に確認された。各調査区の現地表高は、A区東半部が標高8.89m、A区西半部が標高8.62m、B区東半部が標高9.28m、B区西半部が標高8.59mを測った。

本調査区の基本的で主要な層序を列記すると、①耕土、②近世遺物包含層、③中世遺物包含層、④中世～古代遺物包含層、⑤古代堆積層、⑥縄文時代包含層の6層に大別できる。①耕土は、黒褐色粘質土層と同層が酸化して明黄褐色を呈した床土で構成され、層厚0.2～0.3mを測った。②近世遺物包含層は、灰黄褐色砂質粘土層を主体にした均質な土層である。近世の棚田造成に伴う整地層と考えられ、A-1区の区画段差付近では、下層の大型遺構溝27の影響により層厚1.0m以上を測る部分があった。この整地層の上面および上層部では、耕作に伴う小溝群や区画溝を検出したため、簡略的な記録作成を行い、第1遺構面および第2遺構面として扱った。③中世遺物包含層で明瞭なものは、A区北壁沿いに検出されている灰白色砂層で、流路などに伴う流水堆積層と考えられる。またA-1区では獣足跡を部分的に検出したため、中世の遺構面に対応すると考え第3遺構面として扱った。④中世～古代遺物包含層は、黒褐色粘質土を主体にする土層で、上層では中世の遺物、下層では平安時代前期から中期の遺物が少量ながら一定量出土する。下層遺構である溝27などの影響による落ち込みの整地に伴う土層である。

奈良時代中期から平安時代初頭の溝27・28などが成立する第4遺構面のベース層（⑤層）は、淡青灰色泥砂や淡黄灰色泥砂などの混成層で、表面に砂質分が広がる層厚の薄い堆積層である。一時期の生活面と判断されるが、出土遺物が皆無であり、層位関係から平安時代初頭を遡る時期と推定している。第5遺構面のベース層（⑥層）は黄灰色から青灰色の粘質土層で、石籬やササカイト剥片を包含する事や、検出遺物の層位関係ならびに下層の堆積状況などから縄文時代から古墳時代にかけての堆積層と推定される。また、溝27のベース層には縄文時代の流路状堆積が確認される事から、旧地形の谷筋に沿った自然流路は奈良時代中期まで当該地で存続していた可能性が考えられる。

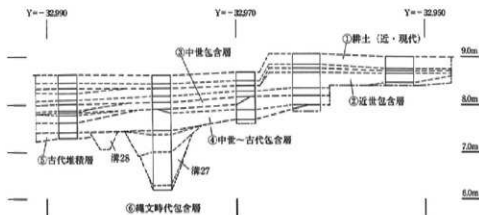


図5 基本層位図

第3節 検出遺構

当該地に遺存する縄文時代早期から中世以降の遺構・遺物に対して、全体的には3～5面の遺構面を調査した。検出遺構には、溝33条、土塼15基、掘込3基、落込10基などがあり、他に溝内に設置された井堰2基がある。本節では古い時代の遺構面から順を追って報告する。

第5遺構面（図6、図版1～4）

遺構面は、明褐色5YR7/1粘質土層、黄灰色2.5Y4/1粘質土層、暗褐色7.5YR3/3細砂層などの堆積で構成されていた。遺構面の標高はA区の北東隅部で8.4m、南東隅部で8.3m、南西隅部で7.8m、北西隅部で7.5mを測る。

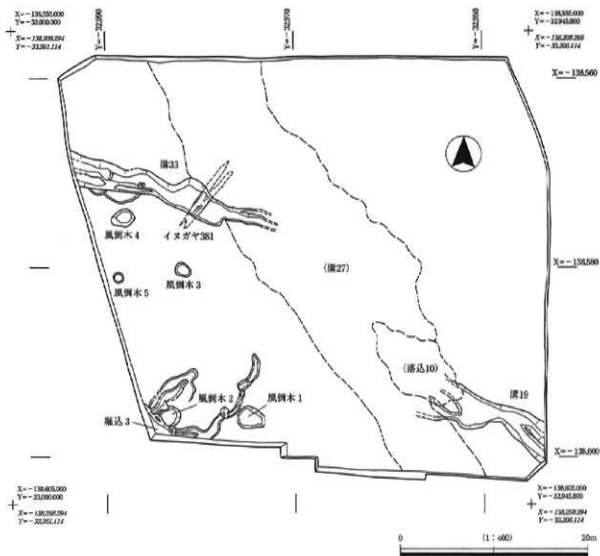
主要遺構は、A区では調査区の北西部で溝33、南東隅部で溝19、南西隅部で掘込3などを検出した。他に、西半部で風倒木の痕跡、東半部で南東から北西方向の小水路を数条検出した。B区では地山の黄灰色2.5Y4/1粘質土層を基本的なベースとする最終面を調査したが、遺構を検出していないので、実測図の掲載は省略した。

溝33は、やや北に振って西流するほぼ東西方向の自然流路である。東側は奈良時代中期から平安時代初頭の溝27によって切られていたが、西側は調査区外に延伸していた。溝の形状はやや蛇行しており、規模は幅2.0～3.5m、深さ0.8～0.9m、検出長は約22.0m、検出面は標高7.5～7.7mを測る。堆積土は上層では均質な黒褐色2.5Y3/2粘質土を主体とし、下層では灰色5Y6/1シルトが多く混入していた。出土遺物を検出していないので、遺構の時期は特定できない。溝底面では、溝方向にはほぼ直交する状態でイヌガヤ（犬糞）の倒木を検出した。この倒木によって溝底面には段差が生じており、下流の西側では0.2m程低くなっていた。

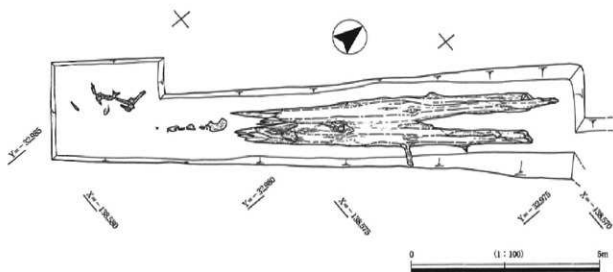
イヌガヤ（381）は、第5遺構面のベース層に包含したものであり、最終的に下層確認トレンチを設定して全体規模を検出したところ、標高7.2m前後から出土したイヌガヤは、北東方向に倒れた幹から枝分かれする二股の部分で、残存長約8.7m、幹回り約3.0mを測る大木である事が判明した。加工痕は認められず、木の両端は腐食した状態であり、西南延長部には腐食した根株の先端を検出した。また、イヌガヤ中央の下部では、更に下層の自然流路の西側部を確認した事により、自然流路の西岸に植わっていたイヌガヤが流路の肩部に倒れ込んだ状態であると判断された。他に、下層確認トレンチでは、第5遺構面のベース層である青灰色5BG6/1粘質土層や灰白色5Y8/2砂層から、縄文時代前期後葉に比定される土器片やサヌカイト剥片、果実類などの植物遺存体が出土した。

溝19は、南東から北西にかけて流れる庄内式併行期の自然流路である。東側は調査区外から延伸しており、西側は奈良時代から平安時代の溝27に切られていた。溝の形状は、幅1.0～2.0mの溝2条以上が束状になって合流し、また分流するといった状態である。溝の最大幅は約4.0m、深さ0.3～0.5m、検出長は約13.5m、検出面は標高8.1～8.3mを測る。堆積土はオリブ黒色5Y3/1泥砂、灰色5Y4/1細砂などが互層堆積していた。遺物の検出状況は、底面から底面付近にかけて比較的多量に出土し、整理箱1箱以上の庄内式併行期を始めとする土器類が出土した。

掘込3は、遺構の東側部から底面にかけて検出した。遺構の本体は調査区外に位置すると想定された。堆積土は上層から中層にかけて暗青灰色5B4/1粘質土、下層に暗青灰色5BG4/1シルトが主体を成している。肩部の形状が人為的に掘り込まれた状態に近いことから、遺構の性格を掘込としたが、下層部の堆積



A区 第5遺構面全体図



イヌガヤ381出土状況

図6 A区 第5遺構面全体図・イヌガヤ381出土状況

状況が流水堆積と判断される事から、流路などの遺構の一部を検出したと考えられる。調査区壁面の断面観察から判断すると、遺構の成立面は第4遺構面まで降る可能性がある(図版4-7)。

風倒木の痕跡は、明瞭な状態を示すものを3基(風倒木1~3)検出し、その他、堆積土の状況が類似し、風倒木痕跡の可能性があるが、やや不明瞭なものを2基(風倒木4・5)検出した。規模は径1.0~3.0m、深さ0.2~0.3m、検出面は標高7.7~8.0mを測る。発見状況では遺構のほぼ中央部に地山の明褐色5YR7/1粘質土層が一字の帯状になって検出され、この帯状部分に直交してセクションを設けて掘り下げると、地山の明褐色粘質土がほぼ直立する様な状態で確認された。この事から、根株に付着した土が樹木の倒壊と共に90度程度転回して埋没したものと理解され、風倒木の痕跡であると判明した。これらの検出状況から、風倒木の方向は、下層で検出した倒木のイヌガヤ381と同様、ほぼ北東方向と推定される。

第4遺構面(図7~12、図版5~14)

遺構面は、暗褐色10YR3/3砂質土、赤褐色5YR4/6粘質土などを主体とした層厚10~20cmの薄い混成層をベースとしており、第5遺構面上に人為的に固め締められた平坦な砂質の整地面である。A区では大型遺構溝27の影響により大半が削剥されており、北東部と南西部に整地面が遺存していた。整地面の標高はA区の北東部で8.4~8.5m、南西部で8.0~8.1m、B区では8.0~8.5mを測る。

主要遺構としては、A区では調査区の中央部で祭祀関連の遺物が多量に出土する奈良時代中期から平安時代初頭の溝27の他、溝24・25・28・29、B区では調査区の南壁沿いに溝1・2などを検出した。

溝27は、やや西に振りながら北へ向かって流れる流路状の遺構である。検出規模は幅5.0~9.0m、深さ1.3~1.5m、検出長は約47.0m、検出面の標高は北側で7.4m、南側で8.1mを測る。溝底面の標高は北側で6.1m、南側で6.8mを測り、南北の比高は肩部と底面ともに北側が0.7m程低くなる状況である。

溝27の堆積土は、黒褐色10YR2/3系の砂泥・泥砂・シルト、灰白色5Y7/1系の微砂・細砂・粗砂などを主体とし、上層では比較的安定した水平堆積に近い状態であるが、下層では激しく攪拌された状態である。洪水などにより短期間に埋没した状況が推測される。図9に示した様に、断面観察によって堆積土を大別すると、北壁では3層(堆積1~3)に分層が可能であり、偶然にも堰1と重なったセクション1では5層(堆積4~8)に分層され、攪拌状態が著しい。現地調査では、上層(第1層)、中層(第2層)、下層(第3層)、最下層(第4層)、底面直上層(第5層)と4~5層に分けて掘り進めた。

溝27には、井堰が2箇所(堰1・2)に設置されていた。井堰の周辺部は、塞ぎ止められた水の影響からか、溝の肩部や底面の形状が整わず、最大幅約9.0m、最深部約1.5mを測る。また、溢れ出した水の影響からか、溝本流の肩部ラインに沿って浅く広がる緩斜面が最大幅約31.0mの規模で検出された。但し、調査区の南北両端部の遺構形状から、井堰構築以前の溝は、幅5.0m前後、深さ約1.3m程の規模であったとみられる。この事から、溝27は人為的に開削され、その後、井堰の構築に伴う水流の攪拌により流路状に変化したものと考えられる。

堰1と堰2は、約6.0m程の間隔で設置されていたが、その新旧の関係、あるいは同時に並存して一体のものとして成立していたのか、等々については明らかにできなかった。この問題については、井堰の構造や、杭列の機能性等の観点からも検討する必要があると考えられる。

堰1は、溝27の南部で検出した。堰の杭列は溝筋に対して北西から南東方向に斜交して設置されており、欄状の杭列が溝本体だけでなく、溝27の肩部東側の落込4・5・9、同じく西側の落込11にまで及

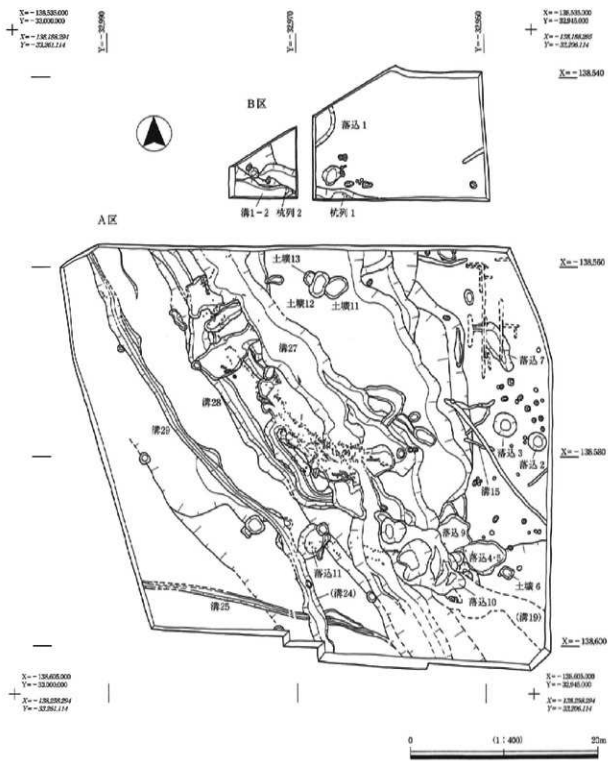


图7 A·B区 第4遺構面全体图

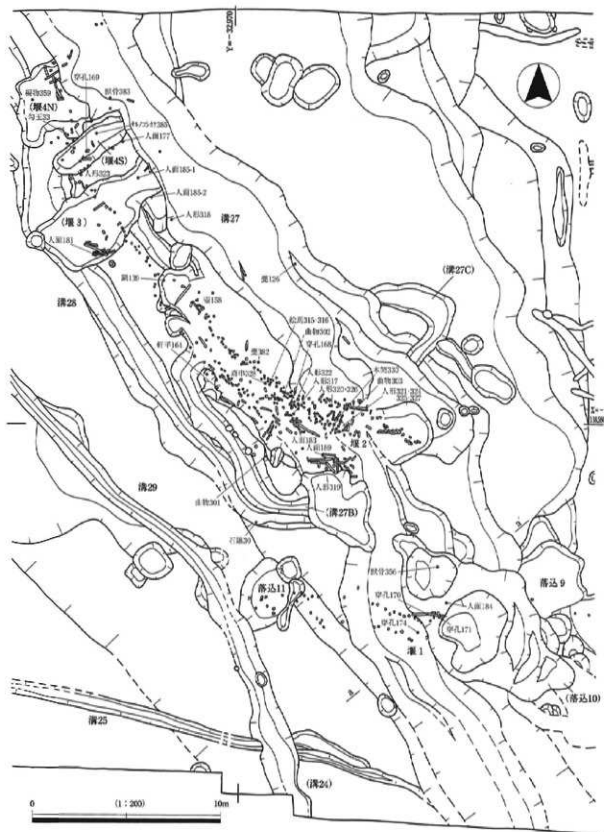
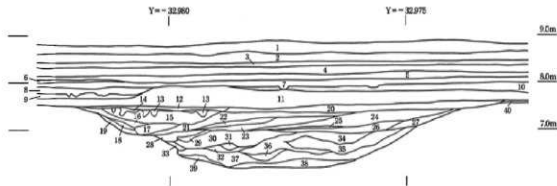
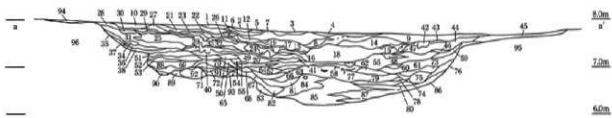


図8 A区 第4遺構面 溝27検出状況・主要遺物出土分布図
 主要遺物出土分布図では、人面黒書土器を人面、底部穿孔土器を穿孔、軒平瓦を軒平と略称した。



1 層礫色	10YR 3/4 粘砂	露土	31 灰褐色	2.5Y 4/1 粘砂	*
2 層礫色	10YR 3/1 粘質土	露土	32 灰褐色	10YR 5/2 シルト	*
3 灰黄褐色	10YR 4/2 粘質土	露土	33 灰黄褐色	10YR 4/2 粘砂	*
4 灰色	5Y 4/1 粘質土	露土	34 灰褐色	7.5Y 3/1 シルト	*
5 に近い灰色	2.5Y 4/1 粘砂	*	35 に近い灰色	2.5Y 6/3 粘砂	*
6 に近い黄褐色	10YR 5/3 粘砂	*	36 マリープ灰色	10Y 3/1 シルト	*
7 黄褐色	2.5Y 6/1 粘砂	*	37 マリープ灰色	5Y 4/1 粘砂	*
8 に近い黄褐色	10YR 7/3 粘砂	溝27-堆積層	38 灰褐色	2.5Y 3/1 粘土	溝27-堆積層 3
9 に近い黄褐色	10YR 4/3 シルト	*	39 灰褐色	10YR 5/1 粘土	*
10 黄褐色	10YR 3/3 粘質土	露土	40 灰黄褐色	10YR 4/3 シルト	*
11 暗褐色	10YR 3/4 粘質土	*	41 灰褐色	2.5Y 7/2 粘砂	*
12 灰黄褐色	10YR 4/2 粘砂	溝27-堆積層 1	42 灰褐色	2.5Y 4/1 シルト	*
13 に近い黄褐色	10YR 7/2 粘砂	*	43 マリープ灰色	5Y 3/1 粘砂	*
14 灰白色	10YR 8/2 粘砂	*	44 灰褐色	3/3/0 シルト	*
15 灰黄褐色	10YR 6/2 粘砂	*	45 マリープ灰色	5Y 1/1 シルト	*
16 灰色	10YR 5/2 シルト	*	46 灰褐色	10YR 5/2 粘砂	*
17 に近い黄褐色	10YR 7/2 粘砂	*	47 灰褐色	2.5Y 7/2 粘砂	*
18 黄褐色	2.5Y 2/2 粘砂	*	48 灰褐色	2.5Y 6/1 粘砂	*
19 灰色	10YR 3/1 粘土	*	49 マリープ灰色	2.5Y 4/1 粘砂	*
20 灰黄褐色	10YR 6/2 粘砂	溝27-堆積層 2	50 マリープ灰色	5Y 4/1 粘砂	*

溝27北壁断面図



1 馬褐色	2.5Y 3/2 粘砂	溝27-堆積層 4	23 淡褐色	5YR 8/2 粘砂	*	65 暗マリアープ灰色	2.5Y 3/3 粘質土	*
2 暗マリアープ灰色	2.5Y 3/3 粘質土	*	24 褐色	7.5Y 7/1 粘質土	*	66 灰褐色	10YR 4/1 粘砂	*
3 暗黄褐色	2.5Y 5/2 砂	*	25 灰白色	7.5Y 7/1 粘質土	*	67 灰褐色	2.5Y 6/1 粘砂	*
4 灰黄褐色	10YR 4/2 粘質土	*	26 淡褐色	2.5Y 2/1 シルト	*	68 灰色	5Y 4/1 砂	*
5 に近い黄褐色	10YR 5/4 砂	*	27 暗褐色	10Y 5/1 粘質土	*	69 灰白色	10YR 8/3 砂	*
6 暗褐色	10YR 4/1 シルト	*	28 マリープ灰色	10Y 3/2 粘質土	*	70 淡褐色	10YR 2/2 粘質土	*
7 暗褐色	7.5YR 3/1 粘質土	*	29 淡褐色	7.5Y 7/1 シルト	*	71 に近い黄褐色	10YR 6/4 砂	*
8 に近い褐色	7.5YR 2/2 砂	*	30 黄褐色	2.5Y 4/1 砂	*	72 淡褐色	2.5Y 3/1 粘質土	*
9 褐色	7.5Y 2/1 粘質土	*	31 灰色	5/3/0 粘質土	*	73 灰色	5Y 6/1 シルト	*
10 灰色	5Y 4/1 粘質土	*	32 に近い黄褐色	10YR 6/4 粘砂	*	74 マリープ灰色	5Y 3/1 粘質土	*
11 灰黄褐色	10YR 5/2 粘質土	溝27-堆積層 1	33 暗褐色	2.5Y 6/2 粘砂	*	75 マリープ灰色	5Y 2/1 粘質土	*
12 褐色	5Y 2/1 粘質土	*	34 暗褐色	10YR 4/1 粘質土	*	76 黄褐色	5YR 3/1 粘質土	*
13 淡褐色	10YR 2/3 粘砂	*	35 に近い黄褐色	10YR 6/4 粘砂	溝27-堆積層 6	77 灰白色	5Y 7/1 粘砂	*
14 淡褐色	10YR 2/2 粘質土	*	36 灰色	2.5Y 2/1 粘質土	*	78 灰黄褐色	7.5YR 6/3 粘砂	*
15 に近い黄褐色	10YR 7/2 粘砂	*	37 暗褐色	10YR 2/3 粘質土	*	79 灰白色	10YR 5/1 粘砂	*
16 に近い黄褐色	2.5Y 4/4 粘質土	*	38 暗褐色	10YR 5/2 粘質土	*	80 灰色	2.5Y 4/1 砂	*
17 灰白色	2.5Y 8/1 砂	*	39 灰色	7.5Y 4/1 粘砂	*	81 に近い黄褐色	10YR 6/3 粘砂	*
18 淡褐色	10YR 2/3 粘質土	*	40 黄褐色	2.5Y 4/1 砂	*	82 灰色	7.5Y 2/1 粘質土	*
19 淡褐色	2.5Y 3/2 粘質土	*	41 灰色	5/3/0 粘質土	*	83 暗褐色	10Y 2/1 粘砂	*
20 灰白色	5Y 7/1 粘砂	*	42 に近い灰色	2.5Y 6/2 砂	*	84 灰白色	5Y 8/2 粘砂	*
21 に近い黄褐色	10YR 8/3 シルト	*	43 灰白色	5Y 2/2 粘砂	*	85 暗黄褐色	5Y 4/1 シルト	溝27-堆積層 7
22 褐色	10Y 2/1 シルト	*	44 黄褐色	10Y 7/1 粘砂	*	86 に近い灰色	7.5YR 6/1 粘砂	*
23 黄褐色	2.5Y 3/2 粘質土	*	45 マリープ灰色	5Y 3/2 粘質土	*	87 灰白色	5YR 6/1 粘砂	*
24 暗黄褐色	2.5YR 3/1 粘質土	*	46 灰白色	5Y 7/1 粘砂	*	88 に近い黄褐色	10YR 5/2 粘砂	溝27-堆積層 8
25 褐色	10Y 2/1 粘質土	*	47 灰白色	10Y 7/2 粘砂	*	89 灰黄褐色	10YR 5/2 粘質土	*
26 灰白色	7.5Y 7/1 粘砂	*	48 暗褐色	5YR 8/1 粘砂	*	90 灰白色	10YR 2/1 粘質土	*
27 灰黄褐色	10YR 4/3 粘質土	*	49 暗褐色	10Y 4/3 粘質土	*	91 灰色	7.5Y 4/1 粘砂	*
28 暗黄褐色	7.5YR 7/1 粘質土	*	50 灰白色	10Y 7/1 粘砂	*	92 暗黄褐色	5Y 2/1 シルト	*
29 暗黄褐色	7.5Y 5/1 シルト	*	51 暗黄褐色	7.5YR 3/1 粘質土	*	93 暗黄褐色	5YR 4/3 粘質土	露土
30 暗黄褐色	2.5Y 4/2 粘質土	*	52 暗黄褐色	2.5YR 7/2 粘砂	*	94 暗黄褐色	10YR 3/3 粘質土	露土
31 マリープ灰色	5Y 2/2 粘質土	*	53 暗黄褐色	7.5YR 4/1 シルト	*	95 暗黄褐色	5Y 3/2 粘質土	露土
32 マリープ灰色	5Y 6/2 粘質土	*	54 灰褐色	7.5Y 5/1 粘砂	*	96 暗黄褐色	5Y 4/1 粘砂	露土

溝27セクション1 (a-a') 断面図

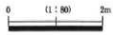


図9 A区 第4遺構面 溝27北壁・セクション1 (a-a') 断面図

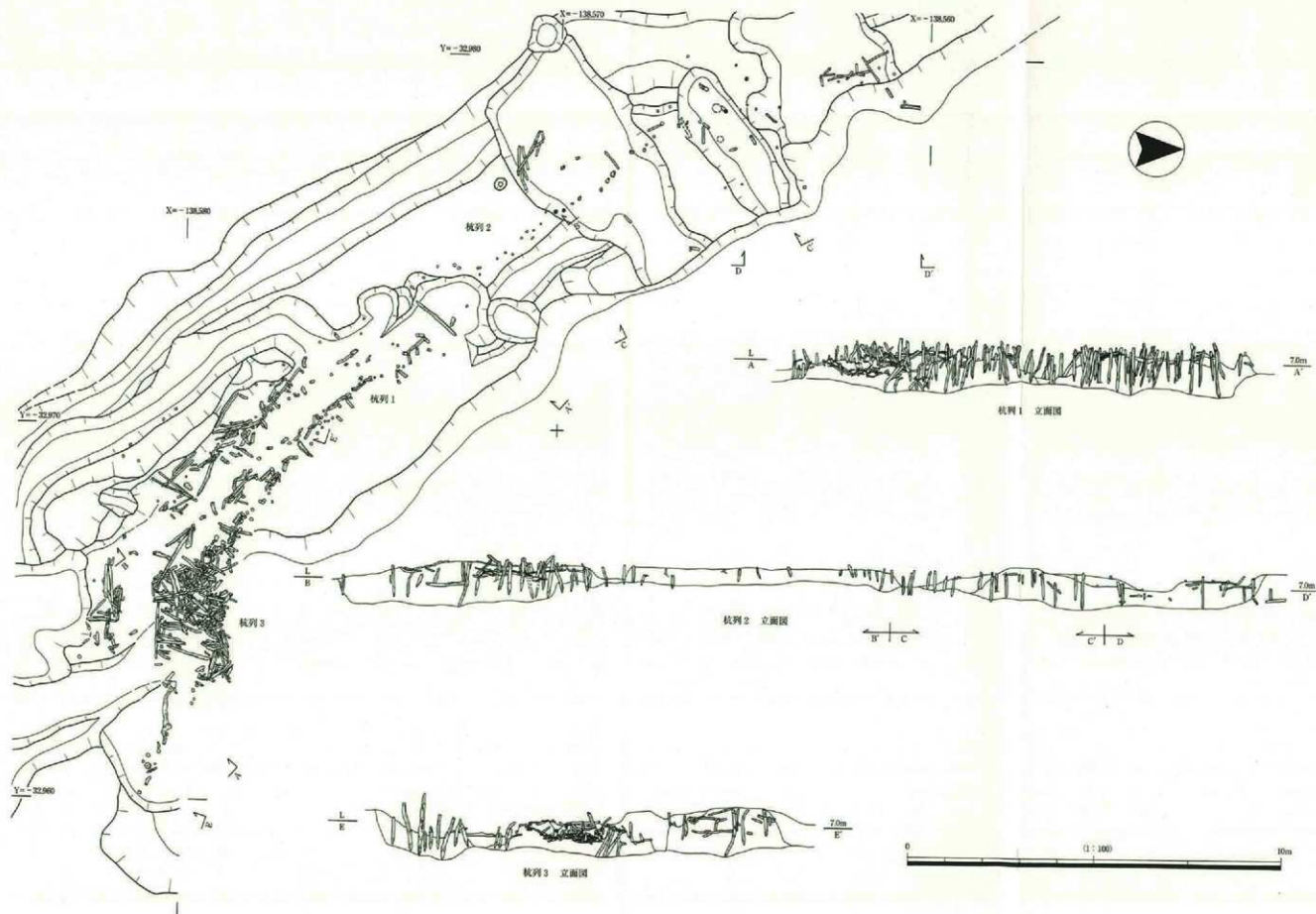


图10 A区 第4道横面 满27层2坑列1~3横出状况图

んでいた。これらの延長部を含めると、堰1の規模は東西約18.0mを測り、基本的には2条の杭列で構成された状況であった。落込4・5・9・11は、底面の浅い落込み状の遺構で、溢れ出した水流によって生じたものと考えられる。溝内の落込10とした部分では杭列が検出されていないが、底部のベース層が微砂層から細砂層を主体とする事から、これらの流砂を伴う激しい水流に巻かれて流失した可能性がある。また、この落込10の部分は庄内式併行期とした溝19との接点部にあたり、溝27の堆積状況とは少し異なっていた。埋没後の溝19に浸透した水が流れ込んでいたか、あるいは溝19の上層部が溝27の時期まで存続して合流していた可能性が考えられる。

堰2は、溝27の北半部で検出した。左岸沿いに設置された北側の部分（杭列1・2）と、堰1と同様、溝筋に斜交して設けられた南側の部分（杭列3）とが「く」の字状に組合わさった状態であった。堰2の規模は、杭列1が長さ12.5m、杭列2が長さ25.5m、杭列3が長さ10.5mを測る。杭列の新旧は、組合わさって重なった部分の切り合い関係から、杭列3→杭列1・2の順で設置されたと考えられる。図版8-4は、倒れ込んだ杭列3の杭に、杭列1の杭が打ち込まれた状況の一例である。

杭列3は、中央部が水流の激しさからか、そのほとんどが北側に倒れ込んでいた。杭列3では東西方向に2条の杭列を確認したが、倒れ込んだ最も北側の杭列の外側では東になった横方向の小枝を検出した事から、もう1条の杭列が更に北側に設けられていたと考えられ、3条の杭列で構成されていた可能性が高い。

杭列3の西側には、溝27から溝28へ分流させる目的で取水口が設けられており、溝27Bとした小溝は、分流した水の水量調節を目的として、溝27に環流する機能をもたせた溝であろうと思われる。東側の溝27Cとした小溝は、遺構形状から溝27Bと同様の溝である可能性も考えられるが、比較的底面が浅い事から、溢れた水流によって自然に生じた溝である可能性が高い。

杭列1・2は、取水堰の構造の一部と理解され、堰の補強を兼ね備えながら護岸の機能を含めて設置された杭列と考えられる。横状の杭列に横方向の小枝を編み渡した状態を部分的ながら数箇所で見出した。杭列1・2の新旧は、杭列1・2が同時に設置されたのか、または杭列2の1条でその機能を果たしていた時期があり、その後杭列1が補強されたのか、あるいは杭列1の1条が設置された後、杭列2が補強されたのか、等々については明らかではない。

溝27北側の堰3、堰4N・Sとした部分については、分流した溝28との間にある窪んだ場所に杭列2のラインから外れて杭が打ち込まれている事から、現地調査の段階で堰2と区別して扱った部分である。最終的には、堰1の落込10と同様、底面のベース層が微砂層から細砂層を主体とする事から水流に削断される左岸部を補強する目的で杭列が設けられたと判断し、堰2の一部分として扱った。

但し、堰4Nと堰4Sの中間部には、杭列2のラインと直交する状態で小規模な杭列1条が確認できる事から、この部分でも溝27Bと同様の環流機能を持たせていたと考えられる。他の直交する小杭列はベース層が砂層である事から、水流に巻かれて流されたのであろうと思われる。

溝28は、溝27堰1の西側から分流され、溝27にほぼ併行して北西方向にのびる溝である。幅1.7~2.5m、深さ0.4~0.6mを測り、延長約34.0mを検出した。溝の北部では、上述した様に溝27堰4N・Sとした部分と接しており、溝27杭列2に直交する小杭列は、この溝の内部にまで及んでいる。

溝29は、溝28の更に西南側で、溝27にほぼ併行してのびる溝である。溝形状は緩く蛇行しており、溝27からは2.3~9.0m、溝28からは3.0~5.0m離れた位置で北西方向に延伸している。遺構規模は幅0.8~2.0m、深さ0.4~0.5mを測り、延長約49.0mを検出した。

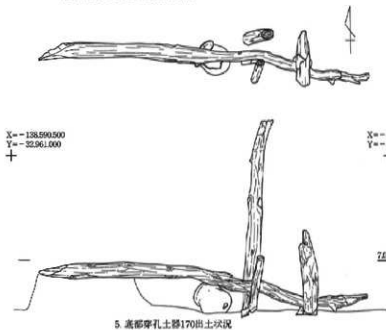
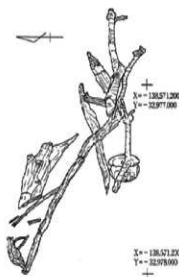
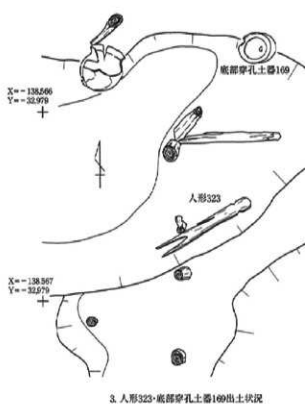
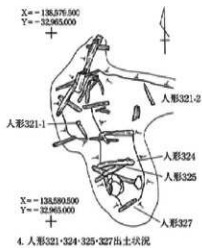
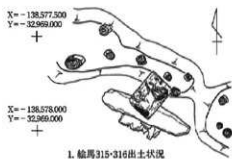


図11 A区 第4遺構面 溝27遺物出土状況図

溝27の出土遺物は、主要遺物出土分布図（図8）、遺物出土状況図（図11）、および遺物出土状況写真（図版9～14）などに示した様に、絵馬を始めとして、人面墨書土器、人形、斎串など祭祀関連遺物の大半が堰の枕列に絡まったり、堰の下流周辺部から出土した。堰の上流部である溝27南端部においては、少量ながら人面墨書土器の出土を確認した。

また、溝28の出土遺物においても人面墨書土器が確認され、この事より、溝28が溝27から分流された溝である事が追証された。更に、人面墨書土器は、溝27西側の左岸部に併走する溝29からも少量出土した。この溝29も溝28と同様に調査区外の上流部で分流されている可能性があり、祭祀場の空間的拡がりを示唆する遺構といえる。

遺物の出土状況について若干具体的に報告しておく。絵馬315・316は、溝27堰2枕列1・2間の底面において小流木を間に挟みながら2点が重なった状態で検出されている。共にほぼ全形が遺存し、且つ保存状態も極めて良好である（図11-1、図版9-1～5）。この出土状況から推察すると、2点の絵馬は堰2付近において重ねて流された可能性が高いと考えられる。この様に保存状態良好な絵馬が2点同時に出土した例は過去になく、全国でも初めての事例である。しかも、上の絵馬（絵馬315）には「神馬」と添え書きされており、下の絵馬（絵馬316）は白馬を描くこれまでの出土例中最大の絵馬である事が判明した。また、添え書きのある絵馬、白馬を描く絵馬としては、共に最古の稀有な出土例である。

曲物301は、人面墨書土器片とほぼ接する状態で溝27堰2西側の上層（第1層）から出土している（図11-2、図版11-5）。大型の人形323は、溝27堰2枕列2の枕に引っ掛かる様にして検出されている（図11-3、図版10-3・4）。人形321・324・325・327の4点は、溝27堰2枕列3の南側下層部で集中的に出土している事から、確定的ではないが、一括して流された状況も想定できる。人形321は、丁度半分に割れて、各々の破片がやや離れた位置で検出されている（図11-4、図版11-1・2）。底部穿孔土器170は、溝27堰1の倒れた枕に挟み込まれた状態で検出されている（図11-5、図版13-1・2）。ほぼ完形の人面墨書土器181は、溝27堰2枕列2の倒れ込んだ枕によって真半分に割られた状態で出土している（図11-6、図版12-5・6）。

B区の第4遺構面では、東西方向の溝と推定される溝1-2の北側肩部から底面を検出した。検出長は約15.5m、検出面の標高は西側7.9m、東側8.2mを測る。溝内には数本ながら枕列が2箇所で見られ、枕列1は護岸の機能を、枕列2は堰の機能を目的に設置された可能性がある。この遺構は南接する現用水路の前身である旧流路、あるいはA区で検出した溝27に合流する可能性があると考えられる。出土遺物から奈良時代後半から平安時代初頭の遺構と推定している。

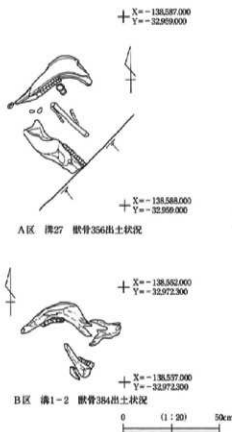


図12 A・B区 第4遺構面 獣骨出土状況図

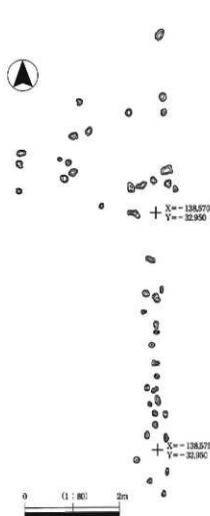


図13 A区 第3遺構面
獣足跡検出状況図

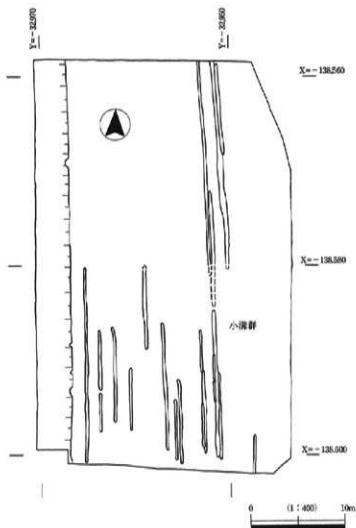


図14 A区 第2遺構面 小溝群検出状況平面図

A区溝27とB区溝1・2では獣骨類の出土が比較的多くみられた。A区溝27では馬の頭骨および下顎骨（獣骨356）、牛の下顎骨（獣骨383）の他、馬ないし牛の肢骨や歯が随所で出土し、また、B区溝1・2の底面では馬の下顎骨（獣骨384）が比較的良好な状態で出土した（図12、図版14-1～3）。

第3遺構面（図13、図版15）

遺構面は、暗褐色10YR3/3粘質土を主体とした土層をベースとする平坦な面で、中世の耕作関連に伴う整地面と考えられる。遺構面の標高は7.8～8.2mを測る。明確な遺構は未検出であるが、A区の北東部で獣足跡を検出し、またA区の北壁沿いにて、ぶい黄褐色10YR7/3粗砂、ぶい黄褐色10YR4/3シルトからなる流水堆積層などを確認した。

獣足跡は、二爪の状態が検出されている事から偶蹄類であり、おそらく耕作関連に用いられた牛の足跡であろうと考えられる。A区北壁沿いの流水堆積層は、南接する東西方向の現用水路の前身である旧流路に関連する可能性が高い。

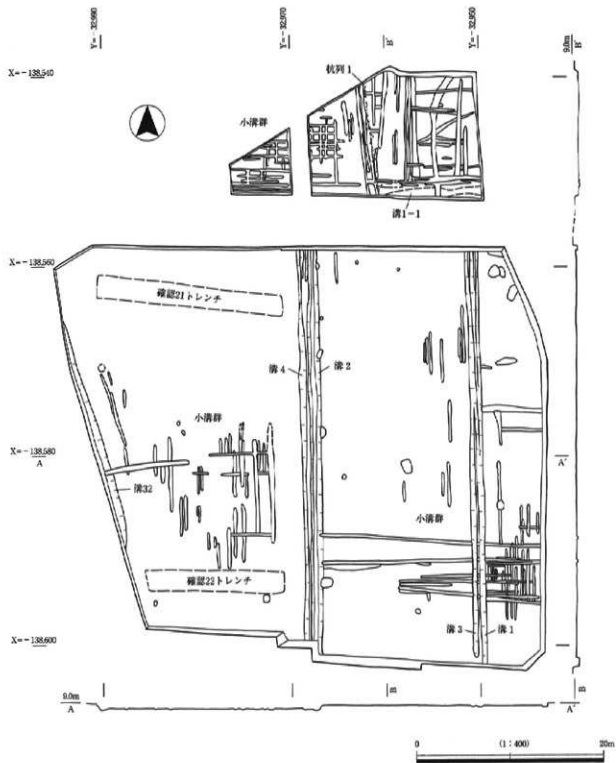


図15 A・B区 第1遺構面全体図

第2遺構面（図14、図版15）

遺構面は、灰色5Y5/1砂泥層、にぶい黄色2.5Y6/1砂礫、にぶい黄褐色10YR5/3細砂、黄灰色2.5Y5/1泥砂などをベースとした平坦な面で、A区東半の棚田の上段部で検出した。当該地における近世の耕作関連に伴う棚田造成の整地層と考えられる。近世後半の遺構については、略測を行ったので簡単に記しておく、遺構面の標高は8.6m前後でほとんど水平に近い状態である。B区ではこの段階で棚田造成は検出されず、次項の第1遺構面以後にB区東半部を高上げて棚田造成された状態を確認した。主な遺構は近世の耕作に伴う犂溝と思われる南北方向の小溝群を検出したが、遺存状態は良好とはいえなかった。

第1遺構面（図15、図版15）

第2遺構面と同様、近世後半と推定される遺構面であるが、簡略的な記録作成を実施したので略述しておく。遺構面は、第2遺構面上面に薄い客土を施して整地し直した状態であり、第2遺構面と同様、灰色5Y5/1砂泥層、にぶい黄色2.5Y6/1砂礫、にぶい黄褐色10YR5/3細砂、黄灰色2.5Y5/1泥砂などをベースとした平坦な面である。遺構面の標高はA区東半の棚田上段部では8.7m、A区西半の棚田下段部では8.4mでほとんど水平に近い状態である。B区では8.3～8.7mを測る。

主な遺構としては、A区では近世以降の耕作に伴う犂溝の痕跡である小溝群や、南北方向の区画溝を検出した。また、調査区西壁沿いに検出した溝32は、東側肩部を部分的に検出したにとどまるが、調査区西側に流れる現在の用水路が擁壁護岸されるまで機能していたと推定される旧水路に関連する可能性がある。

B区では、A区と同様の小溝群や、南北方向の区画溝および杭列1を検出した。小溝群の方向はほぼ正方位に沿うが、区画溝と杭列はやや西に振る状況であった。B区東半の南壁沿いで検出した溝1-1は、第4遺構面で検出した溝1-2と、A区の第3遺構面で確認した北壁沿いの流水堆積層に関連する考えられる。前項で、溝1-2および流水堆積層は、A・B区間に存在する東西方向の現用水路の前身である旧流路に関連する遺構の可能性があったとしたが、溝1-1も同様の可能性が考えられる。

第4節 出土遺物

第1項 出土遺物の概略

讚良郡条里遺跡（その1）では、縄文時代から江戸時代にかけての様々な遺物が出土している。古代を中心として検出された遺構以外に、古代以前の自然流路内堆積土や埋土、および古代以降の整地層また耕作土層にも多岐にわたる遺物が包含され、調査地周辺は古くから遺構と土地利用がなされてきた事が窺われる。

今回の調査によって検出された遺物総量は、現地調査終了時では整理箱にして66箱を数える。その内訳は、土器類50箱、木器類8箱、石製品類2箱、骨類6箱である。この内、主要遺構である溝27の遺物が約77%を占め、他に堰杭類が整理箱にして約42箱分ある。

遺物の大半は、古代に属する土師器や須恵器などである。その他には、縄文土器、弥生土器、縄文時代から弥生時代の石器、古墳時代の土器や埴輪片、中世の陶磁器類や瓦類、近世の陶磁器類などが認められる。本節では、出土遺物の時代順に、古墳時代以前、奈良時代～平安時代、鎌倉時代以降と3項に大別して報告する。

古墳時代以前の出土遺物に関しては、第2項で報告する。

縄文時代の遺物は、讚良郡条里遺跡の他に、周辺の高宮遺跡や小路遺跡などからも多数検出されており、特に前期から中期の遺物は自然流路の砂層などに比較的多く含まれる。本調査では、A区第5遺構面で検出した溝33出土の縄文時代の遺物、および下層確認トレンチ内北東部下層の灰白色砂層から検出された縄文時代前期の土器などである。縄文土器は、A区溝19・27、落込9・10などからも出土している。他に、縄文時代の植物遺存体として、イヌガヤの大木などが検出されている。

また併せて、縄文時代から弥生時代の土器や石器など古墳時代以前の遺物を報告する。また、溝19出土の土師器や、溝27から混入して出土した埴輪片など、古墳時代の遺物についても併せて報告する。

奈良時代～平安時代の出土遺物に関しては、第3項で報告する。

古代の遺物は、A区第4遺構面で検出した溝27を中心とした遺構から出土している遺物群である。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦などの土器・瓦類、曲物、折敷、柄杓、篋状木製品、板状木製品などの木製品、その他、植物遺存体や動物遺存体など多種多様な遺物が認められる。また、祭祀に関連するとみられる土師器の穿孔土器、人面墨書土器、木製品の絵馬、人形、齋申などが特筆される。文字資料としては、わずかながら墨書土器、木簡などが含まれている。

鎌倉時代以降の出土遺物に関しては、第4項で報告する。

古代の遺構面が完全に埋没した時期以降の出土遺物である。溝27が溝としての機能を終焉し、湿地化した黒褐色シルト層内に、平安時代から鎌倉時代の遺物が認められる。第3遺構面では、A区で動物の足跡を検出しているが、出土遺物は認められない。第2遺構面や第1遺構面の隴溝からは石鏃、須恵器、瓦器、土師器、青磁、白磁、紡錘車、近世磁器などが出土している。

以下、各時代の遺物について報告したい。

第2項 古墳時代以前

古代を遡る時期の出土遺物は、縄文土器、縄文時代から弥生時代の石器、古墳時代の土師器、その他にはわずかながら弥生土器と古墳時代の埴輪や須恵器などが認められる。

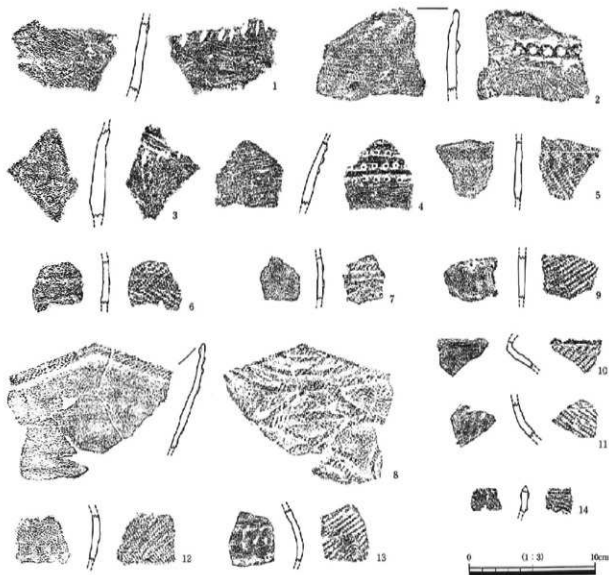


図16 出土遺物1 縄文土器〔1〕

縄文土器 (図16・17、図版16・17-1~25)

縄文土器は、いずれも深鉢であり、総数25点が出土している。出土位置と出土点数および遺物番号は、A区下層確認トレンチ内北東部下層の灰白色砂層に5点(5・13・15・18・19)、A区第5遺構面の溝33に1点(14)、溝19に2点(20・21)、A区第4遺構面の溝27に14点(3・4・7~12・16・17・22~25)、落込9に1点(6)、落込10に2点(1・2)が含まれていた。以下古い時期から順を追って、比定される土器型式別にまとめて報告する。

縄文時代早期は、粕畑式~入海式の3点(1~3)が認められる。1は、外面に爪形状の刻み目を有する繊維土器である。内外面に貝殻条痕が認められる。粕畑式の可能性が高い。2は、貼り付け凸帯上に、上下から交互に押捺している。内外面ともに、貝殻条痕が認められる。上ノ山~入海式の可能性が高い。3は、外面は貝殻条痕を施し、沈線が認められる繊維土器である。内面はナデ調整である。早期に属すると考えられる。

縄文時代前期は、一乗寺南下層式、北白川下層Ⅱ式、北白川下層Ⅱ~Ⅲ式、北白川下層Ⅱ~大歳山式、北白川下層Ⅲ式、大歳山式などが認められる。

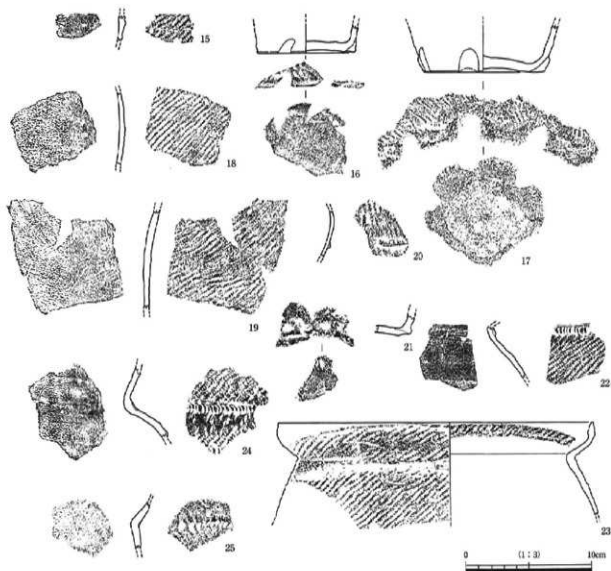


図17 出土遺物2 縄文土器〔2〕

一乗寺南下層式は、1点（4）である。4は、内外面ともに横方向の貝殻条痕が認められる。外面は数条の貼り付け凸帯の間を、円形の刺突文を連続して施すものである。

北白川下層Ⅱ式は、2点（5・6）である。5は、外面にR L縄文、内面は粘土紐部分の指オサエの後にナデ調整が認められる。6は、外面に上段L R下段R Lの羽状縄文を施している。内面はナデ調整である。雲母を含む河内系胎土の模相を呈している。

北白川下層Ⅱ～Ⅲ式は、2点（7・8）である。7は、外面に無節L縄文の後に貼り付け凸帯を施し、内面にはナデ調整が認められる。北白川下層ⅡC式～Ⅲ式併行の時期と考えられる。8は、波状口縁を呈する深鉢である。器高残8.2cm、器厚0.5cmを測る。外面および外面全体の貼り付け凸帯文線上にはL R縄文を施し、内面は丁寧な貝殻条痕が認められる。

北白川下層Ⅱ～大歳山式は、4点（9～12）である。9は、外面はL R縄文を施し、内面には指圧痕が認められる。10は、外面はL R縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。11は、外面はR L縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。12は、外面にR L縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。一部煤が認められる。但し、11・12は、北白川下層Ⅱ乃至は大歳山式とみられる。

北白川下層Ⅲ式は、5点(13~17)である。13は、外面にLR縄文を施し、内面には爪痕や指押が残存する。14は、外面に貼り付け凸帯、内面はナデ調整が認められる。15は、外面はLR縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。16は、菊花状底部を呈する深鉢である。6と同様、河内系胎土の様相を呈している。底部径7.8cm、器高残2.3cmを測る。外内面ともにナデ調整が認められる。17は、16と同様、菊花状底部を呈する。復元によると6箇所菊花と考えられる。底部径9.6cm、器高残3.8cm、器壁は底部0.8cm、体部0.5cmを測る。外面はわずかにRL縄文、内面はナデ調整が認められる。

大歳山式は、6点(18~23)である。18は、外面にLR縄文を施し、全体に煤が付着している。内面は、丁寧なナデ調整が認められる。19は、外面にLR縄文を重複して施し、全体に煤が付着している。内面は、貝殻条痕が認められる。20は、外面に縄文が縦走り、貼り付け凸帯、内面はナデ調整が認められる。21は、菊花状底部を呈する深鉢である。内外面ともにナデ調整である。22は、外面はLR縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。貼り付け凸帯上に、竹管文を施している。23は、口縁径25.5cm、器高残7.4cmを測る深鉢である。外面および口縁部外内面にLR縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。

縄文時代前期から中期にかけては、大歳山~鷹島式の1点(24)、大歳山~船元I式の1点(25)が認められる。24の外面は、LR縄文を施し、貼り付け凸帯上から逆C字形の爪形刺突文が認められる。内面はナデ調整が認められる。25は、摩滅が著しく調整不明である。爪形の幅は狭い間隔である。

縄文時代~弥生時代の石器(図版18・19-26~70)

縄文時代から弥生時代の石器は、総数45点が出土している。出土位置と出土点数および遺物番号は、A区下層確認トレンチ内南西部の青灰色粘質土層に3点(39・55・56)、A区第5遺構面の溝33に3点(34・47・58)、A区第4遺構面の溝15に1点(28)、溝27に29点(26・27・30~33・35~37・40・41・45・48・49・51~54・57・59・61~64・66~70)、溝28に1点(43)、落込10に1点(55)、A区第1遺構面の溝1に1点(29)、A区④中世~古代包含層に1点(38)、A区②近世包含層に1点(42)、B区第4遺構面の溝1-2に1点(50)、落込1に3点(44・46・60)が含まれていた。

本報告では、石器類に関しては写真図版のみの掲載となったが、以下種類別に順を追って報告する。

26は、スクレイパーである。長さ7.1cm、幅3.2cm、厚さ0.7cmを測る。縄文時代前期の可能性があり、A区溝27Bの底面直上層(第5層)に含まれていた。

27は、石錘である。長さ6.5cm、幅2.9cm、厚さ1.2cmを測る。縄文時代から弥生時代とみられるが、特定は難しい。A区溝27の底面直上層(第5層)に含まれていた。

28は、有茎石鏃である。長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。弥生時代に属するとみられる。A区溝15の底面で検出されている。

29・30は、無茎石鏃である。29は、長さ2.1cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。A区溝1の最上層に含まれていた。30は、長さ3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmを測る。A区溝27Bの南壁で検出されている。縄文時代に属するとみられる。

31は、石鏃である。長さ3.7cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測る。A区溝27埋2下層(第3層)に含まれていた。縄文時代に属するとみられる。

32は、磨製石斧である。長さ6.0cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmを測る。縄文時代以降とみられるが、特定は難しい。溝27Bの底面直上層(第5層)に含まれていた。

33は、勾玉である。長さ4.8cm、幅1.7cm、厚さ1.6cmを測る。古墳時代以降とみられるが、32と同様、時代の特定は難しい。溝27上層（第1層）に包含されていた。

これらの他に、縄文時代に属するとみられる削器（34）、楔形石器（35～37）、二次加工の認められる剥片（38～40）や、多くの剥片（41～58）や石核（59～63）などが認められる。いずれも石材はサヌカイトである。

その他、自然石をそのまま利用した礫石器として、敲石（64～69）や台石（70）が認められる。これらは縄文時代～弥生時代に属すると考えられるが、A区下層確認トレンチ内南西部の青灰色粘質土層出土の39・55・56以外は、いずれも古層からの混入遺物であり、時代決定には至らない。

これらの遺物の出土分布状況から、A区溝27ベース層の灰白色砂層が堆積する部分では、縄文時代前期の遺物が多く認められ、縄文時代の自然河川が存在した可能性が高いと考えられる。

南側に隣接する小路遺跡（その2）の下層確認トレンチからは、縄文時代前期の北白川下層Ⅱb～Ⅲ式の土器や、自然流路から旧石器時代の遺物が認められ、また西側の讃良郡条里遺跡（その2）では縄文時代前期の石器製作跡が確認されている。周辺には、縄文時代前期を中心とした遺跡の存在が窺われる。

縄文時代の植物遺存体（図6、図版1～381）

A区第5遺構面の溝33で出土し、下層確認トレンチでその全体を検出したイヌガヤ381や、ドングリなどの果実類が認められる。イヌガヤ381については、第3節検出遺構の第5遺構面の項で既に報告したが、残存長約8.7m、幹回り約3.0mを測る。幹から枝分かれする二股の部分で、加工痕は認められず、木の両端は腐食した状態である。後述の自然科学分析による放射性炭素年代測定の結果、縄文時代前期の植物遺存体であると判明している。ドングリは、A区下層確認トレンチの灰白色砂層から縄文土器や石器と共伴してわずかに出土している。

古墳時代の土器（図18、図版20・21～71～96）

古墳時代の土器は、A区溝19に包含されていた土器群である。溝19の遺構形状は溝2条以上が束状になって合流し、更に分流する状態であり、明瞭な分層が困難であった事から、遺物の取り上げに際しては、溝19A～Dとして次の様に区別している。溝19Aは、検出範囲の東半部で、埋土がオリーブ黒色5Y3/1砂泥を混入する灰色5Y4/1細砂である。溝19Bは、西半部北側で、埋土がオリーブ黒色5Y3/1砂泥を多く混入する灰色5Y4/1細砂である。溝19Cは、西半部南側の分流する部分で、埋土が灰色5Y4/1細砂を含むオリーブ黒色5Y3/1泥砂である。溝19Dは、西南部の分流した溝で、埋土が灰黄褐色10YR 4/2粗砂を含む灰色5Y4/1細砂である。出土遺物は底面から底面付近にかけて比較的多量に出土している。出土遺物の大半は、概ね庄内式併行期の土器群と考えられる。

溝19の出土遺物は、土師器壺、鉢、高杯、器台、甕などである。以下ではこれらの内の26点について報告するが、写真図版あるいは押図だけに限定した遺物は、図版番号あるいはその旨を付記している。また、写真図版では溝19A～Dに区別して掲載している。

71は、短頸壺の口縁部～肩部である。口径12.0cm、器高残9.2cmを測り、外面は口縁部と肩部に竹管文と縦方向の沈線による装飾が認められ、体部には丁寧な横方向のヘラ磨きが認められる。内面は口縁部はナア、体部は粘土紐の巻き上げの接合部分を指で押さえただけで、特に調整は認められない。溝19Bから出土している。

72は、壺の頸部～底部である。口縁部分は欠損している。器高残9.8cmを測り、体部は球形を呈し、最大径10.2cm、底部径3.5cmを測る。外面は全面丁寧なヘラ磨きである。溝19Bから出土している。

73は、丸底の小型鉢乃至は壺の底部である。外面は叩き技法が認められる。器高残4.6cmを測る。溝19Bから出土している。

74は、小型鉢の底部である。底部径4.1cm、器高残5.3cmを測り、外面は1単位2.4cm幅6条の叩き技法が6単位認められ、内面はナデが認められる。溝19Aから出土している。

75は、椀形高杯の口縁部～脚部である。口径12.8cm、器高残8.8cmを測る。内面には磨きが認められる。溝19Bから出土している。

76～81は、高杯の脚部である。79は、脚部残4.2cm、裾部径6.3cmを測る。外面は脚部を指オサエ、裾部の外内面は丁寧なナデ調整である。径0.5cmの小孔部分は4箇所に残り、復元すると5箇所になる。76は、脚部残3.3cmを測る。77は、脚部高8.3cm、脚部接合部分3.1cm、裾部径9.3cmを測る。外面は縦方向の丁寧なナデ、内面は小孔の下以下に横方向のナデが認められる。小孔は3箇所径1.0cmである。78は、脚部残4.3cmを測り、外面は縦方向の丁寧な磨きが認められる。80は、脚部残6.3cmを測り、外面は縦方向の刷毛調整の後、丁寧な磨きが認められ、内面は蜘蛛の巣状を呈した調整である。81は、脚部残5.7cmを測り、縦方向の磨き調整が認められる。溝19Aからは77～80、溝19Bからは76・81が出土している。

82は、器台の脚部である。脚部高5.6cmを測り、脚部接合部分2.4cm、裾部径10.7cmを測る。外面は丁寧な横方向の磨き、内面は刷毛状の工具痕跡に跡に全面指頭圧痕が認められる。小孔は4箇所である。溝19Aから出土している。

83～90は、甕の口縁部である。83は、口径16.6cm、器高残2.8cm、器壁厚さ0.7cmを測る。外内面の調整は、摩耗が著しく不明である。84は、口径15.6cm、器高残7.1cm、器壁厚さ0.5cmを測る。外面には粗い叩き技法が認められる。85は、口径16.6cm、器高残5.2cm、器壁厚さ0.8cmを測る。外面は口縁部分に横ナデ調整、体部は1単位2cm幅5条の叩き技法、内面にはナデと指オサエ痕跡が認められる。86は、口径16.2cm、器高残5.0cm、器壁厚さ0.7cmを測る。外面には粗い叩き技法が認められる（図版未掲載）。87は、口径14.2cm、器高残2.4cm、器壁厚さ0.4cmを測る。口縁端部は立ち上がりが若干内湾する（図版未掲載）。88は、口径13.6cm、器高残5.7cm、器壁厚さ0.6cmを測る。口縁部分の外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目。体部の外面は叩き技法、内面はナデ調整後の指頭圧痕が認められる。89は、口径13.8cm、器高残3.0cm、器壁厚さ0.5cmを測る。口縁端部は丸く、外内面は横ナデが認められる。90は、口径20.4cm、器高残3.5cm、器壁厚さ0.3～0.4cmを測る。口縁端部は立ち上がりが若干内湾する。外内面は横ナデが認められる。わずかに残存する体部は「く」の字状にはりだし、器壁は0.3cmと薄く、外面に刷毛目が認められる。溝19Aからは85、溝19Bからは83・84、溝19Cからは89、溝19Dからは86～88・90が出土している。

91～95は、甕の底部である。91は、底部径5.0cm、器高残2.1cmを測り、外面には叩き技法が認められる。92は、底部径4.7cm、器高残3.5cm、器壁厚さ0.5cmを測る。外面は叩き技法、内面はナデ調整である。93は、底部径4.0cm、器高残2.8cm、器壁厚さ0.8cmを測る。外面は粗い叩き技法で1単位2cm幅3条の叩き技法、内面は蜘蛛の巣状の調整が認められる。94は、底部径3.6～4.1cm、器高残2.7cmを測り、外面は底部円盤を貼り付けた際のナデが認められ、内面も接合の際の横方向の指の圧痕が認められる。95は、底部径3.9cm、器高残3.5cm、器壁厚さ0.7cmを測る。外面は1単位2cm幅5条の叩き技法が6単位認めら

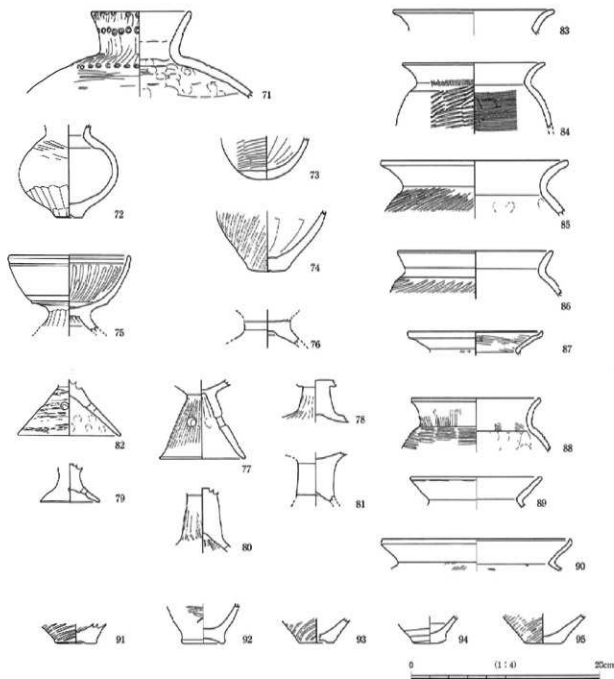


図18 出土遺物3 古墳時代土器

れ、内面は横方向のナデが認められる。溝19Aからは92・93・95、溝19Bからは94、溝19Cからは91が出土している。

96(図版21)は、小型壺の口縁部である。器高残3.2cmを測る。小片のため口径復元は不可能である。溝19Dから出土している。

その他の出土土器(図版22・23・25・97~105・379・380)

古墳時代の遺物は、A区溝19出土の土師器の他に、埴輪や須恵器などが認められる。写真図版に限ら

れるが、以下に報告する。

97 (図版22) は、円筒埴輪片である。摩耗が著しく、遺存状態も良好とは言えない。タガの付近に、円形透かしの一部が認められる。外面調整が遺存しないので刷毛目などの調整が不明ではあるものの、概ね5～6世紀の所産と考えられる。A区溝27内で溝19と切り合う付近に包含されていた。隣接する小路遺跡においても数片の埴輪片が出土しており、高宮遺跡の方形周溝墓や、小路遺跡の方形周溝墓、前方後方形周溝墓などと関連した集団の墓域があった可能性を示唆する遺物である。

98～101 (図版22) は、須恵器壺の口縁部と体部である。波状文を施している。5～6世紀の所産である。98・99はA区①中世～古代遺物包含層、100・101はA区②近世遺物包含層から出土している。

102～104 (図版22) は、須恵器杯である。6世紀末～7世紀前半の所産である。102はA区溝16、103・104はA区溝27に包含されていた。

105 (図版23) は、須恵器甕である。溝27堰2杭列3から出土している。

古墳時代の遺物を多量に包含する遺構は溝19に限られたが、その他の遺構や包含層からも古墳時代の須恵器や埴輪片がわずかながら検出されていることから、周辺は奈良時代以降の溝の開削などに伴って著しい削平がなされている可能性が高いと考えられる。

また、弥生時代の遺物が少量ながら認められる。

379・380 (図版25) は、弥生土器広口壺の口縁である。379は、下垂する口縁に波状文を施している。380は、竹管文を施している。いずれも弥生第V様式である。379はA区溝19D、380はA区溝27堰2杭列3から出土している。

第3項 奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代の遺物は、土師器(杯、皿、蓋、高杯、鍋、銚、甕)、須恵器(杯、杯蓋、蓋、硯、壺)、黒色土器(椀)、緑釉陶器(皿)、製塩土器、瓦(軒平瓦)、木製品(曲物、折敷、柄杓、篋状木製品、板状木製品)などの他、植物遺存体、動物遺存体などが認められる。これらには、特筆すべき遺物として、墨書土器や木簡などの文字資料、祭祀関連とみられる穿孔土器や人面墨書土器などの土器類、絵馬、人形、斎串などの木製品が含まれている。

以下、これらの各種遺物を種類別に順を追って報告する。また、本文中の報告遺物の内、挿図の掲載だけに限定したものは末尾に明記し、写真図版の掲載だけに限定したものは、器種名あるいは遺物番号の後に図版番号を付記している。

土器・瓦類 (図版19～26、図版22～45・106～300)

土師器杯・皿 (図版19・20、図版24・25・106～116) 106～109は、内面に暗文を有する土師器杯Aである。106は、口径17.6cm、器高3.6cmを測る。口縁部は丸く内湾して段を形成している。口縁部内外面は横ナデ調整、底部外面はヘラケズリの後にナデ調整、内面にはナデ調整の後に比較的間隔の開いた粗い斜放射暗文を施している。堰2杭列3最下層(第4層)から出土している。107は、口径17.7cm、器高残3.3cmを測る。形態や技法は106と共通する。内面には斜放射暗文が認められる。A区溝27下層(第3層)から出土している(図版未掲載)。108は、口径18.0cm、器高3.2cmを測る。形態や技法は106と共通する。内面には螺旋と粗い斜放射暗文を施している。A区溝27上層(第1層)から出土している。109 (図版25) は、口径17.0cm、器高2.9cmを測る。形態や技法は106と共通する。内面には螺旋と斜放射

暗文を施している。底部外面に文字とみられる墨書が認められるが、不明瞭である。A区溝27最下層（第4層）から出土している。

110（図版25）は、土師器皿Aである。口径22.0cmを測る。小破片であるので形態的には不明瞭な点もあるが、製作技法は106と共通する。内面には斜放射暗文を施している。A区溝27下層（第3層）から出土している。106～110とほぼ同型式の都城出土の土師器杯・皿は8世紀中葉に比定されているが、地域差などの問題を考慮して8世紀後葉までの時期幅で考えておきたい。

111～116は、土師器杯Cである。111は、口径13.2～13.3cm、器高4.0cmを測る。外面には、横ナデ調整の後、浅い指オサエ痕跡が認められる。底部外面は、回転ヘラ切り後ナデ調整し、内面にはナデ調整が認められる。112は、口径14.0cm、器高3.3cmを測る。111と同様、外面には指オサエ痕跡が認められる。内面はナデ調整である。113は、口径13.3cm、器高4.3cmを測る。底部外面は、回転ヘラ切り後ナデ調整し、内面にはナデ調整が認められる。内外面に有機物の付着が認められる。114は、口径14.0cm、器高4.3cmを測る。外内面ともにナデ調整、底部内面には一定方向のナデ調整が認められる。115は、口径13.4cm、器高4.6cmを測る。外内面にはナデ調整が認められる。116は、口径13.2cm、器高3.8cmを測る。外内面にはナデ調整が認められる。底部内面には一定方向のナデ調整が認められる。これらは、口径がいずれも13～14cm前後で、口縁端部は丸みを持ってやや肥厚し、都城出土の同型式土師器杯Cとは若干異なる地域の特徴を持つが、概ね8世紀代に比定できるとみられ、内面に暗文を有する土師器杯A 106～109などと共伴する土器と考えられる。いずれもA区溝27から検出され、上層（第1層）から115、中層（第2層）から111、下層（第3層）から112・113・116、最下層（第4層）から114が出土している。

土師器蓋（図20、図版23～117） 117は、口径17.8cm、器高2.9cmを測る。天井部は下方外に下がり、口縁部は下方に下る。天井部には板状のつまみが付く。位置的にみて板状のつまみは一对になる可能性がある。天井部外面にはつまみの周囲を中心にしてヘラ磨きが認められ、内面には螺旋暗文が施されている。A区溝27塚1の杭列に絡まって、底部穿孔の土師器甕170（図版25）と共に出土している。

土師器高杯（図版25～118） 118は、高杯の杯部で、口径28.0cmを測る。外面はヘラケズリの後にヘラ磨きを施している。内面はナデ調整の後に斜放射と螺旋の暗文を施している。8世紀代に比定される。A区落込10中層（第2層）から出土している。

土師器甕（図19・20、図版27～30～119～137） 119～130は、土師器の中型甕である。119は、口径15.9cm、体部最大径16.2cm、器高14.3cmを測る。口縁部が短く外反し、最大径を体部に持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は肩部から縦方向の粗い刷毛目調整が認められる。口縁部内面は横ナデ調整、体部内面は横方向のナデ調整が認められる。120は、口径17.1cm、体部最大径18.6cm、器高15.5cmを測る。口縁部が短く立ち上がり、最大径を体部に持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は縦方向の刷毛目調整が認められる。体部内面下半には同心円の当て具痕跡が認められる。121は、口径18.1cm、体部最大径17.6cm、器高残14.9cmを測る。口縁部が緩やかに外反し、最大径を口縁部に持つ甕である。体部外面全体は、粗い刷毛目調整を行っている。口縁内面は横方向のナデ調整、体部内面は横ナデと下半に縦方向の刷毛目調整が認められる。二次的に火を受けており、器壁には剥離部分が多くみられる。122は、口径14.5cm、体部最大径14.9cm、器高残14.6cmを測る。口縁部が外反して外上方に開き、最大径を体部に持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面上方は縦方向、以下には不定横方向の刷毛目調整が認められる。口縁部内面は粗い刷毛目の後にナデ調整、体部内面は丁寧な縦方向のナデ

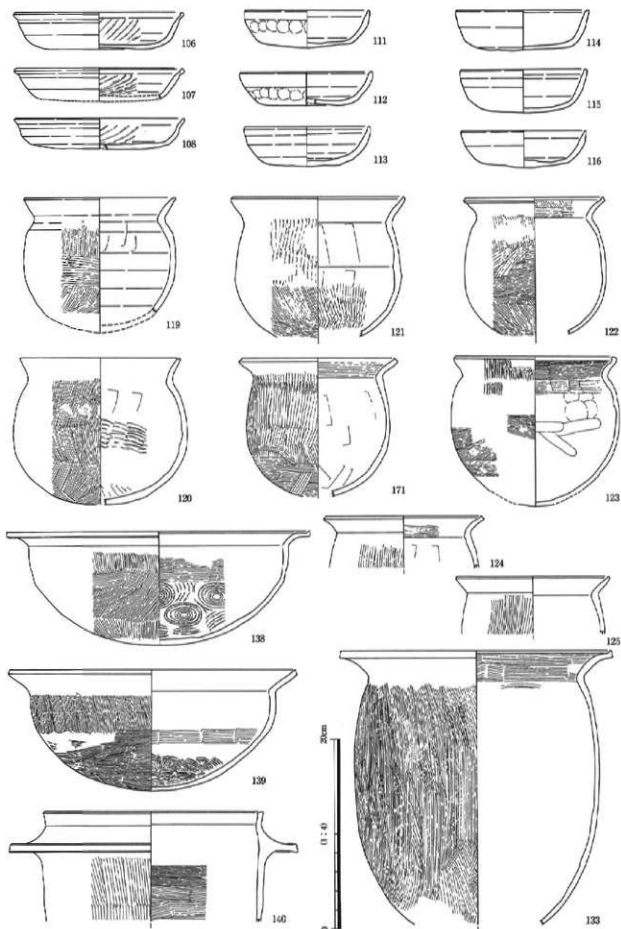


図19 出土遺物 4 奈良時代以降の土師器

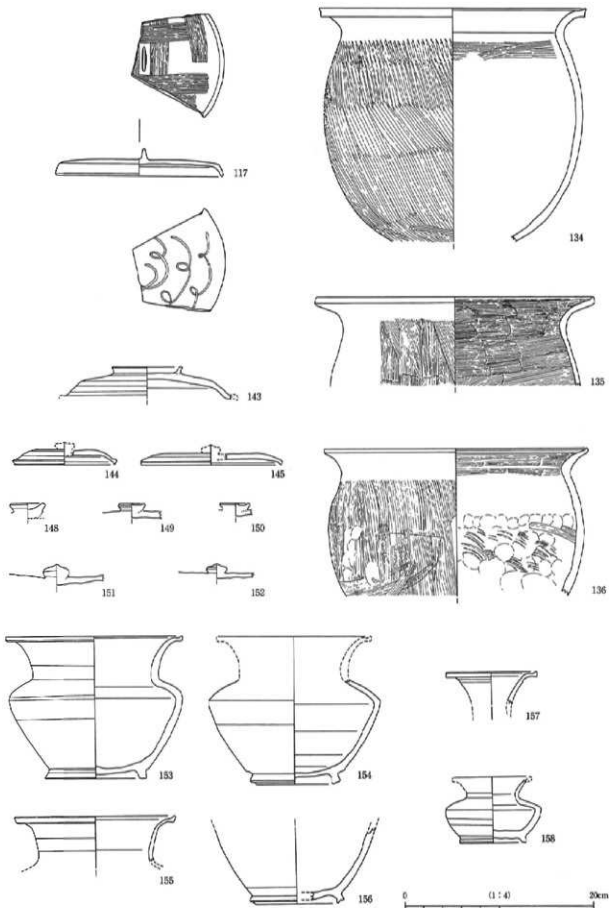


図20 出土遺物 5 奈良時代以降の土器・須恵器

調整が認められる。内外面ともに使用痕跡とみられる煤が付着している。123は、口径16.7cm、体部最大径17.8cm、器高15.8cmを測る。口縁部が短く外反し、口縁端部を上方に丸く肥厚させて収めている。最大径を体部に持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整で仕上げるが刷毛目成形痕跡が残る。体部外面上方は縦方向、以下には不定横方向の刷毛目調整が認められる。口縁部内面は刷毛目の後にナデ調整、体部内面は不定方向の刷毛目で調整している。この甕は、器形や口縁部形態、技法痕跡など、都城出土の甕Aと特徴が近似しており、8世紀代から9世紀代前半の内に位置付けできると考えられる（図版未掲載）。124は、口径16.4cm、器高残5.5cmを測る。口縁部が短く外反している甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は縦方向の刷毛目調整が認められる。口縁部内面は刷毛目による横ナデ調整、体部内面は横方向の刷毛目の後にナデ調整が認められる。125は、口径15.9cm、器高残6.0cmを測る。口縁部が短くわずかに外反している甕である。口縁部外面は丁寧な横ナデ調整、体部外面は縦方向の刷毛目調整が認められる。内面は横ナデ調整が認められる。126（図版27）は、口径16.0cm、器高14.0cmを測る。最大径を口縁部に持つ丸底の甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面上半は刷毛目で縦方向の調整、下半を不定方向に調整している。口縁部内面は横ナデ調整、体部内面には同心円の当て具痕跡が明瞭に認められる。外面全体に煤が付着している。A区溝27下層（第3層）で直立した状態で検出した。127（図版27）は、口径18.0cm、器高16.7cmを測る。最大径を口縁部に持つ丸底の甕である。内外面の調整は126と同様で、口縁部外面は横ナデ調整、体部外面上半を縦方向の刷毛目調整、下半を不定方向に調整している。A区溝27堰2杭列1東側の中層（第2層）から出土している。128（図版28）は、口縁部が短く立ち上がり、最大径を体部に持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は縦方向の刷毛目調整が認められる。口縁部内面は横ナデ調整で仕上げるが、刷毛目痕跡が残る。体部内面は丁寧なナデ調整が認められる。A区溝27堰1北側の下層（第3層）から出土している。129（図版28）は、やや厚めの口縁部が短く外反し、最大径を口縁部に持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は叩き技法による調整痕が認められる。口縁部内面は横ナデ調整、体部内面には横方向のナデ調整が認められる。A区溝19Bから出土している。130（図版30）は、口径16.8cmを測り、最大径を体部に持つ甕である。口縁部は短く外反し、体部外面は粗い刷毛調整を行っている。口縁部内面は横方向のナデ調整、体部内面下半は指オサエ調整が認められる。A区溝27Bから出土している。

131・132（図版27）は、土師器の把手付甕である。131は、甕の把手部分である。132は、口径25.8cm、器高残18.2cmを測る。8世紀代後半に比定できると考えられる。131は、A区溝27下層（第3層）、132は、A区溝27中層（第2層）から出土している。

133～137は、大型に属する短胴から長胴の土師器甕である。133は、口径28.6cm、器高残29.0cm、134は、口径28.2cm、器高残24.8cm、135は、口径29.3cm、器高残9.4cm、136は、口径28.8cm、器高残15.6cm、137（図版27）は、口径28.1cm、器高残18.6cmを測る。各々、口縁部は大きく外反し、端部はほぼ垂直に立ち上がる。最大径は口縁部で、体部はやや膨らみを呈する。口縁部外面は横方向のナデ、体部外面は縦方向の刷毛目調整を丁寧に行っている。133は、A区溝27堰1に交差したセクション1（図8a-a'、図9-56層）から出土している。133の下層（図9-58層）から人面墨書の土師器甕184、およびセクション1南側の最下層（第4層）から底部穿孔の土師器甕171が確認された。134～137は、A区溝27から出土している。

土師器鍋（図19、図版29-138・139）138は、口径32.1cm、器高12.0cmを測る（図版未掲載）。139は、口径30.6cm、器高12.8cmを測る。共に口縁部内外面を横方向のナデ調整、体部外面上半を縦方向の刷毛

目調整、下半から底部には不定方向の刷毛目調整が認められる。底部内面に同心円の当て具痕跡が看取されるが、粗い刷毛目調整を加えている。外面の一部には、煤の付着が認められる。土師器鍋の出土量はわずかであり、138・139は、A区溝27上層（第1層）から出土している。

土師器銚蓋（図19、図版29-140） 140は、口径24.0cm、器高残11.6cm、銚径31.0cmを測る。口縁部内外面から銚部下方までは横ナデ調整、体部外面全体は縦方向のやや粗い刷毛目調整、体部内面には横方向の刷毛目調整痕跡が認められる。140はA区溝27下層（第3層）から出土している。8世紀代の所産と考えられる。

須恵器杯（図版23・26-141・142） 141（図版23）は、須恵器杯Aである。口径12.1cm、器高3.9cm、底部径9.2cmを測る。体部は上外方に直線的のびている。口縁部から体部内外面はナデ調整、底部外面には回転へら切り痕跡が残る。A区溝27下層（第3層）から出土している。142（図版26）は、須恵器杯の一部で、内面に煤の付着が認められる。A区溝27堰2杭列1から出土している。

須恵器蓋（図20、図版22・23・25・26-143-152） 143-147は、須恵器蓋である。143は、口縁部が欠損しているが、推定では口径19.0cm前後を測り、器高残3.3cmである。天井部は平らで、内湾しながら下外方に下がる。天井部には環状のつまみが付く。144-147には、部分的な平滑面や墨痕が認められる事から、硯として転用されたものとみられる（146・147は図版26に掲載している）。143・145はA区溝27上層（第1層）、144・147はA区溝27下層（第3層）、146はA区溝29から出土している。148-152は、須恵器蓋のつまみ部分の破片である。宝珠つまみの形態は、いずれも扁平化が進んでおり、7世紀末から8世紀代の所産である。149はA区溝27中層（第2層）、151・152はA区④中世～古代遺物包含層、148・150はA区②近世遺物包含層から出土している。

須恵器壺（図20、図版23-153-159） 153は、最大径を口縁部に持つ広口壺である。口径18.6cm、器高15.0cm、肩部径18.3cm、底部径10.6cmを測る。外面はケズリ、内面は横ナデ調整で、内外面ともに自然釉の付着が認められる。154は、広口壺である。口縁部が欠損する。器高残15.5cm、肩部径18.1cm、底部径9.6cmを測る。外面はケズリ、内面は横ナデ調整である。155は、広口壺の口縁部から頸部の破片である。口径16.9cm、器高残5.5cmを測る（図版未掲載）。156は、壺の底部である。底部径8.7cm、器高残8.0cmを測る（図版未掲載）。157は、壺の口縁部から頸部の破片である。口径9.5cm、器高残3.5cmを測る（図版未掲載）。158は、小型の広口壺である。口縁部が欠損する。器高残6.7cm、肩部径10.0cm、底部径6.8cmを測る。口径は推定で8.0cm前後を測る。159（図版23）は、小型の短頸壺である。口縁部が欠損する。器高残5.0cm、肩部径7.8cm、底部径5.0cmを測る。いずれも8世紀の所産である。A区溝27から検出され、154が上層（第1層）、158が中層（第2層）、153が下層（第3層）、159が堰2北部から出土している。

須恵器硯（図版26-160） 160は、透脚円面硯である。台脚部分には、長方形の透かし部分が認められる。A区溝27堰2杭列3から出土している。転用硯では上述した須恵器蓋144-147が認められる。

製塩土器（図版26-161） 161は、製塩土器である。外面全体には指オサエ痕跡が認められ、内面は型押し痕跡が遺存する。8世紀～9世紀前半の所産と考えられる。A区溝27中層（第2層）から出土している。

黒色土器（図版25-162） 162は、黒色土器B類の底部片である。底部内面には斜格子の暗文が認められる。9世紀末から10世紀の桶葉窯産と思われる。B区溝3から出土している。

緑釉陶器（図版26-163） 163は、緑釉陶器の皿である。口径10.0cm、高台径3.1cm、器高2.1cmを測る。

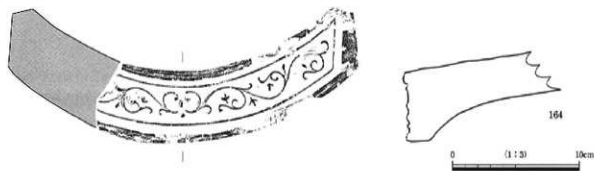


図21 出土遺物 6 軒平瓦

A区④中世～古代遺物包含層から出土している。

瓦(図21、図版26-164) 164は、軒平瓦である。外縁に沿ってやや細い圓線の中に、均整唐草文が認められる。平安時代初頭に比定される。A区溝27上層(第1層)から出土している。

以下では、特筆すべき土器として、墨書土器、底部穿孔土器、人面墨書土器などについて報告する。墨書土器(図版22-165~167)

165~167は、須恵器に文字墨書が認められるものである。

165は、須恵器杯Bの底部とみられる小破片の外面に1文字の墨書が認められ、「大」と判読できる可能性がある。

166は、須恵器蓋の天井部外面に1文字の墨書が認められ、「道」と判読できる可能性がある。

167は、須恵器杯Bの底部外面に「尾□」の2文字の墨書が認められる。2文字目は判読が不可能である。

いずれもA区溝27からの出土で、上層(第1層)から165、中層(第2層)から167、堰2の枕列に絡まって166が出土している。

他には、上述した土師器杯109にも不明瞭ながら文字とみられる墨書が認められる。

底部穿孔土器(図19、図版29・30-168~175)

168~174は、いずれも土師器の中型甕で、底部には焼成後に穿孔がなされている。

168~170(図版29)は、口径14~16cm、器高14cm前後を測る。外面は粗い刷毛目による調整、内面はナデ調整であるが、体部内面下半に叩き技法痕跡が認められる。底部には穿孔が認められる。A区溝27堰1からは170、A区溝27堰2からは168・169が出土している。

171(図版30)は、口径14.0cm、器高11.9cmを測る。やや小振りな丸底甕で、最大径は口縁部と体部がほぼ同一の甕である。口縁部は短く外反する。体部外面全体は、粗い刷毛で調整を行っている。口縁部内面は刷毛で横方向のナデ調整、体部内面は上半が横ナデ、下半には当て具痕跡が認められる。底部には穿孔が認められる。A区溝27堰1南側最下層(第4層)から出土している。

172(図版30)は、口径16.2~16.5cm、器高16.4cmを測る。最大径を体部に持つ甕である。口縁部は短く立ち上がり、肩部に段を有する。体部外面全体は、粗い刷毛で調整を行っている。口縁部内面は横方向のナデ調整で刷毛目痕跡が残り、体部内面はナデと指オサエ痕跡が認められる。底部には穿孔が認められる。二次的に火を受けている為に、器壁全体は剥離している部分が多い。8世紀末~9世紀初頭と考えられる。A区溝27堰2北部最下層(第4層)から出土している。

173 (図版30) は、口縁部を欠損する中型の甕である。体部外面は、全体に叩き技法が認められる。底部には穿孔が認められる。8世紀末～9世紀初頭と考えられる。A区溝27セクション1断面ののびい黄橙色粗砂 (図9-81) から検出されている。溝27出土の他の遺物との比較では下層 (第3層) に相当する位置である。

174 (図版30) も173と同様、口縁部を欠損する中型の甕である。体部外面は、全体に叩き技法が認められ、底部には穿孔が認められる。8世紀末～9世紀初頭と考えられる。A区溝27下層 (第3層) から出土している。

175は、土師器の中型甕で、口径16.1cm、体部最大径15.2cm、器高残14.6cmを測る。口縁部が短く外反し、最大径を口縁部を持つ甕である。口縁部外面は横ナデ調整、体部外面の上半を刷毛目で縦方向に調整、下半を横方向に調整している。口縁部内面は粗い刷毛目の後に横ナデ調整、体部内面は上半を横ナデ調整、下半を不定方向に刷毛目で調整している。底部中央の欠損部分は穿孔された痕跡の可能性がある。

人面墨書土器 (図22～26、図版31～45-176～300)

176～181は、土師器中型甕で、底部には小孔が穿たれ、体部外面に人面が墨書された土器である。

176は、口径14.8cm、器高14.0cmを測る。外面は体部上半を縦方向に刷毛目調整、体部下半には不定方向の刷毛目調整が認められる。内面は口縁部から体部全体をナデ調整し、体部には指オサエとみられる痕跡が認められる。丸底部のほぼ中央には、1箇所穿孔が認められる。全個体の約2/3が残存しているが、1方だけに人面の墨書が認められる。人面は、吊り上がった眉と目、鼻、口、髷などが表現されている。A区溝27下層 (第3層) から出土している。

177は、口径15.6cm、器高12.2cmを測る。外面は体部上半を縦方向に刷毛目調整、体部下半から底部には不定方向の刷毛目調整が認められる。内面は体部上半を横ナデ調整、体部下半には不定方向のナデ調整が認められる。丸底部のほぼ中央には、1箇所穿孔が認められる。全個体の約1/2が残存しており、体部外面の3方に人面の墨書が認められる。人面は、眉、大きな目と黒目部分、鼻、髷、口の他に、両頬の輪郭などが表現されている。A区溝27中層 (第2層) から出土している。

178は、口径15.6cm、器高14.8cmを測る。外面と内面の調整は177に類似する。体部下半には、1箇所に穿孔が認められる。全個体の約2/3が残存しており、体部外面の3方に人面の墨書が認められる。人面は、比較的太い筆で、眉、目の輪郭、鼻、大きく開いた口、豊かな顎髷などが表現されている。A区溝27上層 (第1層) から出土している。

179は、口径17.8cm、器高残10.4cmを測る。外面は体部上半を縦方向に刷毛目調整、体部下半を不定方向の刷毛目調整、体部内面には指オサエとみられる痕跡が認められる。破片のため、人面墨書は1方にだけ認められる。人面は、目尻の下がった目に鼻と髷、あるいは口と髷を描いたものと思われる。A区溝27堰2杭列3から出土している。

180は、最大径を口径に持ち15.8cm、器高12.7cmを測る。外面は体部上半を縦方向に刷毛目調整、体部下半には不定方向の刷毛目調整が認められる。内面は体部上半を丁寧な横ナデ調整、体部下半には同心円の当て具痕跡が認められる。外面体部下半には、黒塗が認められる。丸底部のほぼ中央部には、1箇所に穿孔が認められる。体部外面には4方に人面の墨書が認められる。人面の描き方は、丸顔・髷を生やした四角顔・丸顔・髷を生やした四角顔という様に、顔の特徴を類型化して交互に繰り返して配置している様である。頭部には、頭髪を束ねたものか、あるいは被り物かと思われる丸いものが描かれている。

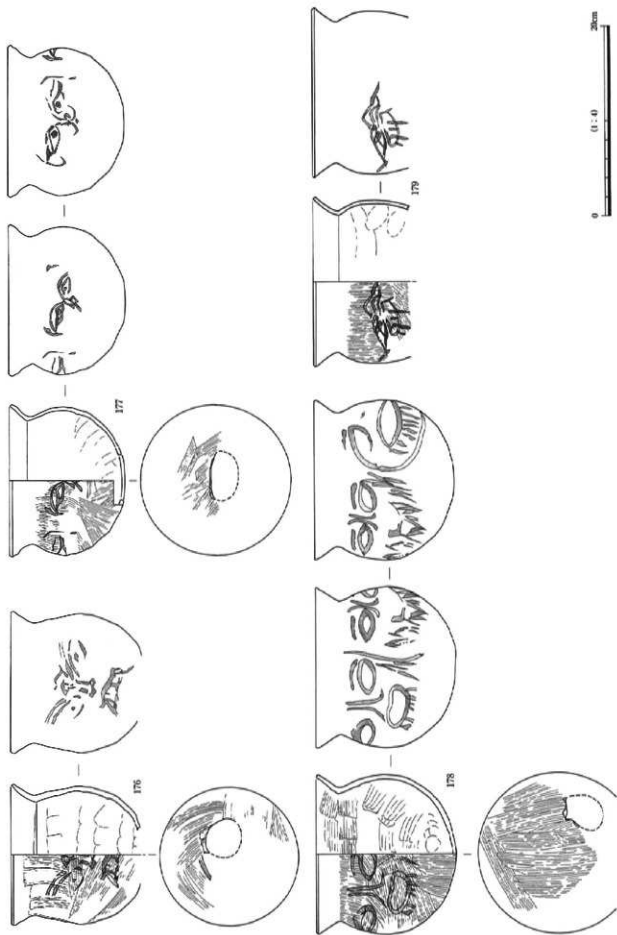


图22 出土遺物7 人面黑書土器〔1〕

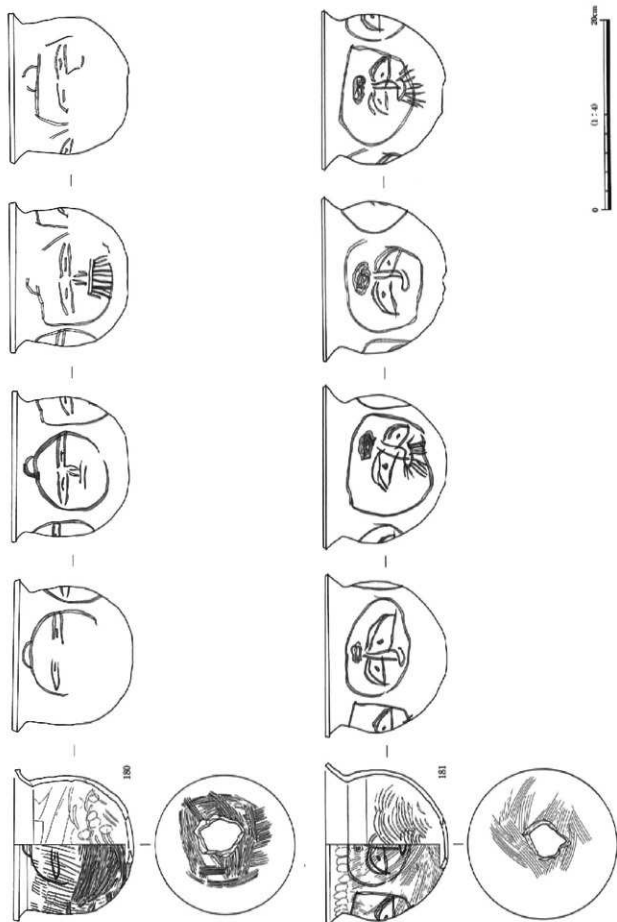


圖23 出土遺物 8 人面黑畫土器 (2)

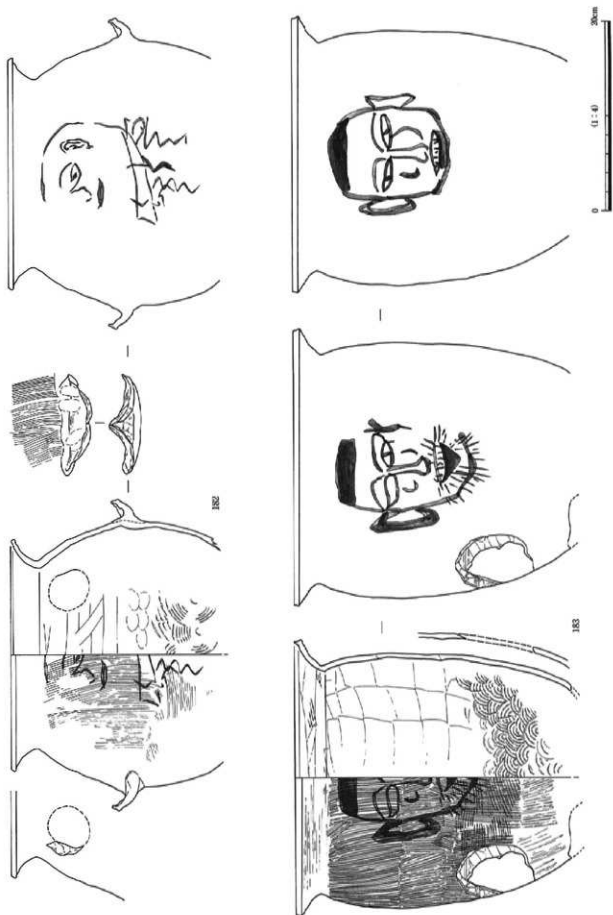


图24 出土遗物9 人面黑书土器〔3〕

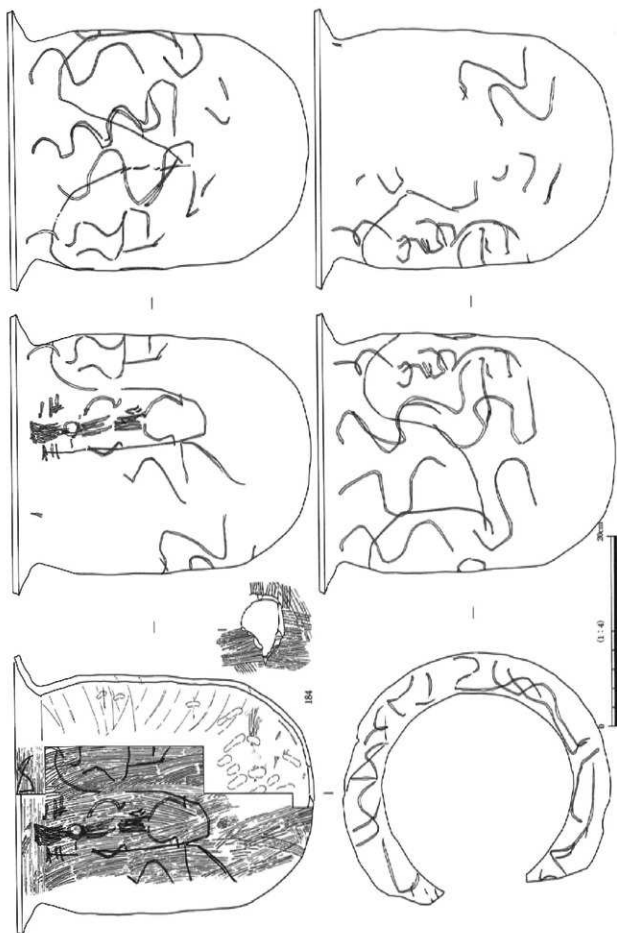


图25 出土遺物10 人面墨書土器〔4〕

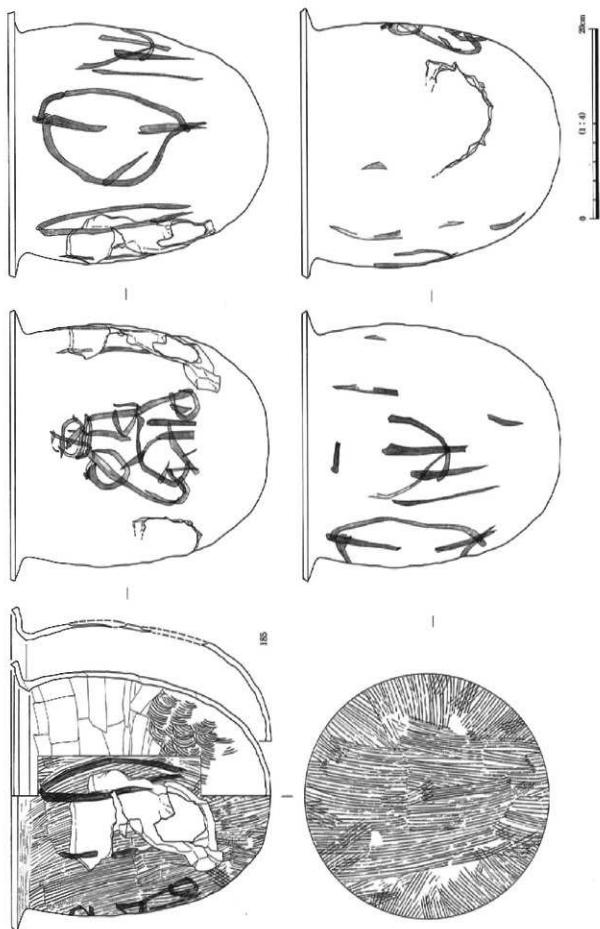


图26 出土遗物11 人面黑书土器【5】

る。目、鼻、口、鬘などは直線的に表現している。A区溝27中層（第2層）から出土している。

181は、口径16.6cm、器高13.0cmを測る完形の甕である。外面は頸部に連続した指オサエ痕跡が認められ、体部上半に縦方向の刷毛目調整、体部下半から底部には不定方向の刷毛目調整を行っている。内面は口縁部から体部上半を横ナデ調整、体部下半には大きな同心円の当て具痕跡が認められる。体部外面には、黒斑が認められる。丸底部のほぼ中央には、1箇所穿孔が認められる。体部外面には4方に人面の墨書が認められる。人面の描き方は、180と同様、丸顔と鬘を生やした四角顔を交互に配置していると考えられる。人面は濃い墨で描かれ、残存状態は大変良好である。顔の表現では、大きな目と、白毫かとも思われる眉間に描かれた印が特徴的である。A区溝27環2の枕列に絡まって出土している。

182は、土師器把手付甕に人面が墨書された土器である。口径24.0cm、胴部最大径28.3cm、器高残22.3cmを測る。口縁部の内外面は丁寧な横ナデ調整である。体部は外面上半を縦方向の刷毛目調整、外面下半を不定方向の刷毛目調整、内面上半を横方向のナデ調整、内面下半には同心円の当て具痕跡が認められる。人面の墨書は、1方のみに認められる。人面は、ほぼ円形の大きな顔に、耳、眉、目、鼻、口などを写実的に表現し、長く豊かな鬘を現すのか、顎の下には数本以上の連続した曲線を描いている。A区溝27環1下層（第3層）から出土している。

183～185は、土師器長胴甕に人面などが墨書された土器である。

183は、口径28.9cm、器高残29.5cmを測る。口縁部の内外面は丁寧な横ナデ調整である。体部外面は縦方向の刷毛目調整、底部外面は不定方向の刷毛目調整、体部内面の上半は横方向のケズリ調整、下半には同心円の当て具痕跡が認められる。体部外面には黒斑が認められる。体部下半には1箇所穿孔が認められる。人面の墨書は体部外面の3方に描かれている。人面は、面長の顔に、髪、大きな耳、目、鼻、口、顎を覆う鬘などが描かれている。頬骨の表現かとも思われるが、両頬に描かれた三日月状の印が特徴的である。191（図版36）の人面墨書と類似している。A区溝27環2の枕列に絡まって出土している。

184は、口径28.9cm、器高残31.7cmを測る。口縁部の内外面は横ナデ調整である。体部外面は丁寧な刷毛目調整、体部内面には刷毛目調整と指オサエ圧痕が認められる。底部のほぼ中央には、1箇所穿孔が認められる。人面の墨書は、やや不明瞭であるが、1方のみに認められる。人面は、眉を横1本線、目を横2本線、鼻を円形に描き、その下に2段に分けて書かれた数本の縦線は、口鬘と顎鬘であろうと思われる。口は表現していないとみられる。口縁部内面全体には、数本の墨書によるS字状の短い曲線が連続して認められ、同様に体部外面全体にも縦方向にS字状の連続した長い曲線を表現した墨書が認められる。このS字状の連続した曲線が何を表現しているのか、今のところ明らかでない。A区溝27環1下層（第3層）から出土している。

185は、口径27.7cm、器高27.5cmを測る。外内面の調整は183とほぼ同様である。体部全体に描かれた墨書は、直線と曲線を組み合わせた複雑な記号状のものや、楕円に直線を組み合わせたものなどである。184と同様、表現された内容については、今のところ明らかでない。A区溝27中層（第2層）から出土している。

以下の遺物は、写真図版に限定されるが、人面などの墨書が認められる破片のほぼ全点を掲載した。これらは、ほぼ全てが中型から大型の土師器甕である。

186～190（図版35）は、土師器中型甕に人面が墨書された土器である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は粗い刷毛目調整、体部内面下半に当て具痕跡の残る中型の土師器甕である。186は、2方に

人面墨書が認められる。187・188は、3方に人面墨書が認められる。189は、1方にだけ人面墨書が認められる。190は、破片のため、人面墨書は1方だけに認められる。人面は、目尻の下がった目の描き方が特徴的である。

191～193（図版36）は、土師器長胴甕に人面が墨書された土器である。191は、183の人面の特徴と極めて類似しており、両頬の三日月状の印は複数が描かれている。192は、2方に人面墨書が認められる。193は、3方に人面墨書が認められる。

194～300（図版37～43）は、人面を墨書した土師器甕の破片や、184・185の椀に曲線や幾何学的な文様などを描いた土師器甕の破片である。195（図版37）は、190（図版35）の人面の特徴と近似している。200～208（図版38）は、直線を組み合わせたものやS字状の連続曲線を描いた土器である。216（図版38）では、かなり小さく人面が描かれている。254～272（図版41・42）でも直線を組み合わせたものや幾何学的な文様を描いた土器がみられる。

271・274～277には穿孔の痕跡が認められる。271は、甕の頸部から体部にかけての破片であるが、頸部のほは直下にも穿孔されていた可能性を示している。274の痕跡は、刺痕跡の可能性も考えられる。275～277は、体部下半から底部にかけた位置に穿孔の痕跡が認められ、この部分にも人面様の墨書がみられる。

A区溝27から188～196・198～202・204～217・220～261・263～266・268～272・274～284・286～288・290～300、A区溝28から186・197・203・219・250・267・273、A区溝29から187・262・285・289、A区落込10から218が出土している。A区溝27から溝28への分流部分からは250が出土し、両道構から出土した破片が接合している。

木製品（図27・28、図版46～51・301～330）

第4道構面のA区溝27を中心とする遺構からは、様々な木製品が検出されている。曲物、折敷、柄杓、篋状木製品、棒状木製品、齋串板状木製品などである。また、特筆すべき木製品としてA区溝27出土の絵馬2点、人形11点、齋串2点、木筒1点などがあげられる。

曲物（図版46-301～305） 301・302は、曲物である。301は、底板径19.0cm、側板高さ3.0cmを測る。A区溝27上層（第1層）から出土している。302は、底板径18.0cm、側板高さ2.5cmを測る。A区溝27堰2杭列3から出土している。303～305は、曲物底板である。303は、径13.5cmを測る。A区溝27堰2杭列1から出土している。304は、径22.0cmを測る。A区溝27堰2から出土している。305は、径22.0cmを測る。A区溝27堰2から出土している。

折敷（図版47-306～310） 306～310は、折敷側板である。306は、長さ残22.0cm、幅7.0cmを測る。A区溝27下層（第3層）から出土している。307は、長さ残14.0cm、幅4.0cmを測る。A区溝27下層（第3層）から出土している。308は、長さ残41.0cm、幅8.0cmを測る。A区溝27下層（第3層）から出土している。309は、長さ残45.0cm、幅6.0cmを測る。A区溝27堰2杭列3から出土している。310は、長さ残43.0cm、幅5.5cmを測る。A区溝27上層（第1層）から出土している。

柄杓（図版46-311） 311は、先端が欠損しているが、柄杓の柄と考えられる。長さ残25.0cm、幅2.5cmを測る。A区溝27堰2杭列3から出土している。

その他木製品（図版46-312～314） 312は、篋状木製品である。長さ残29.0cm、幅3.0cmを測る。A区溝27下層（第3層）から出土している。313は、棒状を呈する木製品である。長さ残24.0cm、幅1.0cm

を測る。A区溝27下層（第3層）から出土している。314は、側面に加工跡を有する齋串様板状木製品である。長さ24.0cm、幅2.0cmを測る。A区溝27下層（第3層）から出土している。

以下では、特筆すべき木製品として、絵馬、人形、齋串、木簡について報告する。

絵馬（図27、図版48・49-315・316）

315は、全形が完存しており、縦14.3（右）～14.6（左）cm 横19.6（下）～20.4（上）cm、厚さ0.6～0.8cmを測る。材は板目のヒノキである。材の右下側面は丸みを持って面取りされており、右下隅部の2箇所には径0.3～0.5cmの小孔が一对で穿たれ、小孔の中には樹皮の細片がわずかに遺存する事などから、折敷の底板などが転用されたとみられる。左側面にはキリオリにより切断されたとみられる刃物の痕跡が残り、表側と裏側の切り込み位置の不一致から生じる段差がみられる。上辺中央には1箇所径0.4～0.6cmの小孔が穿たれており、掛紐の通し孔とみられる。馬は、左向きの裸馬であり、側対歩の歩様表現で画面奥の右側前後肢を同時に上げ、尻尾を軽く跳ね上げた躍動感のある姿が筆太に墨描されている。股間部の表現からは雄馬を描いた事が分かる。絵馬の左側には「神馬」と墨書が記されている。文字史料から分析すると、「馬」の事例は少ないが、「神」の字体については、第1画の点がやや横向きに打たれている点や、傍の「申」の「日」が横長に書かれている点など、その特徴が平安時代よりも奈良時代の書風に比較的近い傾向を示している（文字鑑定は、古市 見氏による）。

316は、部分的ながら右側面の大半が欠損しており、縦20.3（左）～21.7（右）cm、横26.6（下）～27.4（上残）cm、厚さ0.3～0.6cmを測る。315と同様、材は板目のヒノキであり、左側面にはキリオリによる痕跡が残り、上辺中央には1箇所径0.2～0.4cmの小孔が穿たれている。馬は、左向きの彩色飾馬であり、古代に多用され様式化した描法ではなく、両脚を揃えて静止する自然な姿が描かれている。315と同様、股間部の表現から雄馬と分かる。また、315と比較すると、墨線はやや細く繊細である。彩色は、白色土が用いられている。彩色の順序は、墨線の外側にも白色土のはみ出す部分が認められる事などから、下地に白色土を塗布した後、墨描したものと考えられる。但し、白色土を塗布する際、輪郭を下書きしたかどうかについては痕跡が認められない。墨描では、馬の輪郭や後線、鞍、鍔、手綱、面懸、胸懸、尻鬃などの装具を細かく表現している。馬の鬣部分は、白色土が認められるだけであり、墨痕が退化して消失した状態なのか、あるいは別種の顔料が用いられていたのか等の点については不明である。315・316は、A区溝27堰2杭列1・2間の底面において小流木を間に挟みながら2点が重なった状態で出土している。

人形（図28、図版50・51-317～327）

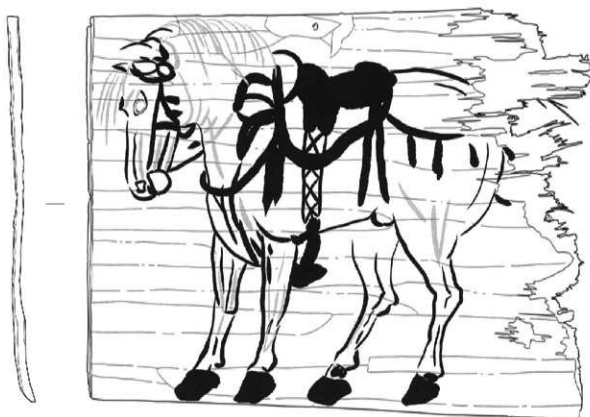
317は、長さ26.6cm、幅3.9cm、厚さ0.3～0.4cmを測る。頭頂部は台形状に造り出し、頸部、腕部、脚部は切り込みを入れて表現している。脚部は下から切り込むため開脚状態となる。表面は比較的丁寧な加工が認められるものの、裏面は特に加工跡は認められない。墨書で顔や衣服を表現している。裏面には、斜めに擦り切る様な痕跡が認められる。A区溝27堰2杭列1・2間から出土している。

318は、長さ17.8cm、幅3.4cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。頭頂部は弧状に造り出している。頸部はV字に切り込みを入れているが、以下は欠損している。腕の一部が残存しており、切り込みによって表現している。墨書で眉、目、鼻、口を描いている。A区溝27堰2杭列2の東側から出土している。

319は、長さ15.5cm、幅1.5cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。頭頂部は圭頭状でほぼ左右対称である。表面の加工は特に認められない。欠損が著しく詳細は不明であるが、頸部と脚部は切り込みを入れて表現している。墨書は認められない。A区溝27堰2杭列3から出土している。



315



316

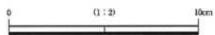


图27 出土遺物12 繪馬

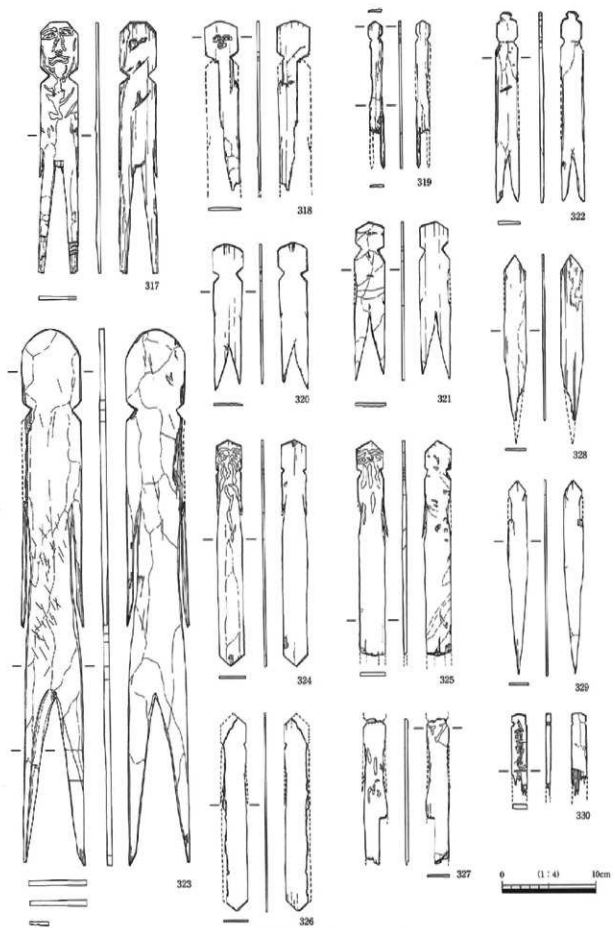


图28 出土遺物13 人形 着申 木隨

320・321は、頭頂部を左右非対称の主頭状に造り出し、腕部は0.5cm程度の切り込みで表現し、脚部はV字形の切り欠きによって両足が表現されるタイプである。共に表面に加工は認められない。320は、長さ15.5cm、幅3.0cm、厚さ0.2cm、321は、長さ16.5cm、幅3.3cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。共にA区溝27堰2杭列3から出土している。

322は、頭頂部に被り物を表現するタイプである。長さ20.3cm、幅2.4cm、厚さ0.3～0.4cmを測る。頸部は左右から切り込み、腕部は体部全体に沿う様に長い腕を表現した切り込みが認められる。脚部は短く、V字形の切り欠きによって表現される。表裏両面に共に墨書が認められるが、赤外線によっても判読不可能であった。腹部に当たる部分には工具による打ち込んだ痕跡が認められる。A区溝27堰2杭列1・2間から出土している。

323は、大型の人形である。長さ56.4cm、幅5.5cm、厚さ0.4～0.6cmを測る。頭頂部は丸く丁寧な面取り加工が施される。表裏両面に墨書が認められるが、判読不可能である。頸部はV字に切り込み、腕部には深い切り込みがみられる。脚部は大きくV字形に切り欠き、爪先まで表現しているのか、先端部を尖らせている。体部全体には、多数の切り傷と思われる痕跡が認められる。A区溝27堰2杭列2から出土している。

324は、頭頂部を主頭状に造り、頸部は浅いV字に切り込みをみせる。腕部は切り込みで短く表現し、脚部に逆三角形の先端部を持つタイプである。長さ23.9cm、幅2.8cm、厚さ0.2cmを測る。表面には加工面が若干認められるが、表面は未調整のままである。墨書は表面に描かれており、顔と衣服を表現していると思われる。A区溝27堰2杭列3から出土している。

325は、長さ残22.5cm、幅2.7cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。脚部が欠損しているが、残存した長さの比率から判断して、324と同様の脚部に逆三角形の先端部を持つタイプと思われる。使用に際して脚部を切断した可能性も考えられる。墨書は324と同様の表現で描かれている。A区溝27堰2杭列3から出土している。

326は、長さ残20.4cm、幅残2.5cm、厚さ0.1～0.15cmを測る。頭部と体部の一部を欠損している。324と同様、頭部は主頭状に造り出し、頸部は浅いV字に切り込みをみせ、腕部は切り込みで短く表現し、脚部に逆三角形の先端部を持つタイプである。両面にはわずかに墨書の痕跡が認められるが、判読不可能である。A区溝27堰2杭列3から出土している。

327は、長さ残15.3cm、幅2.4cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。頭部と脚部が欠損しているが、頭部と腕部に切り込みの痕跡が残る。両面に墨書の痕跡が認められるが、判読不可能である。A区溝27堰2杭列3から出土している。

斎串（図28、図版51-328・329）

328・329は、共に周縁の加工で上端部を主頭状に造り出し、下端部を剣先状に成形するタイプの斎串である。329には下端部に摩滅の痕跡が窺われる。共に表裏面の加工痕跡は認められない。328は、長さ残17.8cm、幅2.3cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。A区溝27堰2杭列1から出土している。329は、長さ20.39cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmを測る。A区溝27堰2下層（第3層）から出土している。

木筒（図28、図版51-330）

330は、下部が欠損しており、長さ残8.2cm、幅1.6cm、厚さ0.4～0.5cmを測る。上辺部に左右からの切り込みがみられる。切り込み部分には紐などによる使用痕跡が認められないが、形状から判断して荷札などに用いられた木筒と考えられる。表面には文字墨書が認められ、「高壘郷尾□□」と記されている。

A区溝27堰2杭列3から出土している。

杭（図版52・53-331-343・345-355）

第4遺構面のA区溝27で検出した堰1・2の構造物である杭と横木の細い杭や枝は約650本を数え、その一部を掲載した（図版52）。杭の樹種については、以下の通りである。堰1では、サカキとスギとマツ科の3種が確認されている。堰2では、アカガシ亜属・イヌガヤ・クスノキ・クスギ・クリ・クルミ属・ケヤキ・コナラ亜属・サカキ・サクラ属・スギ・ハシバミ属・ハンノキ・ヒイラギ・ヒノキ・ホノノキ・マツ科・ムクノキ・ヤナギ属・ヤマザクラ・ヤマグワ・ヤブツバキの22種が確認されている。

杭には、丸杭と角杭が認められる。丸杭は自然木の先端を加工しただけのものが多く、樹皮が良好な状態で遺存している。また、一部に火を受けた痕跡が認められる杭もある。堰に使用された杭は、直径6~10cm前後の杭と、横木に用いられる直径2~4cmの杭や枝で構成されている。杭先は、243本遺存し、その加工面数は1~6面、8面、10面のものが確認されている（図版53）。

動物遺存体（図29、図版14・54・55-356・383・384）

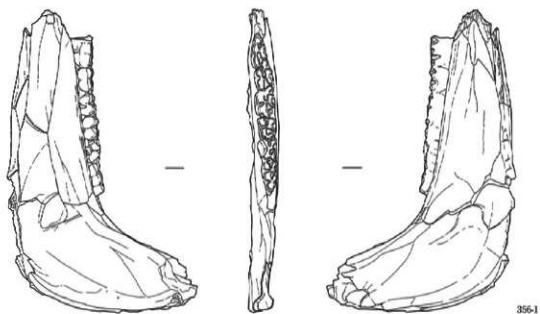
動物遺存体は、牛骨や馬骨などの獣骨類がA区溝27やB区溝1・2などで比較的多く検出されている。356は、馬の下顎骨である。土圧により左右の下顎骨が圧着する様な状態で検出されている（図版14-1）。356-1は、下顎骨356の左側で残存長32.0cm、残存幅20.2cmを測り、356-2は、下顎骨356の右側で残存長30.2cm、残存幅16.7cmを測る。歯の状態からみて、年齢5歳以上、体高133cmの在来種の馬骨と推定される（獣骨鑑定は、宮崎泰史氏による）。A区溝27セクション1北側の中層（第2層）から出土している。

その他にも、A区溝27北部の中層（第2層）では、牛の下顎骨383が検出されている。これらの他、馬あるいは牛の肢骨や歯が比較的多数出土している。また、B区溝1・2の底面では、馬の下顎骨384が比較的良好な状態で検出されている（図版14-2・3）。

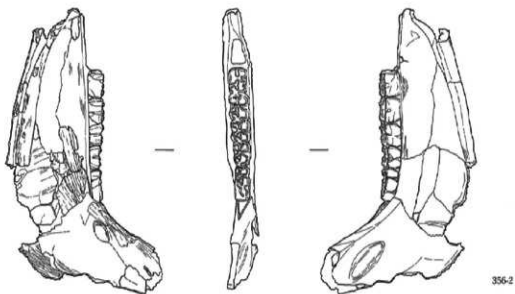
植物遺存体（図版14・56-357・358・359・385）

植物遺存体は、モモ（357）、ドングリ（358）、サルノコシカケ（385）などが検出されている。植物遺存体の所属時期は不明であるが、モモやドングリの多くは、A区溝27などの溝から古代の遺物と共に検出した（図版56-357・358）。堰を構成している杭の樹種からはモモやイチイカシは検出されなかったが、古代には調査区上流にこれらの植生が存在していたか、食用あるいは儀式使用などが想定される。その他に、ワラで編まれた籐の残片が検出されている。A区溝27北部の上層（第1層）から出土している（図版14・56-359）。

サルノコシカケ385は、A区溝27堰2北部のベース層である粗砂層において検出されている（図版14-5）。わずかに欠損しているが、遺存状態は良好で、径10cm前後を測る。所属時期を知る手掛りとして、385が生えていた樹木をサンプリングして分析したところ、後述の第4章自然科学分析・第3節放射性炭素年代測定（1）の結果にあるように、この樹木は縄文時代前期中葉の植物遺存体であると判明している。385本体の所属時期は特定できないものの、この粗砂層が縄文時代の堆積層と考えられる事や自然科学分析の結果などからみて、縄文時代の植物遺存体である可能性が高い。



356-1



356-2

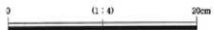


图29 出土遺物14 獸骨

第4項 鎌倉時代以降

中世の出土遺物は、③中世遺物包含層や④中世～古代遺物包含層などから出土している。土師器皿、瓦器の椀や羽釜、国産陶器の椀や甕、輸入磁器の青磁と白磁などの小破片が包含されている（図版57-360～370）。

360～363は、青磁椀である。外面に蓮弁や刻花文が認められる。364は、白磁の注口である。365は、瓦器羽釜の三足脚部である。366は、瓦器羽釜の胴部分である。367は、瀬戸椀である。368・364は、瓦器椀の底部高台である。370は、土師質の紡錘車である。これらについては、中世の確実な遺構は検出されていないため、当該期の遺構が削平されたものか、周辺遺構の遺物が混入したものかは不明である。

近世の出土遺物は、①耕土を機械掘削した後の②近世遺物包含層から出土している。磁器の小破片と陶器壺などの破片が認められる。いずれも時代的には江戸時代後半以降のもので、周辺一帯が耕地化されたためか、出土量はごくわずかに認められる程度である（図版57-360～370）。

372・376は、湯飲みである。その他は椀である。371は、外面に花文と圏線、高台部分に時代銘を記している。372は、外面に丸扇子文様と圏線を巡らしている。373は、外面に朝顔文様を描いている。374は外面に二重網文様を巡らしている。375には、見込み部分に蛇ノ目彫刻が認められる。

第5項 小結

今回調査した範囲は、讚良郡条里遺跡の東部に該当する位置である。この扇状地に展開する時代の確認しうる出土遺物としては、縄文土器と石器、古墳時代の土器、奈良時代から平安時代初頭を中心とした土器と木製品、鎌倉時代から室町時代の土器や陶磁器、江戸時代以降の陶磁器など、概ね5群に大別しうる。

特に、縄文時代については、周辺一帯は前期から中期にかけて良好な資料に恵まれた地域であり、今回近接して同時に調査した讚良郡条里遺跡（その2・3）、小路遺跡（その2・3）、高宮遺跡（その2）などの成果も含めての検討が必要である。

また、讚良郡条里遺跡は、周知されて以来、大阪府や寝屋川市の調査によって河内国讚良郡の景観が復元可能とされている貴重でかつ広範囲な文化財の包蔵地である。本項では、その条里遺跡の性格を決定する上で重要な意味を持つ高宮廃寺と、当時の祭祀との関連から大量に出土した墨書土器などについて述べ、小結としたい。

高宮廃寺

高宮廃寺は、寝屋川市の東部丘陵南端、海拔28m付近の丘陵上に立地している。過去の調査によって塔基壇などを検出し、伽藍配置が明らかとなっている。従来、天平時代の創建とされていたが、素弁八葉蓮華文軒丸瓦の出土によって創建は白鳳時代に遡り、かつ短期間に主要伽藍が建設されたことが明らかとなっている。度重なる火災により平安時代初頭に廃絶したとされている。高宮廃寺の南および西には、5世紀の竪穴住居群や8世紀の掘立柱建物群が展開する高宮遺跡が位置している。

今回の調査では、均整唐草文軒平瓦が1点出土している（図21-164）。出土地点はA区溝27上層（第1層）である。この層は、中世から古代の遺物を包含する整地層下面以下から、溝27堰2杭列の上端部が見え隠れるレベルの層位にあり、溝27が埋没する最終段階の堆積層である。瓦の時期は、瓦当面の

外区に圏線が巡るが、断面形状から平安時代初頭の所産と考えられる。同型の瓦当面 a 類は、高宮廃寺や小路遺跡からの出土が認められる。この瓦は、高宮廃寺が終焉を迎える時期に用いられた瓦と考えられるが、同型出土瓦との比較検討については今後の課題としておきたい。

祭祀関連遺物

A区溝27では、人面墨書土器、底部穿孔土器、絵馬、人形、斎串などの古代祭祀に伴う遺物が多量に出土した。古の人々が、穢れや恐れまたは現世的な利益に関して、呪いや希望を託す行為がこの溝の周辺で行われていた事が明らかとなった。

その他の出土遺物としては、「道」「大」「尾」などと判読可能な文字が記された墨書土器の他に、須恵器円面硯・転用硯、緑釉陶器、木筒なども確認されており、地方官衙を視野の範疇に入れる事が可能な関連遺物も多数出土している。A区溝27を挟んで南西に位置する讚良郡条里遺跡（その3）においては、平安時代前期（9世紀頃）の掘立柱建物群と船材を転用した大型井戸などが検出され、石製腰帯具が出土している事など、周辺遺跡の調査成果も加えて更に検討する必要がある。

第IV章 自然科学分析

第1節 讚良郡条里遺跡（その1）の花粉化石群集

パレオ・ラボ 新山雅広

1. はじめに

A区下層確認トレンチでは、縄文土器や石器が出土し、縄文時代の倒木と考えられるイヌガヤの全体規模を検出している。これらの事を受けて、本地点における縄文時代の植生環境を確認する目的で自然科学分析を実施した。

2. 試料

花粉化石群集の検討は、1試料について行った。試料は、A区下層確認トレンチにおいて検出したイヌガヤの下部にあたる位置（標高7.2m）で採取した土壌サンプルで、青灰色ないし灰色の砂混じり粘土である。試料名は「A区下層確認トレンチ・青灰色粘質土」である。

3. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

4. 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉5、形態分類で示したシダ植物胞子1である。樹木花粉では、マツ属（不明）、クマシダ属-アサダ属、ブナ属、アカガシ亜属、シノキ属がわずかに産出し、シダ植物胞子は、単条型胞子が産出した。

5. 考察

十分な花粉化石が産出せず、古植生について推定することはできなかった。産出したのは、針葉樹のマツ属（不明）、落葉広葉樹のクマシダ属-アサダ属、ブナ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シノキ属であり、これらが周辺の森林構成要素であったと考えられる。なお、花粉化石は水成堆積物であれば、良好に保存されるが、十分な花粉化石が産出しないことから、試料とした堆積物は、水成堆積物の可能性は低く、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。

表1 花粉化石産出一覧表

和名	学名	
樹木		
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2
クマシゲ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	1
ブナ属	<i>Fagus</i>	2
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	2
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	3
シダ植物胞子		
単条型胞子	Monoletic spore	5
樹木花粉	Arboreal pollen	7
草本花粉	Nonarboreal pollen	0
シダ植物胞子	Spores	5
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	12
不明花粉	Unknown pollen	7

第2節 讚良郡条里遺跡（その1）堆積物中の珪藻化石群集

バレオ・ラゴ 藤根 久

1. はじめに

A区下層確認トレンチでは、縄文時代の倒木と考えられるイヌガヤを検出し、その下部では更に下層の自然流路を確認している。これらの事を受けて、本地点における縄文時代の堆積環境を確認する目的で自然科学分析を実施した。

珪藻は、10～500 μ mほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知る事ができる。

ここでは、讚良郡条里遺跡（その1）の堆積物について珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

2. 試料の処理方法

試料は、A区下層確認トレンチにおいて検出したイヌガヤの下部にあたる位置（標高7.2m）で採取した土壌サンプルで、青灰色ないし灰色の砂混じり粘土である。試料名は「A区下層確認トレンチ・青灰色粘質土」である。この試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

(1) 湿潤重量約1～6g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロベットの適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。なお、200個体に満たないため、プレパラート全面を精査した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

〔外洋指標種群（A）〕：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

〔内湾指標種群（B）〕：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群 (C1)] : 塩分濃度が12~35パーミルの水域の海藻や海草 (アマモなど) に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群 (D1)] : 塩分濃度が26~35パーミルの水域の砂底 (砂の表面や砂粒間) に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミノナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[汽水泥質干潟指標種群 (E1)] : 塩分濃度が12~30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミノナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群 (C2)] : 塩分濃度が4~12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群 (D2)] : 塩分濃度が5~26パーミルの水域の砂底 (砂の表面や砂粒間) に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群 (E2)] : 塩分濃度が2~12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群 (J)] : 上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらには *Achnanthes* 属が多く含まれるが、斜面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中~下流性河川指標種群 (K)] : 中~下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群 (L)] : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できる様になる。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)] : 水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)] : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などの様に、ミスゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である (陸生珪藻と呼ばれている)。

4. 珪藻化石の特徴とその堆積環境

試料から検出された珪藻化石は、海水種が1分類群1属1種、淡水種が12分類群11属6種2亜種検出された。これらの珪藻化石からは、海水種が1環境指標種群、淡水種が2環境指標種群に分類された (表6)。珪藻化石は少なく、29個体のみであった。

堆積物1g当たりの数は 6.73×10^4 個、完形殻の出現率は約14%である。

珪藻化石は、沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia pectinalis* var. *undulata* などや陸域指標種群の

*Hantzschia amphioxys*が出現した。

堆積物は粗砂混じり粘土であるが、珪藻が捕獲されなかったか、あるいは比較的乾燥した環境であったことが考えられる。

5. おわりに

堆積物中の珪藻化石を調べた結果、全体的に珪藻化石が非常に希薄であった。これは、堆積物の堆積環境が比較的乾燥した環境であったと考えられる。なお、沼沢湿地付着生指標種群や陸域指標種群の珪藻化石が少ないながら検出されたことから、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が予想される。

<引用文献>

安藤一男 1990年「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地誌』42 p.73-88

小杉正人 1988年「地産の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 p.1-20

表2 堆積物中の珪藻化石産出表

(種群は、小杉(1988)および安藤(1990)による)

分 類 群	種 群	1
<i>Hantzschia granulata</i>	El	1
<i>Amblera ovalis</i>	W	1
<i>Eunotia pectinialis</i> var. <i>minor</i>	O	1
<i>E. pectinialis</i> var. <i>undulata</i>	O	1
<i>Frustulia</i> spp.	?	1
<i>Gomphonema gracile</i>	O	1
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	3
<i>Nitzschia</i> spp.	?	1
<i>Neidion iridis</i>	O	1
<i>Nitzschia</i> spp.	?	3
<i>Pinnularia</i> spp.	?	6
<i>Rhopalodia gibberula</i>	W	1
<i>Sarirella angusta</i>	W	1
Unknown	?	7
海水泥質干潟 (El)		1
沼沢湿地付着生 (O)		4
陸 域 (Q)		3
広 右 (W)		3
淡水不定・不明種 (?)		13
珪 藻 総 数		29

第3節 放射性炭素年代測定〔1〕

パレオ・ラボ 山形秀樹

1. はじめに

讀良郡糸里遺跡（その1）のA区下層確認トレンチでは、倒木と考えられる遺存状態の良いイヌガヤを検出されている。このイヌガヤの所属年代を確認する目的から、樹皮付近より採取した木片を試料として、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、A区下層確認トレンチにおいて検出したイヌガヤの樹皮付近より採取した木片「A区下層確認トレンチ・イヌガヤ（樹皮）」1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表8に、試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値（yrBP）の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表3 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果〔1〕

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ暦年代範囲
PLD-2091 (AMS)	A区 (I-5-15-F10-h9III) 下層確認トレンチ イヌガヤ (樹皮)	-23.5	4765±26	cal BC 3630 cal BC 3580 cal BC 3565 cal BC 3535	cal BC 3635 - 3625 (14.5%) cal BC 3595 - 3559 (60.5%) cal BC 3540 - 3525 (24.7%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、更に珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を

作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に校正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に校正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代校正値は¹⁴C年代値に対応する校正曲線上の暦年代値であり、1 σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行なった。暦年代校正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、「A区下層確認トレンチ・イヌガヤ (樹皮)」の年代はcal BC 3595 - 3550年が、より確かな年代値の範囲として示された。

<引用文献>

中村俊夫 2000年「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, *Radiocarbon*, 35, pp.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, *Radiocarbon*, 40, pp.1041-1083.

第4節 放射性炭素年代測定〔2〕

パレオ・ラボ 山形秀樹

1. はじめに

讚良郡糸里遺跡（その1）のA区下層確認トレンチでは、倒木と考えられる遺存状態の良いイヌガヤを検出されている。前節に報告した放射性炭素年代測定〔1〕では、イヌガヤの樹皮付近より採取した木片の測定を実施したが、今回は樹芯付近より採取した木片の測定を通じてイヌガヤの樹齢を確認する目的から、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

また、A区溝27北部のベース層である粗砂層では、樹木に生えたサルノコシカケが検出されている。この樹木より採取した木片の測定を通じてサルノコシカケの所属年代を推測する目的で、同様の放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、A区下層確認トレンチにおいて検出したイヌガヤの樹芯付近より採取した木片「A区下層確認トレンチ・イヌガヤ（樹芯）」1点と、サルノコシカケが生えていた樹木より採取した木片「A区下層確認トレンチ・サルノコシカケ（樹木）」1点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表7に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値（yrBP）の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表4 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果〔2〕

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}C_{\text{perm}}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1911 (AMS)	A区 (I-6-16-F10-h9 III) 下層確認トレンチ イヌガヤ (樹芯)	-21.7	4980 ± 80	cal BC 3765 cal BC 3715	cal BC 3915 - 3875 (19.1%) cal BC 3805 - 3665 (89.9%)
PLD-1912 (AMS)	A区 (I-6-16-F10-g8 II) 下層確認トレンチ サルノコシカケ (樹木)	-27.2	4680 ± 70	cal BC 3500 cal BC 3430 cal BC 3380	cal BC 3620 - 3600 (10.4%) cal BC 3525 - 3370 (89.6%)

なお、暦年代校正の詳細は、以下の通りである。

暦年代校正

暦年代校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を校正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、更に珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の構造的堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、校正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に校正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に校正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代校正値は¹⁴C年代値に対応する校正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行なった。暦年代校正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、「A区下層確認トレンチ・イヌガヤ（樹芯）」の年代はcal BC 3805 - 3665年が、「A区下層確認トレンチ・サルノコシカケ（樹木）」の年代はcal BC 3525 - 3370年が、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

<引用文献>

中村俊夫 2000年「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program. *Radiocarbon*, 35, pp.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon* 40, pp.1041-1083.

第V章 まとめ

本調査では、奈良時代中期から平安時代初頭のA区溝27で検出した井堰遺構が、主要遺構としてあげられる。その他、建物跡など建築関連の遺構は検出されなかった。また、主要遺物としては、縄文時代早期から前期、古墳時代前期、奈良時代中期から平安時代初頭の遺物群があげられる。

以下、各々の成果について、古い順から時代を追って述べ、まとめたい。

(1) 縄文時代早期の土器

縄文時代の遺物は、本調査とほぼ同時に実施した讀良郡条里遺跡（その2・3）、小路遺跡（その2・3）、高宮遺跡（その2）の調査においても比較的多量に出土している。前期から後期を通じて各時期の土器が認められるが、これらの土器や石器の遺物群の中にあっても、特に前期の縄文土器が多数を占めている。とりわけ本調査区で検出した早期条痕文土器の出土例は、大阪府下においても過去数例のみに限られており、極めて貴重な資料となった。周辺の調査例でも、前期の高宮遺跡、中期初頭から後期初頭の讀良川遺跡、後期から晩期の更良岡山遺跡、晩期の長保寺遺跡、高宮八丁遺跡などが知られているが、早期については未確認であり、今後実施される周辺地域の発掘調査において更に出土例が増加するであろうと期待される。

(2) 縄文時代前期の植物遺存体

A区下層確認トレンチにおいて縄文時代前期の土器と共伴して検出されているイヌガヤ381は、自然科学的分野の測定結果によって、BC 3805-3665年からBC 3595-3550年に及ぶという具体的な年代範囲の確認が得られた。この成果によって、大木のイヌガヤ381は縄文時代前期の植物遺存体である事が判明した。この地域の縄文時代の植生環境を復元する上で重要な資料であり、年輪年代測定法の発展にも貢献しうる絶好の資料となった。

(3) 古墳時代前期の土器

周辺部の調査例では、古墳時代前期の土器群の出土例はそれ程多くなく、A区第5遺構面で検出した溝19出土物の資料的価値を高く評価できる。同時に調査を実施した東側の小路遺跡（その3）では、今回新たに古墳時代前期の前方後方形周溝墓や方形周溝墓が検出されており、溝19出土資料は、周辺遺跡との総合的な検討を踏まえる中で更に資料的価値が高まるものと考えられる。

(4) 奈良時代から平安時代の井堰遺構

A区第4遺構面で検出した溝27の井堰遺構は、当時の灌漑施設である井堰の構造や築造技術の一端を示す事例として注目すべき遺構である。水流の方向に対してやや斜行して杭列を設置した堰1や堰2杭列3などの構造、堰2から溝28にかけた取水口の構造、環流機能を果たしていたと考えられる溝27Bなどの構造、この環流した水流を制御する様に設置されたと考えられる堰2杭列1・2の構造は、また杭列1・2は制御すると同時に水流によって崩壊し易くなった層部の護岸的な機能も併せ持っていたと理解される。杭を打ち並べる方法は、堰2杭列3などの検出状況から判断して、杭列2条を一組にして設置していると理解したが、杭列の倒壊に備えて補強のために順次打ち並べた可能性も否定できない。同種遺構との比較検討も必要であるが、井堰遺構の調査事例は限られており、理解されない点も多々みられる。当時の井堰築造技術がどの程度の水準に達していたのか、頭首工の構造の歴史的な解明に向けて、今後とも検証すべき課題としておきたい。

奈良時代中期から平安時代初頭の溝27は、遺構規模や多量に祭祀遺物が出土する事などからみて、当時、この地域の幹線水路であった可能性が高いと考えられる。仮に幹線水路であるならば、平安時代初頭に埋没すると同時に、他の場所に付け替えられたものと想定されるが、以後、調査区内においては耕作地として一変し、その経過が辿れない。但し、A区第1遺構面西壁沿いに肩部ラインを検出した溝32が、現在の幹線水路の前身であるとも考えられる事から、溝27は現在の用水路の位置に付け替えられたと想定する事も可能であり、そうすれば幹線水路として機能していた溝27の歴史的な変遷は現代まで辿れることになる。

また、祭祀遺物が出土している溝29についても一連の用水に伴う遺構である可能性が高く、これら溝27～29は、古代条里制を背景とした灌漑設備と周辺地域との関連性を解明する上で基点とも成り得る遺構であり、讃良郡条里遺跡における景観復元を考察する上で重要な手掛りとなる遺構である。

(5) 奈良時代から平安時代の祭祀遺物

A区第4遺構面の溝27から出土している絵馬315には、左下に「神馬」と改めて念を押す様に墨書で記されており、これまで全国で出土している32例の古代絵馬の内に、この様な文字が書き添えられた例はない。また、絵馬316については、彩色した古代絵馬の出土例がこれまでわずかに5例と数少なく、特に白馬を描いた絵馬としては初めての出土例となり、これほど残存状態の良い絵馬も希少な例といえる。共に保存状態は極めて良く、今後とも古代の出土絵馬の代表的資料となるであろう貴重な発見であり、共伴出土している他の祭祀遺物と共にどの様に祭祀の場で用いられたのか、今後とも検討すべき課題である。

人面墨書土器は、都城を中心として、北は秋田城や多賀城、南は大宰府に至るまで広い範囲で出土しており、それらの土器に描かれた顔の表情は様々である。A区溝27出土の人面墨書土器については、比較的少量に出土している事、現代の感覚にも通じる様な個性的でユニークな顔が多い事、また、描かれた顔の特徴が秋田城出土の人面墨書土器に描かれた顔に類似する例(183・191)が確認される事などが注目されることである。

これらの祭祀遺物は、古代人の絵心や技術、願いや祈りなどを雄弁に物語る資料であり、考古学的手法では限界のある精神的あるいは宗教的な世界観を追求できる興味深い資料である。

溝27出土の祭祀遺物の時期については、出土遺物に古くは縄文時代の混入遺物まで含まれる事から、層位的な出土状況から細分化して整理作業の中で追求できるのではないかと考えていたが、溝内の上層(第1層)から最下層(第4層)に至る堆積状況は攪拌状態が著しく、時期幅を具体的に絞り込む事が困難であった。この事は、出土遺物の層位的な整理や検討からも明確にされている。但し、溝27の時期については、出土遺物の中でも土師器杯(106～109)や皿(110)などが8世紀中葉(平城宮Ⅲ・Ⅳ型式)以降に比定できる事から、上限は奈良時代中期(8世紀中葉)以降の時期と推定し、下限は溝の最終埋土と考えられる上層(第1層)から出土している須恵器や軒平瓦(164)などの時期から、奈良時代末から平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)と推定している。これらの事から、祭祀遺物の時期は、この溝27の時期幅に収まるものとみられる。人面などが描かれた土師器甕の土器型式について、更に時期区分を絞り込んで、前半の8世紀中葉の方に位置するのか、あるいは後半の8世紀末～9世紀初頭まで降るのかという問題については、土器類の編年研究の進展とも併せ、今後の課題としておきたい。

(6) 奈良時代から平安時代の木簡

木簡の出土はわずかに1例のみで、記載された「高望郷尾□□」の内、解釈可能な語句が地名と考え

られる「高岡郷」に限られた。管見によれば、高岡郷の地名は、播磨国神埼郡、阿波国三木郡、土佐国高岡郡などにみられる。文字史料は今後とも周辺地域での調査成果との関連を含め、讃良郡条里遺跡の様相を知るうえで具体的な契機となる重要な資料と考えられる。

(7) 讃良郡条里遺跡の歴史環境

これまで讃良郡条里遺跡の調査では、奈良時代の遺構および遺物については殆ど検出されていない、といっても過言ではなかったが、今回の調査では本書に報告した様に多彩な成果を得る事ができ、その時代的な空白部分の幾分かを埋める事が可能となったと考えられる。

今回、国内第一級の考古資料ともいえる保存状態の良好な絵馬を始めとして、多様な祭祀関連の遺物が出土した事によって、奈良時代中期から平安時代初頭の祭祀遺跡と判明した調査地周辺の歴史的環境については、改めて検討する必要が出てきたといえる。

即ち、調査地北側丘陵上の白鳳時代創建の高宮廃寺や、大型倉庫が遺ち並ぶ飛鳥・奈良時代の集落を確認している高宮遺跡と隣接する事、今回同時に実施した西側および南側の讃良郡条里遺跡（その2・3）の発掘調査では平安時代前期の掘立柱建物や船材を転用した大型井戸などが検出され、官人が出仕に際して装束に付ける石帯の一部である巡方や丸網などが出土している事など、周辺遺跡の地理的な立地条件や配置関係、遺構・遺物の性格などを総合的かつ立体的な観点から検討する事によって、調査地近辺に地方官衙など律令国家と直接関連した遺跡の存在が想定される様になった。

古代河内国讃良郡の郡衙跡は、これまでの発掘調査の成果などから讃良川流域の讃良寺跡周辺と推定されてきたが、今回の発掘調査で得られた新たな成果により、有力な候補地が更に一つ増えたといえる。今後実施される周辺部の発掘調査に期待したい。

註1 縄文土器の鑑定については、泉 拓良氏の御教示を得た。

宮本飛鳥・黒須亜希子 2003「高宮・小路・讃良郡条里遺跡出土の早期～前期縄文土器」【大阪文化財研究】第24号（財）大阪府文化財センター

石器については、近刊予定の三浦基行「讃良郡条里遺跡（その1）出土の石器」【大阪文化財研究】（財）大阪府文化財センター）を御覧頂きたい。

註2 出土しているイヌガヤS81は、輪切り状態にサンプリングして保管している。

註3 前田義明・長戸満男・黒須亜希子・島田裕弘 2003「讃良郡条里遺跡・小路遺跡出土の木製遺構について」【大阪文化財研究】第23号（財）大阪府文化財センター

註4 絵馬の鑑定については、小野山郎氏の御教示を得た。

絵馬を含め古代祭祀の遺構遺物全般については、本センター理事長水野正好より多くの教示を得た。

島内洋二 2003「讃良郡条里遺跡出土の絵馬について」【大阪文化財研究】第23号（財）大阪府文化財センター

註5 人面罍書土器の時期推定については、小森俊寛氏の御教示を得た。

註6 木簡の判読については、榮原永達男氏の御教示を得た。

图 版



A区 第4道横面 汉27号出土 人面盂香土器 集合写真



1 A-2・3区ガヤ381出土状況【1】 (北から)



2 A-2・3区ガヤ381出土状況【2】 (北から)



3 A-2・3区 イヌガヤ381下端部 (西南から)



4 A-2・3区ガヤ381と根株出土状況 (西南から)



5 A-2・3区 下層確認トレンチ南壁断面 (北東から)

図版2 A-1区 第5遺構面 全景〔1〕
(古墳時代以前)



1 A-1区 第5遺構面 全景〔1〕 (上が北)
第4遺構面溝27他の発見状況が混在した全景撮影である。調査の進捗状況との調整から、この段階で実施した撮影である。

図版3 A-2・3・4区 第5遺構面 全景〔2〕 (古墳時代以前)



1 A-2・3・4区 B-2区 第5遺構面 全景〔2〕 (右上が北)



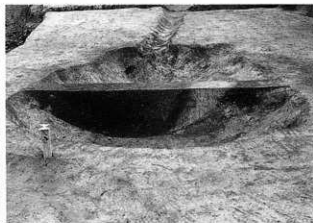
1 A-2・3・4区 溝33検出状況 (東南から)



2 A-1区 溝19検出状況 (西北から)



3 A-3区 風倒木1検出状況 (南から)



4 A-3区 風倒木1セクション断面 (西から)



5 A-3区 風倒木2検出状況 (南から)



6 A-3区 風倒木2セクション断面 (西から)



7 A-3・4区 第5遺構面 調査区西壁断面 (南東から)



8 A-2区 第5遺構面 調査区北壁断面 (南東から)



1 A-1区 第4遺構面 全景〔1〕 (右上が北)

溝27については、遺構の全貌が把握できず、上層(第1層)の一部を湿地状の遺構(落込1)と考えた検出段階での撮影である。



1 A-1・2区 第4遺構面 全景〔2〕 (右上が北)

溝27の遺構全体を可能な限り広い範囲で検出する目的から、A-1区の南壁側と東辺部を部分的に埋め戻して調査した段階の撮影である。B-1区では、調査の進捗過程から第1遺構面の全景撮影となった。



1 A-2・3・4区 第4遺構面 全景 (南東から)



2 B-1区 第4遺構面 全景 (東から)



3 A-1・2区 第4遺構面 溝27検出状況 (南東から)



4 A-1・2区 第4遺構面 溝27検出状況 (北西から)



5 A-1・2区 溝27環2南部検出状況 (東北から)



6 A-1・2区 溝27環2北部検出状況 (東北から)



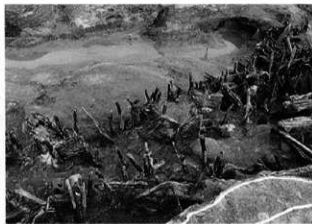
7 A-2区 溝27北壁断面 (南から)



8 A-1区 溝27セクション1断面 (南東から)



1 A-1・2区 溝27塚2杭列1～3検出状況 (南東から)



2 A-1・2区 溝27塚2杭列1～3検出状況 (西から)



3 A-1・2区 溝27塚2杭列1～3検出状況 (東から)



4 A-1区 溝27塚2杭列3上部検出状況 (南西から)



5 A-1区 溝27塚2杭列3下部検出状況 (南から)



6 A-1区 溝27塚2杭列3下部検出状況 (東から)



7 A-1区 溝27塚2杭列1断割り状況 (北東から)



8 A-1区 溝27塚2杭列1断割り状況 (北東から)



1 A-1区 溝27 絵馬315・316出土状況 (西南から)



2 A-1区 溝27 環2杭列1・流木・絵馬316検出状況 (西南から)



3 A-1区 溝27 絵馬315出土状況 (西北から)



4 A-1区 溝27 環2杭列1・絵馬316検出状況 (西北から)



5 A-1区 溝27 絵馬316出土状況 (西北から)



1 A-1区 溝27 人形322出土状況 (東から)



2 A-2区 溝27 人形318出土状況 (南から)



3 A-2区 溝27 塚2杭列2・人形323検出状況 (北から)



4 A-2区 溝27 人形323出土状況 (北西から)



5 A-1区 溝27 人形317出土状況 (東から)



6 A-1区 溝27 人形319出土状況 (北東から)



7 A-1区 溝27 塚2杭列3・人形320・326検出状況(東から)



8 A-1区 溝27 人形320・326出土状況 (北東から)



1 A-1区 溝27 塚2杭列3 人形検出状況(東から)



2 A-1区 溝27 人形321・324・325・327出土状況(東から)



3 A-1区 溝27 査串328出土状況(西から)



4 A-1区 溝27 木腿303出土状況(北から)



5 A-1区 溝27 曲物301・人面土器出土状況(西から)



6 A-1区 溝27 曲物303出土状況(南東から)



7 A-1区 溝27 塚2杭列1・曲物302検出状況(東から)



8 A-1区 溝27 曲物302出土状況(東から)



1 A-1区 溝27 堀2 杭列1・人面土器183検出状況(北東から)



2 A-1区 溝27 人面土器183出土状況(北東から)



3 A-2区 溝27 人面土器177出土状況(東から)



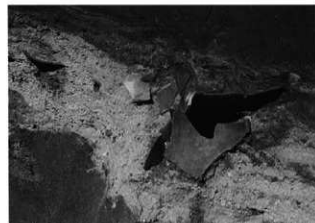
4 A-2区 溝27 人面土器185出土状況(南から)



5 A-2区 溝27 堀2 杭列2・人面土器181検出状況(西から)



6 A-2区 溝27 人面土器181出土状況(西から)



7 A-1区 溝27 セクション1 人面土器184出土状況(南東から)



8 A-1区 溝27 人面土器179出土状況(南から)



1 A-1区 溝27 塚1 杭列・底部穿孔土器170検出状況(南東から)



2 A-1区 溝27 底部穿孔土器170・須恵器壺117出土状況(北西から)



3 A-1区 溝27 塚2 杭列・底部穿孔土器168出土状況(南東から)



4 A-1区 溝27 土師器壺126出土状況(西から)



5 A-1区 溝27 土師器壺382出土状況(東から)



6 A-2区 溝27 土師器罎139出土状況(南東から)



7 A-2区 溝27 須恵器壺158出土状況(南東から)



8 A-2区 溝27 軒平瓦164出土状況(南から)



1 A-1区 溝27 獣骨356・肢骨出土状況 (南東から)



2 A-2区 溝27 獣骨383・肢骨出土状況 (北東から)



3 B-1区 溝1-2 獣骨384出土状況 (北から)



4 A-2区 溝27 銅鏡359出土状況 (南東から)



5 A-2区 溝27 サルノコシカケ385出土状況 (南西から)



6 A-2区 溝27 勾玉33出土状況 (西から)



7 A-1区 溝27B 石鏡30出土状況 (北東から)



8 A-1区 溝15 石鏡28出土状況 (西北から)



1 A-2区 第3遺構面 全景 (南から)



2 A-1区 第2遺構面 全景 (北から)



3 A-3・4区 第1遺構面 全景〔1〕 (南東から)



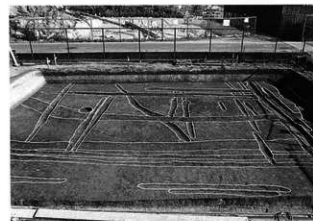
4 A-3区 第1遺構面 全景〔2〕 (北から)



5 A-2区 第1遺構面 全景〔3〕 (南から)



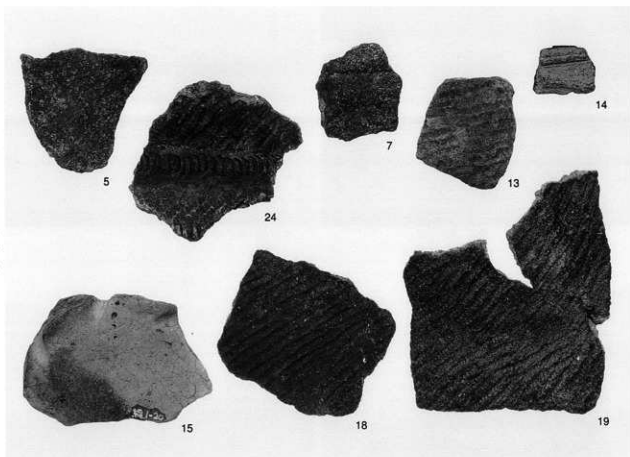
6 A-1区 第1遺構面 全景〔4〕 (北から)



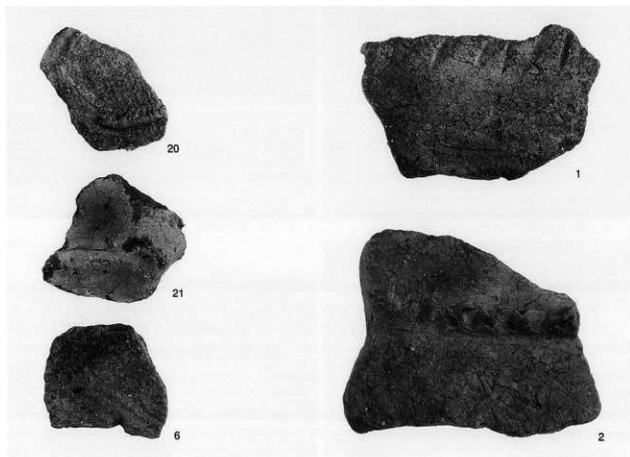
7 B-2区 第1遺構面 全景〔5〕 (西から)



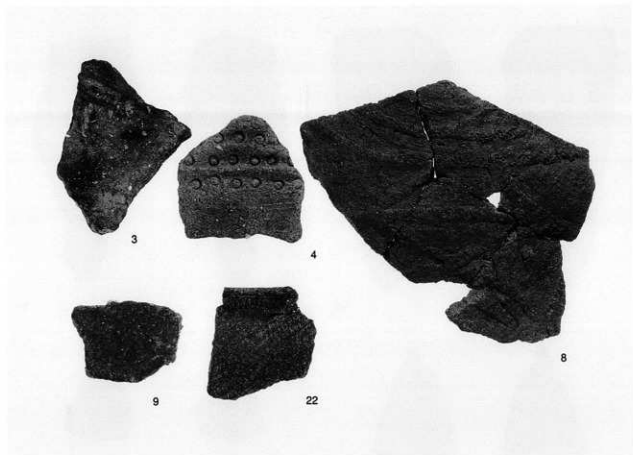
8 B-1区 第1遺構面 全景〔6〕 (東から)



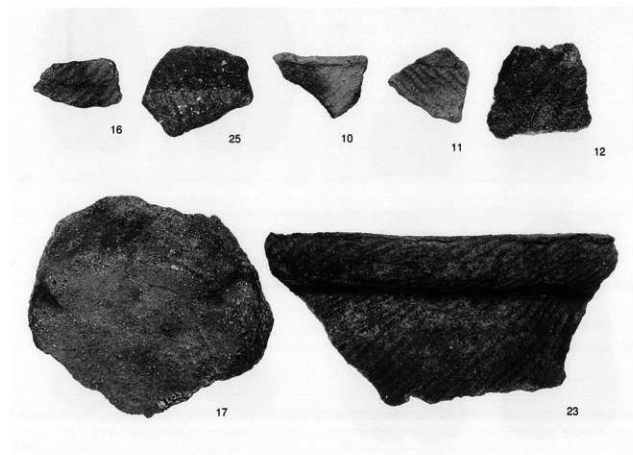
A区溝33 (14) A区溝27 (7・24) A区下層確認トレンチ (5・13・15・18・19)



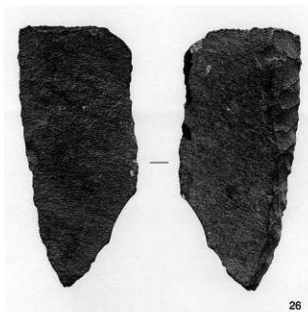
A区溝19 (20・21) A区落込9 (6) A区落込10 (1・2)



A区溝27 (3・4・8・9・22)



A区溝27 (10~12・16・17・23・25)



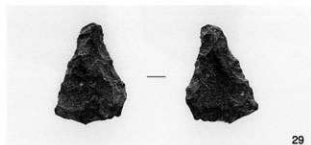
26



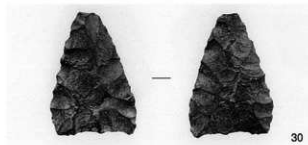
27



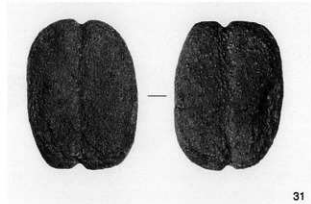
28



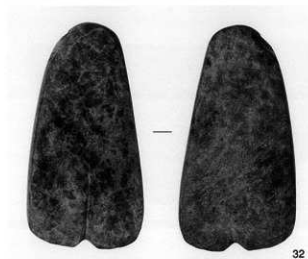
29



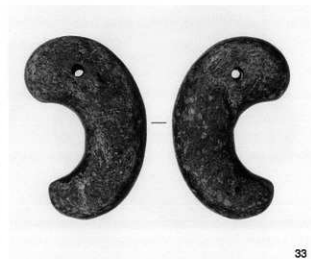
30



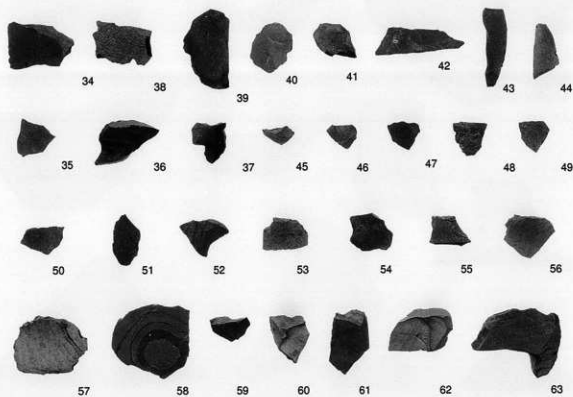
31



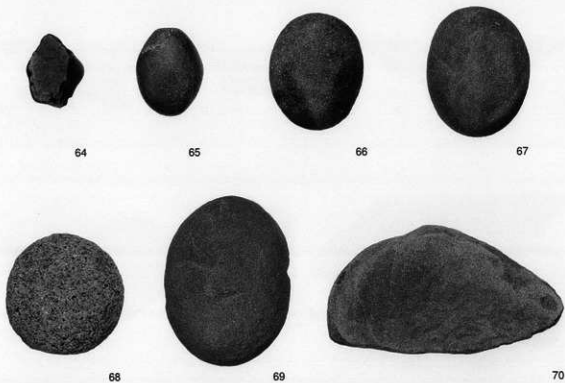
32



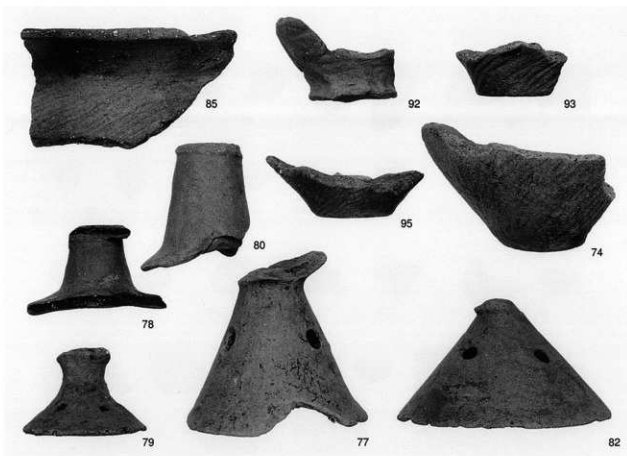
33



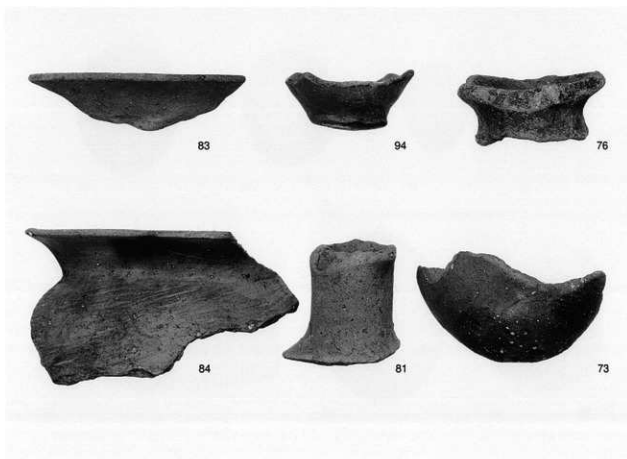
A区下層確認トレンチ (39・55・56) A区溝33 (34・47・58) A区溝27 (35~37・40・41・45・48・49・51~54・57・59・61~63) A区溝28 (43) B区溝1-2 (50) B区落込1 (44・46・60) A区④包含層 (38) A区②包含層 (42)



A区溝27 (64・66~70) A区落込10 (65)



A区溝19A (74・77~80・82・85・92・93・95)



A区溝19B (73・76・81・83・84・94)



71



72



75

A区溝19B (71・72・75)



89



96



90



91



88

A区溝19C (89・91) A区溝19D (88・90・96)



97



102



98



99



103



100



104



101



165



148



149



150



166



151



152



167



105



117



141



143



158



159



153



154



111



113



112



114



115



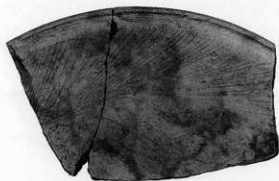
116



106



108



118



144



109



162



110



379



161



380



145



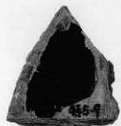
147



146



160



142



163



164



126



127



131



132



134



137



124



125



128



129



119



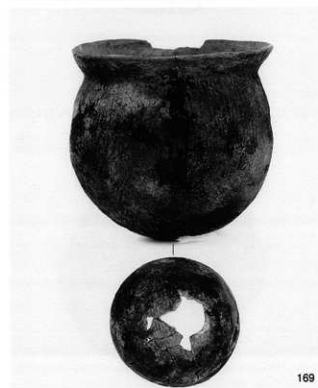
122



120



121





171



172



173



175



174



130



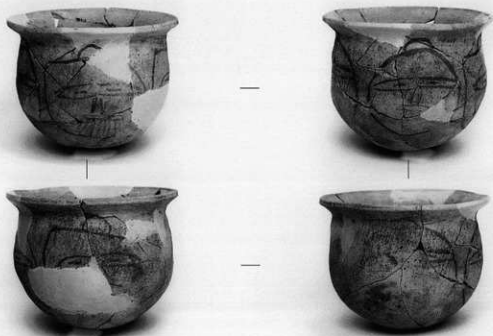
177



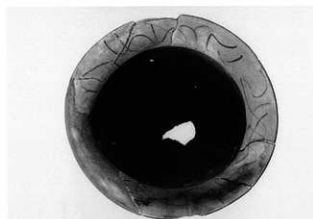
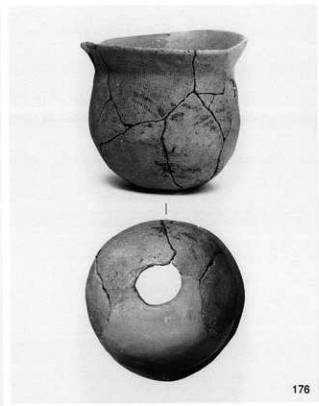
178



181



180





183



185



186



187



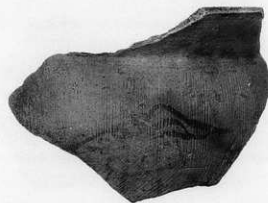
188



189



190



179



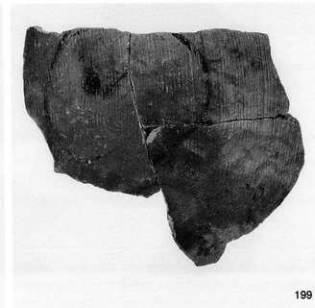
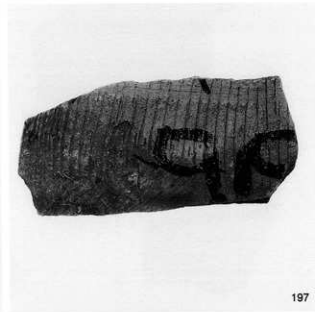
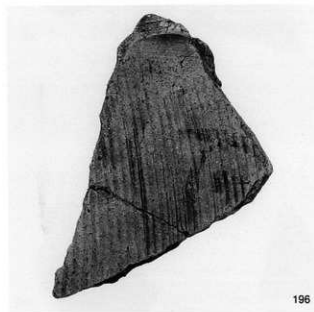
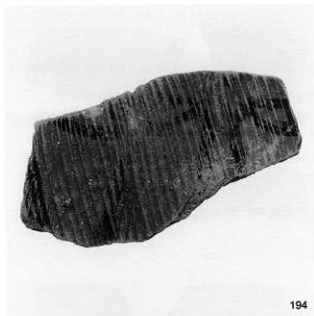
191

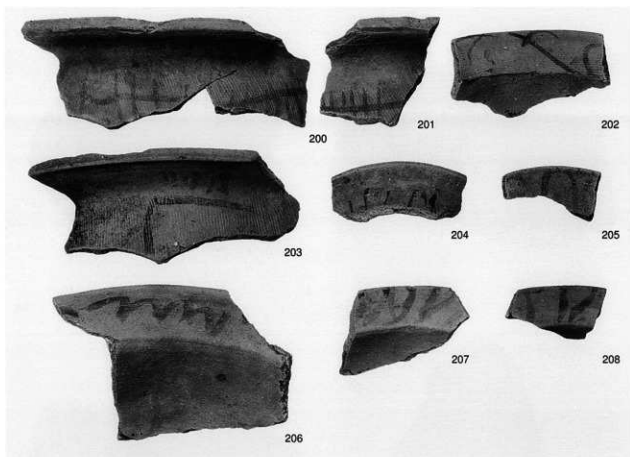


192

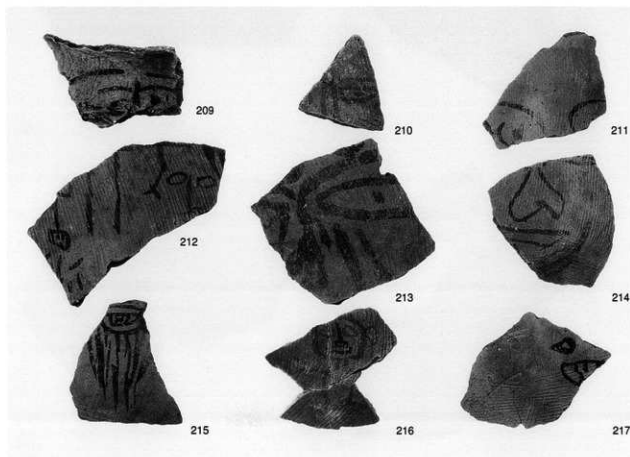


193

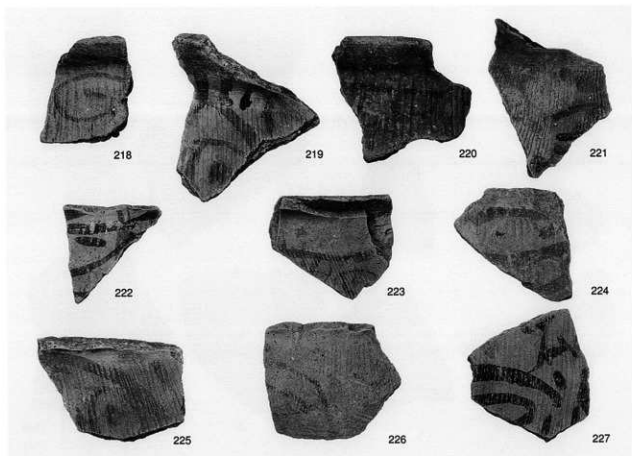




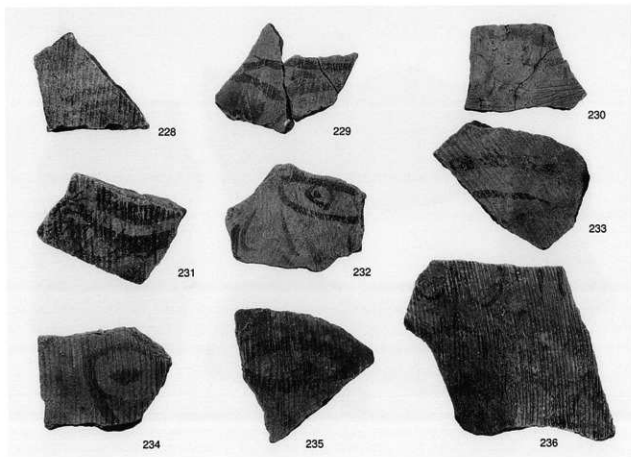
A区溝27 (200~202・204~208) A区溝28 (203)



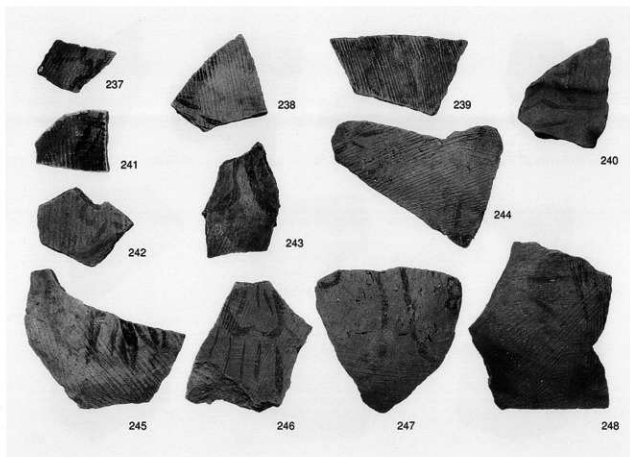
A区溝27 (209~217)



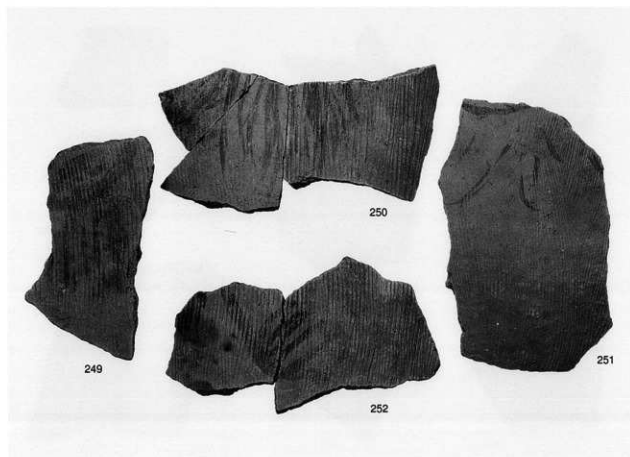
A区清27 (220~227) A区清28 (219) A区落込10 (218)



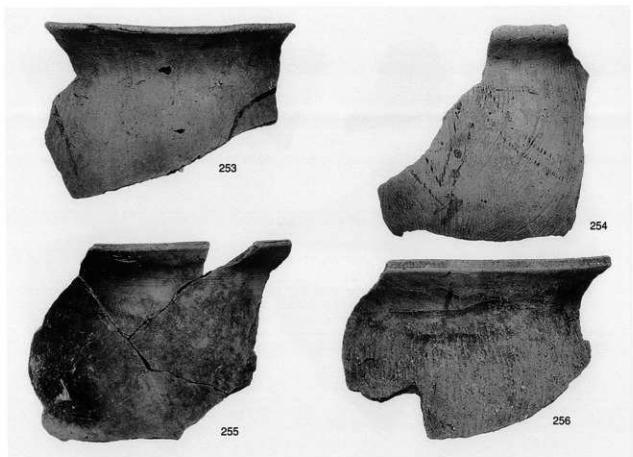
A区清27 (228~236)



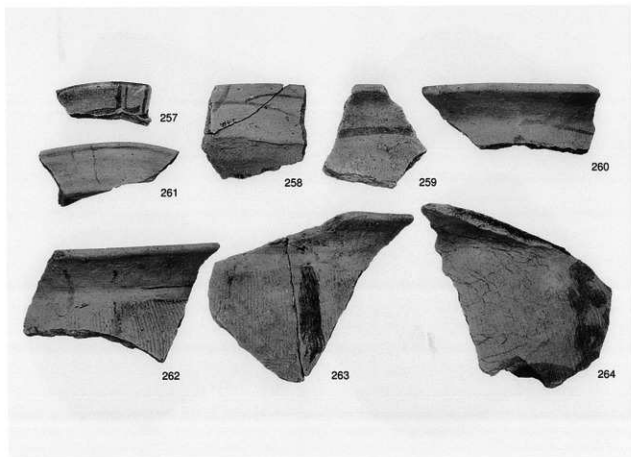
A区溝27 (237~248)



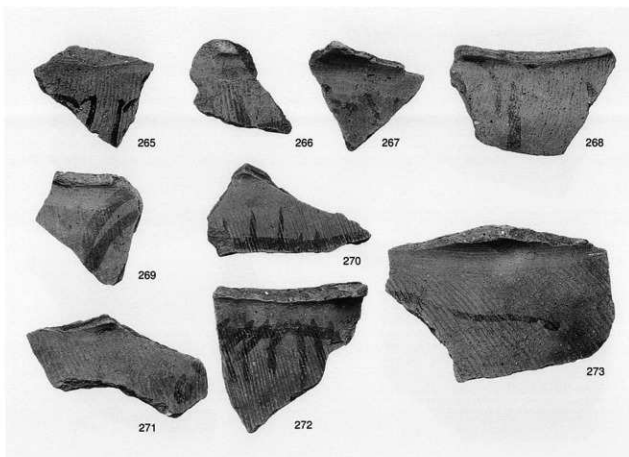
A区溝27 (249・251・252) A区溝28 (250)



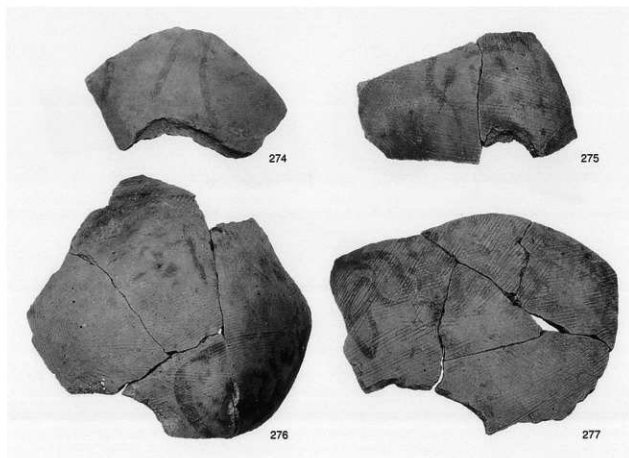
A区清27 (253~256)



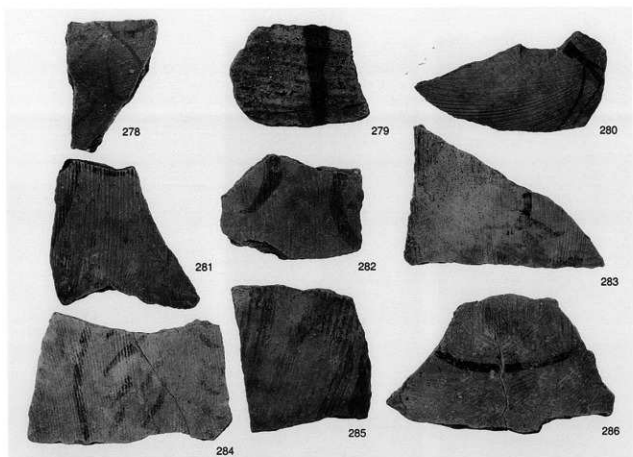
A区清27 (257~261・263・264) A区清29 (262)



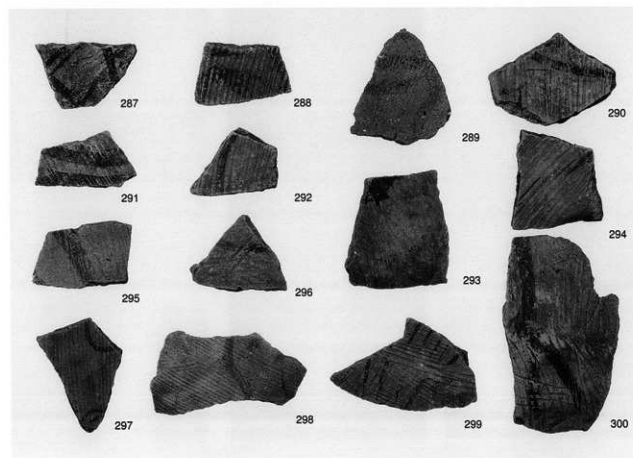
A区溝27 (265・266・268~272) A区溝28 (267・273)



A区溝27 (274~277)



A区溝27 (278~284・286) A区溝29 (285)



A区溝27 (287・288・290~300) A区溝29 (289)



177



180



181



183

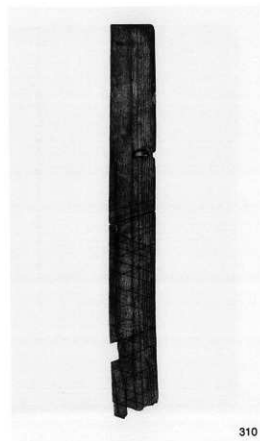
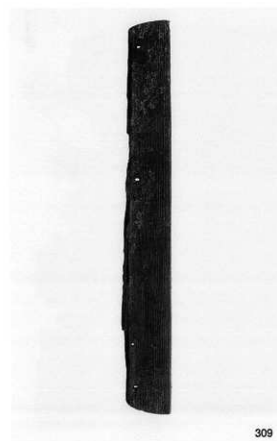
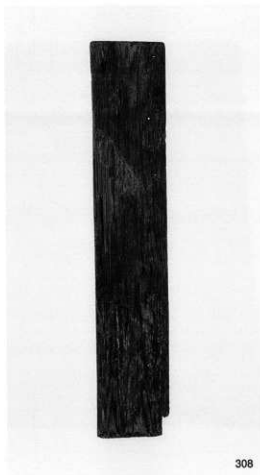
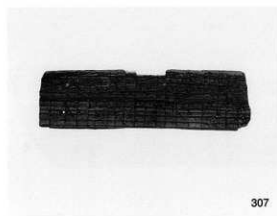
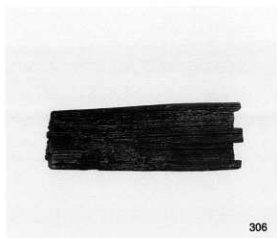


184



185



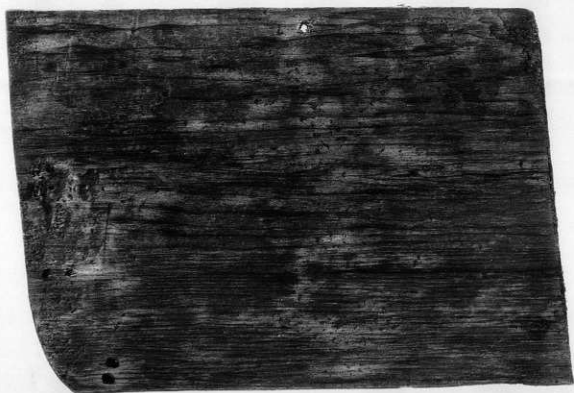




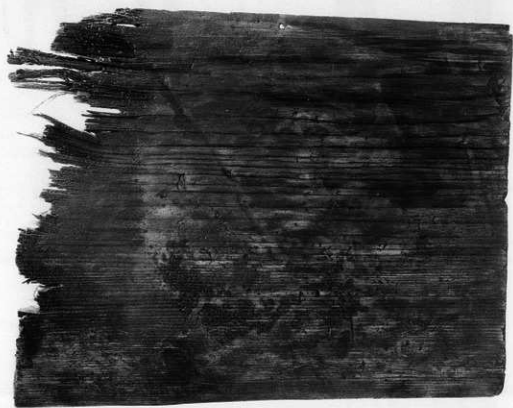
315



316



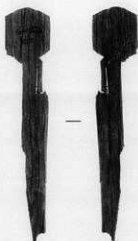
315



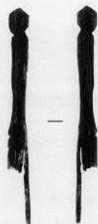
316



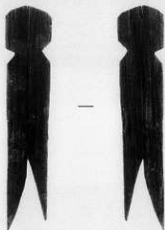
317



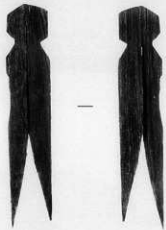
318



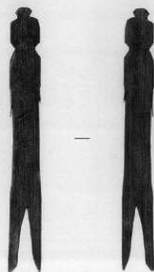
319



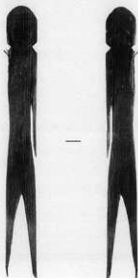
320



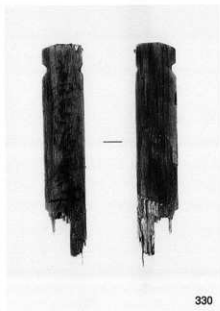
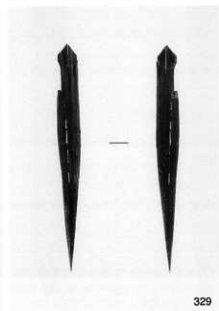
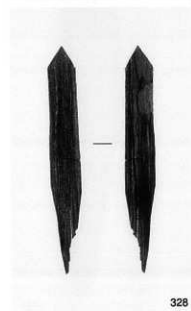
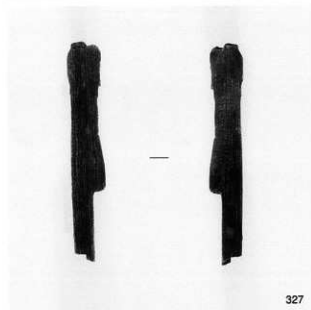
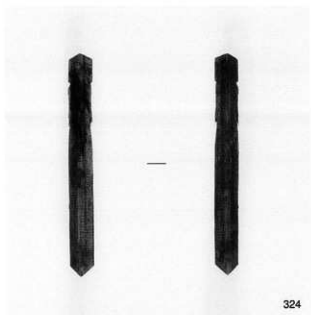
321



322



323





331



332



333



334



335



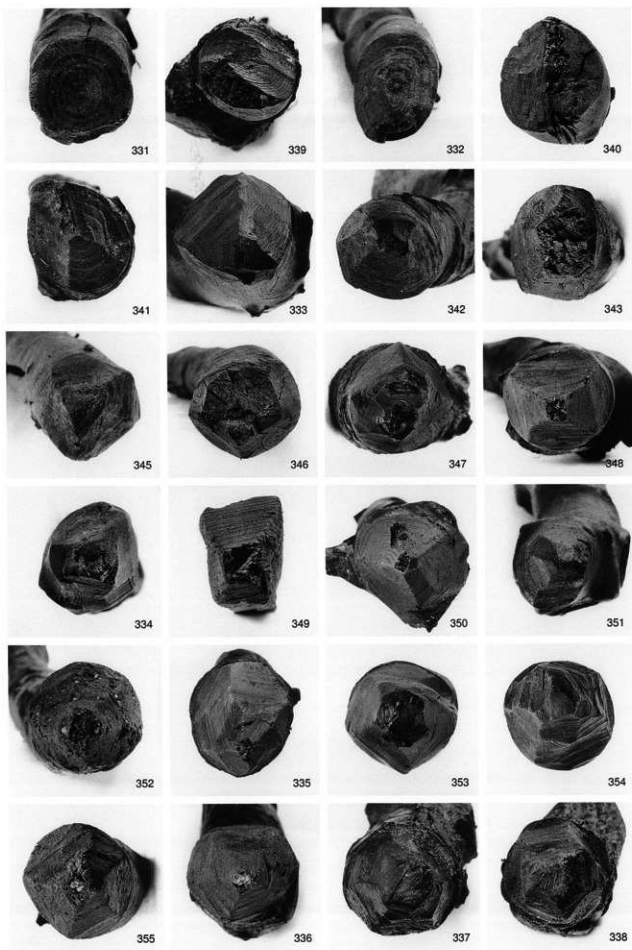
336



337



338

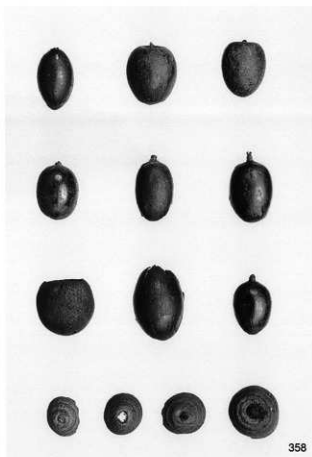






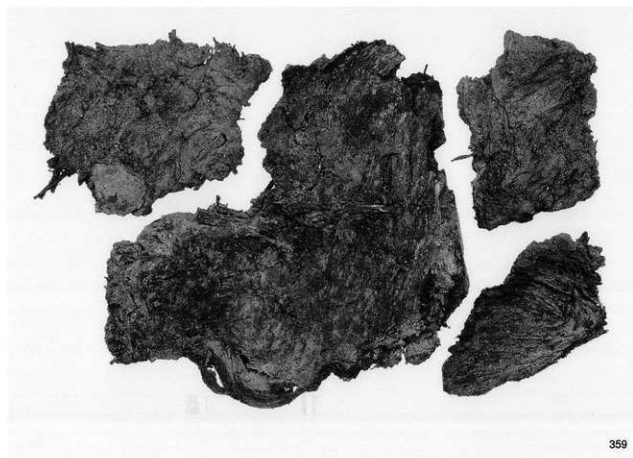


357



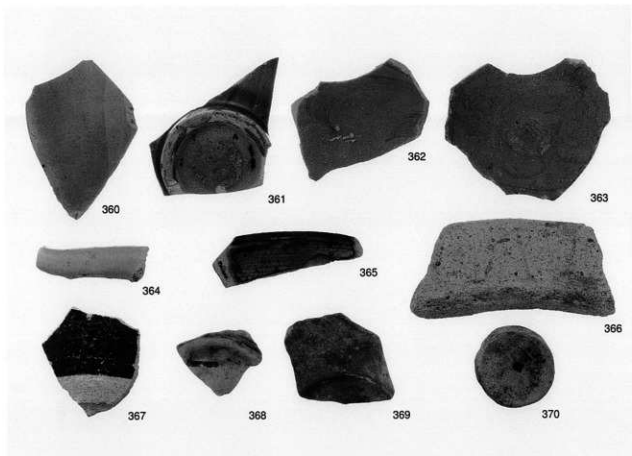
358

A区溝27 (357・358)

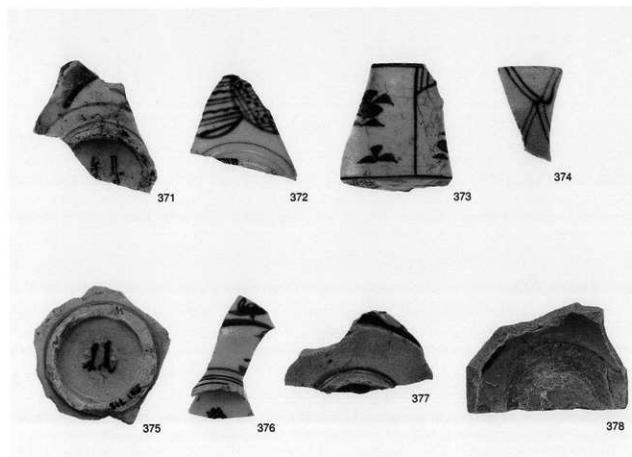


359

A区溝27 (359)



A区②包含層 (360~370)



A区②包含層 (371~378)

報 告 書 抄 録

ふりがな	さらぐん じょうりいせき そのいち							
書 名	讃良郡条里遺跡 (その1)							
副書名	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第109集							
(編)著者名	長戸謙男(編)							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2004年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さらぐん じょうりいせき 讃良郡条里遺跡	おやがわし たさのみや 寝屋川市高宮	27215	36	34° 45' 12"	135° 38' 13"	2002年3月1日 ～2003年2月28日	2,218㎡	第二京阪道路 (大阪北道路) 建設に伴う
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
讃良郡条里遺跡	自然流路	縄文時代		縄文土器・石器 植物遺存体	縄文時代早期・前期後葉の土器が出土			
	自然流路	古墳時代		土師器	古墳時代前期(庄内式期)の土器が出土			
	祭祀関連跡	奈良時代 ～平安時代	溝・井堰	土師器・須恵器 絵馬・人形・香 串・木簡・獣骨	奈良時代から平安時代の溝・井堰を検出 絵馬・人形などの祭祀遺物が多量に出土			
	生産域	中世	溝・足跡	土師器・瓦器				

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第109集

讃良郡条里遺跡 (その1)

一般国道1号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日: 2004年2月27日

編集・発行: 財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

大阪府教育委員会文化財調査事務所3階

TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905

印刷・製本: 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪府東成区湊江南2丁目6番8号